
宇宙世紀0084 ~ アースライトセレナーデ ~ 哀しみのフォウ編

月夜の熊猫ニヤア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙世紀0084〜アースライトセレナーデ〜哀しみのフォウ編

【Nコード】

N6211K

【作者名】

月夜の熊猫ニヤア

【あらすじ】

近未来サイバーパンク。

式拾壹世紀。ゼロ年代に世界大戦勃発。

それは、首都『ときよー』で起きた史上最大の自爆テロがきっかけで始まった。

荒廃した大戦後世界で生きる人々は、放射能やその他の影響でDNAに何らかの損傷を受けてしまっている。

〜大戦後の宇宙世紀0084。

九州にある地方都市。どこにでもありそうな平凡な場所。
そこで出会った、少しの病を抱えた少女と僕のものごと。たり。
不思議な運命に翻弄される『凜』と『僕』の冒険。

もしかしたら、こんな宇宙世紀ものが、あつたかもしれない。
となりあつたパラレルワールド。

宇宙世紀0084ではない別の世界への跳躍。

そこは宇宙世紀0Q84なのだろうか？

モビルガジェット、モビルスーツ等登場する予定。
ガンダムとブレードランナーへのオマージュです。

ゼロ年代大戦（前書き）

これは、預言の書なのだろうか？

黙示録・西暦2010年の夏・

もくじろく・

・

進行性の病と闘う少女と『僕』のものがたり。

運命の出会い、その人で始まってしまった。

別のだれかであれば、すべてが違っていたに違いない未来まで。

ゼロ年代大戦

（凜）

ゼロ年代。

三き世紀初頭。

2010年に起きた大惨事、それに続く大戦・・
あの世界大戦のあとに、生き残ったんだと気づかせるモニュメント
のひとつ。

国立医療センターの中枢。

『にほん』という国家は、そのとき世界一の無能ぶりを発揮したら
しい。

大戦の導火線は、『とうきよー』でのテロではじまった。
カルト教団のテロ事件がゼロ年代以前の世紀末に一度行われてるの
に。

予兆は消えずにくすぶっていたのに。

それは、あけなく再び行われた。

隣国に食糧危機に瀕した独裁国家があつたらしい。

そこにある、軍部が考えたことは国民の統制と監理。

外界との情報隔絶。情報コントロール。プロバガンダ。

『とうきよー』には、とうきよう湾というものがあつたらしい。

いまでは、湾ではなく大きなクレーターに変わってしまった。

そこに、その国の軍部の絶対命令を受けた一隻の原子力潜水艦が、
数年間海底に鎮座していた。

とうきよう湾の海底に。

仮死状態のように。いつかは眠りから覚めるように。

ずっと眠りがとけるのまっていたのだろう。

その貧しい独裁国家が原子力潜水艦など創る技術も、

もつことも管理することでもできるはずもない。とだれもが思っていた。

独裁国家は、隣接した2大国のどちらからか買い付けたに違いないけど、大戦後に法廷に出て証言できるような人は生き残れなかったらしい。

独裁者が突如亡くなり、内戦が始まり、大国の介入、国連決議での国連軍の介入目前で・・・

歴史的な自爆テロがおきた。史上最大の。

国家指令をつけた原子力潜水艦の艦長は忍耐強く待ち続けたそのときがきたことを悟った。

原子力潜水艦の機関部の暴走、そして近距離からの核ミサイル付きのトマホーク。

司令官と潜水艦の乗員は思ったに違いない。

これで、いい。『にほん』の首都は壊滅するが、母国はこれで救われる。

今日、すぐにも蒸発してしまう多くの命には申し訳ないが仕方がないことなのだ。

未曾有の自爆テロ。

その後の大戦後世界に私たちは生まれて生きてる。

さつき握手をした少年も同じ。

人類がゼロ年代に滅亡していれば、わたしたちはいなかったんだ。

そう思うと複雑な気分になる。

大戦で生き残った人々は、例外なくなんらかのDNAの損傷を受けたから。

核兵器の使用は、予想に反して限定的に使用された。

大陸間弾道ミサイルの大国同士の応酬は回避されたが、放射能が人類の生存を脅かすには十分の量が

大気中にばら撒かれたのだ。

ゼロ年代と言われた時代から、だいぶ経って今は宇宙世紀とよばれる。

大昔の2Dアニメーションの中にあつた宇宙世紀とは少し違つけど、スペースコロニーも筒型ではない。

でも、わたしたちが生きてる世界は、西暦から宇宙世紀に変わったのだ。

．．．．．
．．．．．
．．

私が見てる少年は、電動車椅子から怯えるような眼差しで上目使いにこちらを覗き込んでいる。

母親にそくされて、おずおずと手を差し出してくる。

わたしは、戸惑いそして、同じように手を差し出した。

その手の感じは、厚みがなく青白くかさかさ乾燥している。

ただ、痺れに似た湿った感覚が手から伝わってくる。

その少年の緊張が、微かな手の震えで感じることができた。

わたしは、反射的に何かを語ろうとしたが止めてしまった。

少年の外見からすれば、わたしと同じような病ではない。

その男の子の場合、見た目にも厳しい状況にあるのは理解できるし

．．
でも。

わたしは、

わたしは、すつとした見かけではわからないでしょうけど。

ここにいる少年と。君と同じくらい厳しい病に直面しているの。

気弱そうなの少年に話しても負担になるだけだし、こちらも気がひけるから。

冷たいね。君の手も。

でも、わたしの手のほうがもつと冷えてるよ。

身体は、すごく寒くて。手先より冷たいかもしれないよ。

少し同情してあげるから。

ふつと、思わずそのまま胸まで手を引き寄せようかともおもった。車椅子の『彼』は、ただわたしを不思議な感じでまばたきもせず見つめている。

なにげなく自分が思ったこと、やろうとした行動がわかってしまったら。

思っただけで、手をあっさり離してしまう。

ときどき理解に苦しむ行動にはしる。

それが知れるのが恥ずかしいのと、少しだけ気づいて欲しいときがある。

『彼』は怪訝な顔つき。

目の前の『彼』タイプかといわれれば、笑うしかないけど。

理想は、あくまでジョニーデップ。みたいな感じ。

難病をもし、もしも克服出来て生き続けられたら、海外で暮らしたい。

『彼』に軽くお辞儀をして、少しこのホールを出てみようと思った。なんだか少し気分が悪いし、お世辞にも体調は良くない方向にむかっている。

気にするな。どこかで、母親が離婚した実父の声が心のどこかでこだまする。

その父と密かにあっていることは、あれだけ嫌っている母に告げることはできなかった。

密かな隠し事が、体調不良になんらかの影響を与えているなら、つらい。

そして、ドアを開けてホールを抜け出し、吹き抜けの通路を歩いてみた。

何度もここは訪れているから、初めてではないのに。

少しの違和感……

しばらく歩いてみよう。

回廊のようなエントランスは、緩やかに下ってる。バリアフリーの通路は、時に不便だったりする。

三半規管が弱いものにとっては、酔ってしまいそう。

この世界で幸せな人生を送ってるひとつているのだろうか。

わたしは、ふっと思考に入る。

何気ない日常を過ごして、安眠についたあと・・・(わたしは、眠れない)

目覚めたとき、その自分が昨夜眠りについたあの自分であることを確信できる？

自信がある？

本当は確かめることって出来なくなくて・・・

眠ってる間は、自分が過ごしてる『日常』とかけ離れたところに意識はある。

時にそれは、ノンレム睡眠時に起きる『ゆめ』でしかない。

ゆめでしかないと思ってるだけだとしたら？

思いこみ。

目覚めてると思いきんでる世界が『悪夢』で・・・ゆめでしかなくて

『ゆめ』の時間が現実だとしたら。

入れ替わることができればと。

時に誰しも思うことかもしれないし、意外と真実かもしれない。

ありえないと、わたしは笑う。

こんなことを誰かに話したら、きっと大丈夫？って言われるよね。

それこそ、先が心配だと。

この難病管理センターの近くに国立の研究施設が隣接してる。

わたしは、そこに住んでる住民のひとり。

多くのスタッフのおかげで生きてる。生かされてる。

わたしも、生きていたとい思ってた。

母親も兄もそう。

でも、

でもね、みんなが同じじゃないから。

ある年齢を過ぎたら、逆のことを考える時間が増えた。
考え込んでしまう。

それで、思考の殻に閉じこもることが多くなった。

・
・
・

アースライトセレナーデ・1（前書き）

（光学迷彩とは、カメレオンのようにあたりの風景に溶け込む技術。視覚的に消える。）

モビルスーツの外装に埋め込まれた無数の微小ビデオカムがあたりの風景を捕らえる。

それをモビルスーツに搭載されたコンピュータ端末が解析し、ラウンドに暗号化し情報処理（画像処理）を施して高度に発展をとげた『記憶合金』にデーターを反映させる。

ナノレベルで瞬間瞬間にモビルスーツの外装の質感や色彩をかえていくことであたりの風景に完全に溶け込む技術である。

地球の地上戦のほうが、搭載されたコンピュータへの負荷が高い。連邦のモビルスーツの場合、負荷軽減のため軍事中枢コンピュータとリンクして光学迷彩を行うこともある。

視覚的に単調な宇宙のほうかに向いている。

（光学迷彩の弱点があるとすれば、それは水と水蒸気であろう。）

アースライトセレナーデ - 1

宇宙世紀0084年1月4日 PM 2:29

治安維持車両に積まれたスピーカーからきこえる交信で救難要請に
応じて援軍が駆けつけてくれそうだが、
劣勢を盛り返せるかもしれない。

こんぺい島・・・

アクシスの騒乱は、ここに住む市民と過激なテロ団体が混在して治
安を守る側にとって厳しい状況になりつつあった。

銃撃の音は絶え間なく続いている。

「まもなく合流する」

ティム・アキルソン警部補が陣頭指揮にあたっているが、地元警察
での力ではこれが手いっぱいだ。

「ティム警部補、SWAT隊はすべてのビルに配置完了しています。」

そばにいるリック・ディアス刑事が撃ちぬかれた肩から出血をおさ
えながら苦しげに伝える。

「伏せる!!!」

誰の声とも識別できない声が警告する。

「RGP!!!」

ティムの近くで4、5人の人影が炎と巻きあがる爆風に飲まれた。
タン、タン、タッタ、タ、!!!
さらに近くで銃弾が跳ねる。

跳弾が盾にしていた横倒しの車と瓦礫の間を飛ぶ。

「タムラが、頭に。」

うめき声がある。

「死んだのか?。」

「いいえ、気を失っていますが頭部にかすり傷です。警部補。」
陽気なエバンズマンも陰気な声で力なく応える。

「かこまれてるな。・・・」
ティムがひとりつぶやく。

エバンズマンがかかえている銃は、連邦の標準歩兵仕様である。
ただ、一般市民や犯罪者用に使用するために高性能な機能を省き簡素化されていた。

今、使っている弾丸は、5ミリ口径の催涙貫通弾である。
人体を貫通して穴をあけてくれる。

さらに、神経毒を含んでいるのでしばらく寝ておもらうことになっている。

殺傷能力は、きわめて抑えた武器だ。

「エバンズマン、弾たまをかえろ。ブルーチップでカートリッジをいっばいにしておけ。」

「ハンス、キム、さがれ！。タムラを連れていけ。
あそこの治安車両に怪我人を集める。」

時間をあたえてくれる優しい連中ではない。

銃撃音が近くに、遠くに響きわたる。

西方向での騒乱を一時的に鎮静化したことを確認した2台の装甲車両は、ティムらが応戦しているすぐ前を通っていく。

装甲車の上部指揮ハッチには、防弾チョッキと装甲ヘルメットをかぶったリチャードソンがいた。

リチャードがティムに見えるかたちで、頭に敬礼のようなしぐさをする。

「リチャード！挨拶はいいから、気をゆるめるな。」
装甲車両が抱えた催涙ガス弾が発射された。

派手な煙幕がもうもうと立ち上がりティムらの前に壁を創ってくれる。

2台の装甲車両に隠れるようになってきていた、治安維持機動隊が雄たけびをあげながら群衆に突っ込んでいく。

突入。

そこに、ティムは湧き上がる煙幕の中にその場にふさわしくない人影をみた。

なにかの勘がティムを突き抜ける。

「退避だ。全力で、走れ。退避だ！！」

エバンズマンもリックも、号令に応じ全力で駆ける。

ティムの声が聞こえた警官たちは、一斉に走り出す。

数秒もせず、激しい地響きと炎があたりを焼き尽くした。

立ち上る炎柱のあとに猛烈な突風が吹き、伏せている人影を軽々と瓦礫やビルの壁に叩きつける。

天空を突き抜けるような煙が、高層ビル群の各所で射程を構えて待機していたS W A Tの狙撃隊員らを包む。

低空を飛行し、警察からの飛行制限と規制を無視して取材を続けていたマスメディアの取材ヘリコプターが黒煙の中にすっぽりはいる。必死に頭を抱え身体を這いつくばらせて伏せているティム警部補の耳に、止まりかけたローターの音が近づいてくる。

すすけた視界の悪い状況の中をかすめとんでいったのは、墜落していく取材ヘリなのか違うのかわからなかった。

ヘリのパイロットは不時着を試みたようだが、機体を持ちあげるこゝとが出来ずに、機体の底が地面についた状態で回転運動をはじめている。

機体が斜めにかたむきはじめると回転していたローターのプロペラがみさかいかもなく地面と人影を切り裂いていく。

警察が築いたバリケードの堅いブロックの塊にヘリのプロペラ翼が接触した。

プロペラが折れる。

制御不能になったヘリの機体は、パイロットのコクピット方向から横転していた装甲車両に衝突した。

轟音と地鳴りが鳴り響く。

風と炎に吹き飛ばされるあらゆる物たち・

サックスマン銀行ビルの近く、下水口につながるほんの少しのくぼみに潜んで必死に我が身を守っていたエバンズマンもリックも、あらゆるものが消し飛んでいく瞬間をスローモーションのように観ていた。

激しい火柱が数か所で同時に起こり多くの人命を飲み込んで消えていく。

「ミラー大尉だ。」

身動きならず地面に伏したまま気を失いかけていたティム警部補の肩を誰かが掴んだ。

「ミラー??」

「応援要請で駆けつけてきた。まるで戦場だな、ここは・・・」

ミラー大尉は、深々とかぶっている装甲ヘルメットを両手で上のほうにずらしながらしゃべっている。

柔和な細い目元からブルーの瞳がのぞく。

「自爆テロが発端で、次々と・・・」

ティムは、起き上がるうとするが、地面から浮遊した塵を吸い込み激しくセキをする。

「無理するな。自爆テロか。それで、なにがなんだかわからない状態になってしまったんだな。」

「・・・たく。」

「連中、こちらが想定していた以上の重装備で衝突してきましたよ。この狭い閉じられた都市空間でRGPなどぶつ放すなど、どうかしている・・・」

ティムは腕にはめたガジェットを操作して、大気の酸素濃度を確認する。

「安心しろ。大気漏れが起こるほどの爆発ではなかったようだ。アクススは、外の攻撃からは強いが内部からの攻撃にはもろいのもしれん。今後の参考になるよ。」

ミラー大尉は、肩ひざをついたままで、装甲ヘルメットの右側面に

ある片眼のゴーグルを覗く。

キューン・・

ミラーとティムは、とっさに地面に伏す。

ミラーがヘルメットで隠れた顔を出して右に伏しているティムに微笑む。

ティムも、力なさげに軽く手をふり生きていると合図を送る。

「狙撃されたな。どこかのビルからスナイパーが狙っているわけだ。」

「

ミラー大尉が伏したままで振り向いた方向に、ミラーが引き連れてきた隊員が遮蔽物に隠れて潜んでいた。

ティムとミラーから5メートルほど後方だ。

「スコット、ティーラ、マーク！。生存者の確認は出来たか？」

ミラー大尉は片目のゴーグルスコープであたりを索敵している。

「ミラー大尉。生存者の確認は大尉がいる場所から先にはできておりません。たぶん、いないものかと。」

市民が身に着けているID識別信号から出る微弱な信号からは、このデータ端末で見る限り生きちゃいません。」

特徴のある眼鏡をかけたスコット軍曹がおおきめのデータ端末を覗き込みながら応える。

「狙撃手のいそうな場所は検討がつきそうか？」

「解析中ですが、しばらくお待ちを。ミラー大尉。地球の砂漠地帯の作戦と比べたら惑星都市はそこらじゅうにカメラや識別端末がありますので楽かと。」

「光学迷彩を解除するコードは？。解析するために中央とリンクしているか？」

ミラーが尋ねる。

「光学迷彩は、水蒸気が多く大気に浮遊しているために使えないものと思います。光学迷彩を使っているような信号はどこからも発信されていません。」

「狙撃手は、生身でスナイプしてくるわけか。」

あきれたように、ティムがつぶやいた。

「警部補どの。これは、生身といつても人間じゃない。？、ネクサス？でしょうな。こちらを狙っているのは・・・」

「ネクサス？ですって・・・」
ティムが驚く。

「？（ナイン）が相手では、我々では手に負えない。資料不足だ。？（ナイン）には機動警察機構の特捜班が一番いいのではないですか。マーク！。どうだ。？」

ミラーが後方の小隊に手で合図を送る。

「今、確認とれました。ブレードが3人アクシスに入管しています。この『戦場』のどこかでネクサス処理のために潜んでいます。！」
マークの声は女性っぽいのはつきりとしている。

この小隊で二人目のメディックを担当していた。

「ティム警部補。ひとつ質問してもいいかな。」

ミラーは、周辺のビル群を高倍率のゴーグルスコープで索敵を続けながらたずねる。

「？（ナイン）が狙撃しているなら、標的まてをはずさないだろう。なぜだ。？」

「アクシス管轄の警察官が知っている特捜部からの情報はほとんどない、しかしやつらはベジタリアンだと聞いている・・・」

「ベジタリアン??」

「ああ、無駄な殺生をしない。？（ナイン）の寿命は限られているから、他の命を簡単ほかに絶つのを躊躇ちゅうちゆし嫌きららしい。あてにはならないがね。例外はどこにでもある。」

ティムは、緊張で乾いた唇をなめる。

「我々をしとめてくる可能性があるということだな?。」
ミラーが聞く。

「？（ナイン）も人生じんせいの晩年には、あそびをおぼえるらしいよ。『ころし』を楽しみ始めたらとめられない。」

ティムのため息が漏れる。

「スコット!。航空支援の要請を!!。アクセスG地区のa35d
8だ。通常爆撃だ。その間をぬって一時撤退する。後続の小隊にも
その旨を連絡しろ。無駄に進むとあそび相手にされちまうぞ。」

「ミラー大尉・・・」
力なげなティムの声がする。

銃口は同じく、ミラーの頭部にも向けられている。

ミラーは地面に伏した状態のまま上で上を見上げると、銃を持った少女がいた。

?(ナイン)・・・

「いつのまに・・・。クローズコンバットを学習してやがる。」

銃を構えたままで、少女の顔がわらった。

乾いた音が当たりに何回もこだまする。

宇宙世紀0083年12月24日 PM 10:11

デッカー刑事は、壊れていた。

ぼろぼろに壊れていた。

レイチエルを失くしてから、生きている実感がしなくなった。

ブレードランナーの職務であるレプリカントの処理をせずに、見逃
しただけでなく愛してしまうとは。

・・・
・・・
・・・

すべての始まりは、タイレル財団の会長を暗殺するためにレプリカ
ントが外宇宙から数匹侵入したというロサンゼルス警察からの連絡
を受けてからである。

ロサンゼルス警察の旧同僚から居所を見つけられるまで、デッカー
ドは次の『しごと』を探していた。

酸性雨の降る中、屋台が並ぶスラム街で立ち食いヌードルの席が空
くのを待っていた。

やっと席が空き、椅子に座るとデッカードはヌードルを二人前注文する。

屋台の店主が、デッカードの注文を聞きながら箸を渡すと一人前で十分ですよと身振りをする。

デッカードが、首を振り指で二つとブイの字を作る。それを二度繰り返す。

店主は二度首を振り、わかってくださいよとぶつぶつとつぶやきながらデッカードの注文を受ける。

不器用そうな手に掴まれたヌードル二人前分を煮立った鍋にほうり込む。

その間、デッカードは手首にあるガジェットでニュースを観たり、しごとサイトを検索していた。

(引退したブレードには、殺し屋の求人がよく似合う。そんなもの、あるはずもないが・・・)

デッカードの網膜がうずく。

- -
- - .

周りの色彩が次第になくなり、茶味がかつたモノク口調に観えはじめる。

ロサンゼルス警察で特捜班に着任して2年後には生活破綻者になっていた。

その前は、ごくふつ々の刑事にすぎなかった。

デッカードがニューヨーク市警にいたころ突然上司によべれた。

EQ検査を受けて欲しいと。

そして、検査結果が出た。

ブレードランナーの資格・・・。

ブレードランナーに選ばれることは、榮譽のあることではない。

まったくの逆だった。

その日、ニューヨークは雪が降り、クリスマス・イブの一日前だった。

家に帰り、待っていた妻にブレードに選ばれたことを語った。

彼女は泣いた。

すごく泣いた。

玄関先で立っていたデッカードの左に抱えた妻へクリスマスプレゼントのぬくもりが、さめていくのがわかった。

家に飾ってあるクリスマスツリーの輝き、妻が精一杯の愛情で用意していた料理が色を失くしていく。

フラッシュバック。

- - -
- - -
- - -

モノクロから色彩が戻ってくる。

店主がヌードルのお椀を気遣いもなく無造作に屋台のカウンターに置く。

湯気が立ち上っている。

デッカードのフラッシュバックは日に何度か起こる。

(・・・たく。)

デッカードは毒づいた。

(これが後遺症でやつか。・・・)

気が抜けたように、箸を割る。

隣の席が空き、細身の女性が座る。

デッカードは、左に座った女性に視線を泳がす。

性別、年齢、人種、・・・その他・・・レプリカントかレプリカント

以外か?? - - -

(・・・たく。ブレードのころと同じような癖が抜けない。俺は、もう終わっちまっているのに。)

ばやし癖まで身体に染み付いて離れないとデッカードは思う。

そこに、なにかで軽く右肩を叩かれた。

杖だ。

気配を感じさせないでデッカードのそばに近寄ってきた人物は、デッカードが知っている人間だった。

デッカードは、振り向きもせず断りのそぶりをする。

その男は、複雑な言語で店主に語る。

店主がデッカードを指差す。

「ユーは、ブレードランナー？」

「やめたんだよ。もう。そう伝えてくれ。少なくともこれを食べ終えるまではやめているんだ。」

店主が男に語る。

男がささやく。

店主は意地悪な笑みを浮かべ、デッカードに伝える。

「ユーをアレストすると。逮捕されたくないなら言うことをきけと。」

デッカードにとって居心地の悪い間があく。

観念したように、デッカードは首を横に振りながら立ち上がった。

ヌードルの入った容器と箸を抱えて屋台の暖簾をくぐり、酸性雨の降りしきる中に再び戻った。

ちょうどそのとき、デッカードの上を連邦政府の広報船が浮遊しながらゆっくり移動していた。

広告を満載にした飛行船型の自動巡回広告機が連邦政府のPRをしている。

『宇宙へようこそ！人類最後のフロンティアでああなたの夢を実現しませんか。宇宙は希望の地です。お問い合わせは、連邦政府の移民局へ！』

空飛ぶ移動広告機は、ブオーっと警笛のような不気味な音とともに軽薄な口調でロサンゼルス市民に語っている。

（夢などもない時代に。）

そう思いながらデッカードは、男が案内するところまで歩く。

陸空両用警察車両であるスピナーが下にいる制服警官の誘導灯に従

い、酸性雨の雲を抜けながら排煙をはきながら着陸した。

いつもの光景だが、人で溢れる街の中心にスピナーの強行着陸は多少の混乱をきたす。

ただでさえ、騒がしい中、4〜5人の警察官が身体で信号機のかわりに人や車の誘導にあたった。

スピナーから、操縦していた警官がおり男とかわった。

デッカーも助手席に座る。

日差しよけのサンバイザーにひっかけてあるインカムをとり、男は頭につけると操縦装置を左手でわしづかみにする。

左手5本の指をうまく使って、スピナーをホバーリングさせながら浮遊させる。

右手はマウスのようなスティックを握っている。

それをひく。

ゆっくり衝撃もなく、するするとスピナーは高度を上げ、上昇していく。

デッカーは、助手席から外を眺める。

ヌードルを抱えながら、スピナーのキャノピー越しに観るロサンゼルスは光景は綺麗で非現実的だった。

腐敗臭と汚物まみれのスラムでさえ幻想のように美しい。

その上により、右手に箸を持ち左手にヌードルを抱えている自分の姿は、滑稽な姿であると思った。

ヌードルをすすりながら迷惑そうに顔をゆがめて男を見る。

男は、警察無線にデッカーが知らない言語でなにかを語っている。

デッカーは、この男とスピナーの中でコミュニケーションをするのをあきらめた。

ただ、黙って乗っていることが無難なようだ。

スピナーは、静かに酸性雨の雲を抜ける。

垂れ込めた雲の中に、ロサンゼルスは摩天楼が消えた。

月明かり。

ムーンライト。

しばしデッカードは、キャノピー越しに観える満月の輝きにこころが奪われる。

（地面ばかり這いずりまわっていると忘れることが色々あるようだな。）

スピナーが空を滑空する。

酸性雨の雲を突き抜けた建物が、イルミネーションのように輝いている。

男はデッカードのほうをみながら、言語不明の言葉をはきながら捜査資料を手渡す。

スピナーは、次第に高度を下げていく。

（星に願う時間は、あつという間だ。）

ふたたび、スピナーは暗い酸性雲の下にもぐる。

降下地点は、スピナーが多数飛び交っている。

ロサンゼルス警察の本部ビル近くは、スピナーの離発着で混雑していた。

ビーコン誘導に従い、デッカードと男が乗ったスピナーが、ロサンゼルス警察のスピナー2番格納庫に収まる。

「デッカード、お帰りなさい。」

利発な眼をした女性捜査官が手をだして、デッカードに微笑む。

「家にはかえりたくない。特に古巣には。」

眉をゆがめ、不満そうな顔をつくるが長くはもたなかった。

「セイラ。君の前では、愚痴はいえないな。」

「わたし、デッカードの好みかしら？」

「冗談じゃない。俺は、グラマーなほうが好みだ。」

人差し指で、軽くセイラの鼻の近くの空間をつつく。

ほんの冗談が言える間柄だからできるコミュニケーション。

ロサンゼルス警察本部ビルの32階に連邦政府国際警察機構本部付捜査9課特捜班があった。

「レプリの処理は、もうやらない。気がめいるしごとは、いっさいやらない。」

腕を組み天井を見上げるしぐさをしながらデッカードはつぶやく。

「デッカード。それでも、あなたが必要な。あなた以上の腕利きのブレードはいないわ。」

「それは、単なるEQ検査の評価だろう。」

「違うわ。デッカード。それは、違う。」

セイラは、特捜班の中にいる医者、ドクターのひとりである。

ときに体調を崩し、ときに情緒不安定になるブレラン捜査官の心身の健康管理をしていた。

セイラは、ロサンゼルス警察本部情報統括管理部から捜査9課特捜班に臨時できていて在籍は捜査9課のデッカードとは違う。

「デッカード。レイチェルを救えるのは、あなたしかない気がするの。」

「レイチェル??」

デッカードがはじめてきく名だ。

「詳しくは、本部長と一緒に資料を觀みましょう。」

レイチェルは、現在のタイレル財団の一族のひとり。

会長の次の人物。俗にいうナンバー2つてところからしら。

会長の姪にあたるらしいけど。その姪をオリジナルとしてネクサスのプロトタイプが創られたの。」

「プロトタイプか・・・?(ナイン)以降の?。次世代版?。」

「ええ、オリジナルのレイチェルからさまざまな機能をダウングレードせずに創られた。」

レイチェルの22年分の体験や経験を記憶の中に擬似移植してある。身体のサイズもオリジナルからの移植してあるわ。」

セイラがさらりと言う。

「プロトタイプのそのレプリは、まだ市場には出ていないんだろう。闇市場にも。」

「もちろん。試作品一号よ。」

「あのタイレル財団の会長の姪のモデルか。少々気味が悪い。」
セイラが少し笑う。

「デッカードの趣味には合わないと思うわ。」

「タイレルの会長には似ても似つかわない雰囲気よ。」

「あの会長に似ていたら悲劇だ」

「おおげさにデッカードはセイラを見ながら言う。」

「レイチエルは、会長の『こころ』が造らせたまぼろしのようなもの。」

レイチエルの母が、ミスター・タイレル、フィリップ会長のの妹に当たるのよ。それも母違いの。

若いころのフィリップ会長は、レイチエルの母であるカミューイにぞつこんだつたらしい。」

「ものすごく気味悪い話だ。」

デッカードはその手の話には苦手意識が元からある。

深い入りしたくない気持ちだ。

「もう少し概略を話してもいいかしら？。デッカード。」

「どうぞ、つづけてくれ。本部長のくどい話きくよりはかどるよ。」

たぶん。」

「OK・・・レイチエルはかなわかったフィリップのこころの造形物となったの。」

オリジナルのレイチエルから許可をちゃんと得ていたのかはこれから事情聴取しなければ

わからないけど。

今のところ、レイチエルオリジナル本人から被害届は出ていないわ。

もし、本人の許可なくネクサスコピーを完全複製した場合処罰対象になるわけ。

国際連邦規約第51条項の3に抵触するおそれがある。」

少々セイラの口調が強くなる。

セイラが、女性だからだろうかとデッカードは思った。

「個人の慰安目的の製造は罪が相当重いぞ。」

しかし、タイレル財団の会長がそのような趣味があるとは。」

「ええ、財団の御曹司ともあろうお方が、単に個人的嗜好で新型を

製造するかどうかは疑問が残るわね。」

「セイラ、ダウングレードせずに造れるのか？そもそも、ネクサスってアンドロイドは？。」

デッカードにとってレプリカント狩りが必要なのか疑問が前からあった。

それは、4年間しか与えられていない寿命設定があるからだ。

ブレードが手をくださなくても、4年もたてば遠からず消えてなくなる。

命が消えた動かぬ金属と有機物の融合体となるだけだ。

そこにあるのは、『無』。

「超えられないウイルスの増殖や免疫不全で終わるようにDNAのなかでプログラムしてあるはず。」

でも、量子コンピュータの解析技術の進歩で、ナノ・マシンをレプリの血管に注入すると

DNAの書き換えが出来る可能性があるのも事実よ。」

少しの寒気がデッカードを襲う。

この格納庫は、やけに冷えるじゃないか……。まったく。

「オリジナルと同じ記憶と体験を持ち、外見まで双子のようになりふたつ。」

その上、寿命のリミッターまでカットされていけば……。」

セイラが言う。

「そうね。本人といれかわっても気づくひとはいない。」

オリジナルが消されて、レプリカントがオリジナルとして生涯を生きることだって可能だわ。」

デッカードが頭をかく。

「そのことに、なんのメリットがあるんだい。」

フィリップのかなわぬ恋のためでなかった場合、ことはやっかいな方向に行く。」

そして、デッカードは言う。

「プロトモデルは、自分をどう思っているんだ？」

レプリが、レイチエルそのものなら自分を疑わないだろう。そのレイチエルは、・・自分をオリジナルと思い込んでいるのとはわけが違う気がする。

思い込みなんかじゃない。・・・」
沈黙。

「おれは、この件にはかかわりたくない。降りるよ。セイラから話をきけてよかった。

俺にはまるでむかない『しごと』だ。

クサナギ本部長だごり押しされて断れないところだった。」

セイラが不思議な笑みを浮かべる。

「デッカードは断れないと思うわ。」

セイラは、そういうと歩き出した。

セイラとデッカードは、スピナーの格納庫から高速エレベータで3階にある特捜班のオフィスに降りた。

オフィスには、待ちかねたようにクサナギ警視が出迎えてくれた。

笑顔でオフィスの奥にある部屋へセイラとデッカードを導く。

ひとのよさそうな笑みは万人が善人と信じ込みそうだ。

しかし、クサナギ警視のその満面の笑みは、相手を油断させ欺くためにあることもデッカードは知っていた。

「デッカード君、実にひさしぶりだ。エルネスト警部、デッカードくんを連れ戻してくれて感謝するよ。」

これから、デッカードくとエルネスト警部にはロサンゼルス市民の安全と平和のためにおおいに尽力していただくよ。」

ロサンゼルス市民のことを一番気にもかけていそうにない男が語る。そくされて、デッカードとエルネスト、そしてセイラが席に座る。

「お手持ちの捜査資料にあるように、そこからレプリが3匹、連邦の監視網をぬって地球に不法侵入した。動機は、タイレル財団 総帥の暗殺目的と一応なっております。」

正直、動機は不明だが第1次レプリカントの反乱のような事態になっ
てしまつては、連邦も警察機構も面目がはなはだ潰れてしまふ。
デッカードくん。

うん？

どうした。？」

デッカードは、返事をしない。

青ざめ、心拍数が上がる。

身体の細胞が縮む。

捜査資料の手配中のネクサス？（ナイン）の中に『じぶん』がいた
からだ。

「だいじょうぶかしら。？」

セイラがデッカードの異変に気づく。

「説明は、わたしがするから、セイラ君はそのままです。」

クサナギがセイラを制する。

「確かに、レプリカの1匹はデッカードくんとうりふたつだ。

デッカードくんは、大きな負傷や怪我をした経験が過去にあるかね。

？」

クサナギ警視が唐突に聞く。

デッカードのどは渴き、唇が青ざめる。

警視は疑惑をもっているのか？

「デッカードくんは、警察官になって軽症5回と瀕死の重傷を2回。

そのうち、再生医療を1回受けたことがあるようだね。」

警視は、デッカードに記憶をさかのぼるように語る。

（俺は、『情報』を売った記憶はない）

デッカードの身体から汗が出る。

（警視は、俺が自分のDNA情報を金欲しさに売買したとも思っ
ているのか？）

「特に警察機構に勤務する人間は再生医療を受けるにあたり、指定
の医療機関以外は禁止になっておる。連邦のセキュリティ確保にお
いて重要なポイントだ。」

デッカードくんの場合は、ロサンゼルス警察病院での集中治療だったようだね。」

デッカードは、その事件で負傷したこと、怪我で搬送された様子をおもいだす。

軽くせきばらいをしながらクサナギ警視は続ける。

「であるから、警察の指定病院から再生医療の個人データが外部に漏れたりするとは考えにくいし、かりにもあったとすれば、ゆゆしき事態だ。」

「警視、ひとがわるすぎますよ。」

エルネスト警部がわってはいってきた。

男は、デッカードが意味が理解できる言語で話しはじめた。

「デッカード、？の一匹はきみに変装してはいつてきたが、きみのDNA情報からダビングされて創られたのかはまだわかっていないんだ。捜査資料として配布されているので簡易な画像処理でしかないからね。」

この手配の画像は、月にあるシャトルターミナルの入管手続きの際に撮ったものだ。

この時点での光学迷彩信号を受けてないので光学迷彩を使った安直な偽装侵入ではなさそうだ。

しかし、レプリカント狩りをやる捜査官に似せてくるとは大胆な手口ではあるがね。」

エルネスト警部は、左胸のあたりから『たばこ』の箱をとりだす。

「DNAからのダビングであれば、つまりクローンならばデッカードの現在の年齢に化けるまでに相応の時間を費やす必要がでてくるわけだ。」

完全な疑似体験や疑似記憶を定着させることはかなり厳しい。やがて気づくことになる。」

そうすると、

ネクサス化するほうが、早くて確実。偽の記憶を移植すれば本人だ。」

火をつけ、エルネスト深く煙をはく。

「ちよつと待つてくれ。このオフィスによんだのは、俺も疑っているってことか?。」

デッカードがしぼりだすように言う。

「今すぐ証明出来る君が本人であるという根拠があればね。」
エルネストが応える。

宇宙世紀0084年1月7日AM 3:03

鉛色をした3機のモビルスーツがいた。

微かに、機体の左側面に連邦のシンボルであるアースカラーと番号がふつてある。

『101』。

それだけでは、地球連邦の組織内のモビルスーツかはわからない。

少なくとも、『101』では所属不明だ。

「いくよ!」

メイサ大尉が最初の号令を出した。

眼下に宇宙が拡がっていた。

そして・・・

頭上には、スペースコロニーが見える。

廃棄されたシリンダー型のコロニーである。

筒型で4枚の羽根がついている。

4枚の羽根は、ガラスのような筒型のコロニーに太陽光を入れていた。

すすけたガラス瓶の中のように、コロニーの中が今どうなっているのか外からは判別出来なかった。

フラウ少尉は、自分が操るモビルスーツの長い影を筒の側面に観た。ものすごい速度で加速しているが、筒の側面は続いている。

フラウ少尉は、まだまだコロニーの底にたどりつけないのかと気が遠くなる気がした。

巨大な建造物・・・

永遠に続くかの様な鉛色の鈍い輝きと、それから逃げるように追ってくるもモビルスーツの黒い影。

モノトーンの世界。

宇宙そぶが、こんなに色彩がないなんて思ってもいなかった。

「フラウ少尉！。心拍数、呼吸数、血圧上昇が早いよ。中和剤でアドレナリンとドパーミンを抑えよ。さもないと、失速するよ。」
メイサの声が、ヘルメットのインカム内できこえる。

「了解！」

左手でヘルメットにポップアップされたバーチャル・ディスプレイの中から瞬間に必要な薬物を検索する。

両眼が踊る。

「みつけた！」フラウは、つい声にしてしまう。

機動加速を維持しながら、生理現象の激しい変動にも対応しなくてはならない。

それから、心身の落ち着きはあつという間にフラウに訪れる。

しばらくは、これでいいかも。

僚機であるカニングム少尉は、寄り添うようにフラウの左サイドについてくる。

カニングムは、フラウよりコロニー側にいた。

先頭にたつて戦闘を指揮するのは、メイサ大尉だ。

3機のモビルスーツが宇宙そぶを駆けている。

うち捨てられたスペースコロニーは、まだ重力発生のために微弱な回転運動を続けていた。

軌道予測を誤れば、あっけなく墜落する。

コロニー側面でのモビルスーツの機動加速は、人間の判断では到底追いつけない。

せいぜい予測される軌道計算値からの微妙な調整をするしかなかった。

搭載されたコンピュータは、単なる計算機になり、人である操縦者

も計算機の指示に従う奴隷に過ぎなかった。
フラウは思う。

戦闘訓練なのか、数学の訓練なのかと。

「フラウ、カニングガム！。そろそろ底だよ。怯えて速度を落とすな
続け！！。」

メイサが叫ぶ。

「りようかい！！」カニングガムの低い声が応える。

3機のモビルスーツのパイロットは、同じ動作にうつる。
ステイツクを下げる。

ほんの指先で微かに、動かす。左右に振る。
軌道が変わる。

加速Gが一瞬訪れる、続いて訪れる急激な減速に備える。

3機のモビルスーツは、加減速を繰り返しながら、ほぼ直角に近い
軌道でスペースコロニーの底を滑る。

長い尾を引いて影がついてくる。

フラウとカニングガムは、視界の端に地球と月を捉えた。

(ずいぶんと遠いや)カニングガムは思った。

「フラウ、カニングガム。機動訓練をおえたら、このままの足でソロ
モン宇宙までいくよ。後、3回繰り返すからね！」

「大尉、予定より早くありませんか？デビュー戦にしては。」

カニングガムがきく。

「敵は、全部で12機ときいている。動きだす前に葬れと指示がき
た。宇宙そふにあげるなということらしいよ。」

メイサのため息が漏れてフラウとカニングガムにとどく。

「もし、12機以上であれば、どうします？。」

「上がってきた奴をつぎからつぎと落としてやるよ。それでも無理
なら、放棄する。プロメテウスの軍規律なら、当然軍法会議で処刑
だろうけどね。わたしらは、ティターンだから、そこまで酷じゃな
い」

フラウがかたりかける。

「大尉。私は、敵はモビルスーツを量産化してすでに実戦配備を整えてると確信しています。」

戦闘の口火をなぜ我々からしなければいけないのですか?。」

フラウは、かねてからの疑問をメイサになげかける。

メイサが低く笑う。

「それは、少尉。向こうも同じことを考えてるよ。機動戦闘するものたちは、疑問をもつたらいけないのさ。そういうことは、上が考える。戦略、戦術、戦闘はそれぞれ違う。我々がする仕事は、戦闘だよ。」

カニングラムも続ける。

「少尉。大尉が言いたいのは、敵も同じことをどうせ考えてるってことよ。どの道、戦闘がはじまる。戦争の口火を切ったからといって悪いわけじゃない。結果として早い遅いがあっても。戦争を仕掛けたほうが悪いなんていわせないためには、勝つしかないんだ。それが、戦争さ・・・」

「カニングラムの言うとおりだね。こちらが出遅れば敵が先に、戦争の口火を開くのさ。それで負ければいい訳のしようがない。上が考えることは、臭うほど単純さ」

メイサは、右目側に表示されるホログラフィックリーダーが示す識別信号を確認している。

「これから、模擬戦闘にうつる、ダメージは実戦なみだ。」

「りょうかい」カニングラムとフラウが応える。

モビルスーツが背負っている2基のプラズマが青白く輝く。

3機のモビルスーツは、ほぼ同時に出力を上げる。

フラウのヘルメットのバイザー越しに、先頭を行くメイサの機体が青白く観えた。

フラウは、宇宙に色彩を取り戻した。

「これから、リーダーに表示されるのは、単なる座標でしかない。しかし、攻撃は実戦そのものだよ」

事実そうだろうと、カニンガムを思う。

レーダーには、敵の識別を表す表示が現れている。

しかし、バイザ越しで観る宇宙にはそれらしき機影は、確認できていない。

光学迷彩とステルス技術の発展で、戦闘が索敵して単純に攻撃とはいかない。

さらに、敵はあらかじめレーダーのかく乱を行う場合がある。

敵と模される擬似情報が連邦の情報中枢を守る強固な障壁を通過してサイバー攻撃を仕掛けてくる。

連邦の軍事コンピューターの中枢と連携して作戦行動を行うときには、モバイルスーツに搭載されたコンピューター端末に敵が放ったコンピュータ・ウィルスが感染することも想定される。

もしそうなった場合、対処の抗ウィルス・ワクチンを投入してデーター削除をしなければならないのだ。

その処理や判断が遅れば、すなわちパイロットは操縦不能に陥るか、最悪の場合モバイルスーツは敵にのっとられることだってあるのだとカニンガムを思った。

のっとられた場合、カニンガム少尉は自分の意思とは関係なくメイサやフラウを撃つだろう。

そういうときの対処は、通常自爆装置が働くようには設計されているが、そこも侵食されていたら悲劇だ。カニンガムは腰の辺りにある小さな装置をなでる。

これは使いたくない。

カニンガムを跡形もなく消す。コクピットも跡形もなく消し飛ぶ。マイクロ・ブラックホール応用技術である。

カニンガムはひきつった笑い顔になる。

敵は、ナノ・ブラックホール技術をモバイルスーツに应用している可能性がある。

こちらの3機のモバイルスーツが背負っているのは核融合炉である。

なのに、パイロットの処理はブラックホールだとは……。まった

く。

そういえば、『ニュータイプ』だか『革新された人間』だかめっばう勤が鋭い連中がいると伝えた3流メディアニュースのことを思い浮かべた。

こんなときになぜか雑念が浮かぶ。

軍事中枢コンピュータとステルス戦闘機のコンピュータ端末の連携を切って戦闘行為が出来ると思ったような気がした。心細くないのかとも思うし、不可能だとも思う。

(馬鹿げた話だ。笑うぜ。)

サイバー攻撃をかわしつつ、敵の索敵を猛烈な速度で処理しなければならぬ。

パイロットだけでは荷が重い。

連邦の軍事中枢コンピュータの近くには、これを支援する専任のオペレーターが控えている。

オペレーター室での彼ら・彼女らも、パイロットと同じようにホログラフィックレーダーで索敵を続けている。

そこには、人間がいなかった。

彼ら・彼女らは、ネクサス？。

連邦がタイレル社から採用しているレプリカントたちである。

オリジナルから移植した記憶を持ちながらも、人間らしさはダウングレードされている。

連邦の機動管制官として特化された『人間』であった。素早い手さばきと激しい眼球の動きは、人間を超えている。

メイサら機動戦士とよばれるパイロットは、この事実をしらなかった。

あくまでも、人間のオペレーターとして扱っていた。

共に宇宙で闘う戦友であった。

レプリカントの機動管制官が敵のサイバー攻撃と闘い、メイサたち

が実体のある本物の敵と戦うのだ。
機動管制官が情報処理をした結果を出力したら、その後メイサらが搭載している小型索敵ミサイルを放つことになる。

光学迷彩を施された敵の機体を含む広範囲の高高度でそれは、輝くだろう。

ミサイルの先端についている光学迷彩の信号を解読する端末は、消えるまでに敵に施された光学迷彩を無効化するデータ処理を行っていく。

データがいつせいにあたりの敵のモバイルスーツに照射されると、光学迷彩機能を失った敵のモバイルスーツの実像が浮かんでくるはずだ。

それをすかさず、遠距離から撃つ。

すぐに、木っ端微塵になった敵の破片に巻き込まれないように高高速で戦闘宙域から離脱する。

繰り返しのパターンだが、これがいつまでも通用するともいえないのが戦闘である。

実際の戦闘は、予想もしない結果を生むものだ。

戦闘も、また進化・発展していくと考えていたほうがいいだろう。

なにより大事なこと。

敵を確実にあぶりだすこと……。

確実にしとめること……。

とても、地味な戦いような気がする。

模擬戦闘用のサイバー攻撃が開始された。

緊張の連続……

フラグがレーダーに多数表示された。

どれだけの敵がいるのか？

サーチ・アンド・デストロイ。

フラウは、フルバナーで加速を実行していた。

カニンガムが後に続いた。

メイサは、速度にブレーキをかけ、後退してカニンガムとフラウの後方支援にまわった。

先ほどの、メイサを先頭にしたフォーメーションと逆であった。

連邦の軍事中枢コンピュータ管制室では、オペレーターがサイバー攻撃からの防御障壁を創りアンロックを多数築いていた。

メイサ・フラウ・カニンガムのバイザーに表示される多数のオレンジ色の敵。

あと数秒もせずに、ドッグファイト出来る距離になる。

アウトレンジでしとめることが絶対条件。

ドッグファイトは避けるべし。

不用意に近づき過ぎれば、敵の餌食になる。

ふいに、レーダーに表示された多数のオレンジの輝点が一斉に消失した。

何かが起きた？

フラウは、操縦スティックを掴んだ右手とイオン・プラズマの加減速と方向を調整する足先に違和感を感じた。

（まさか、操縦不能！？。機体をのつとられた？）

嫌な汗が、フラウの背中と額、脇をぬらす。

と、唐突に再度オレンジの敵を識別する輝点が現れる。

「照合できた！！」

カニンガムが叫んだ。

メイサは無言で左手近くにあるコンソールディスプレイに、モバイルスーツの攻撃コマンドをすばやく入力した。

メイサのモバイルスーツが両手で構えている巨大なバズーカ砲から、索敵ミサイルが宇宙そふに向けて発射された。

一方カニンガムとフラウは、モバイルスーツが背負ったランドセル状の高粒子イオン・プラズマエンジンの向きを変え数回逆噴射を繰り返していた。

2機のモバイルスーツに急制動がかかった。

その間に、メイサの機がフラウとカニンガムの前にでた。

後方に回ったカニンガムとフラウの2機のモバイルスーツは、シヨルダーに背負った巨大な機関銃のような高エネルギーレーザー砲を構えた。

索敵ミサイルがデータ解析の末に、光学迷彩を無効化する時間を3人は待った。

(まだなのか！)

メイサの唇が乾いた。

『光学迷彩解除』とバイザーに浮かんだレーザー端末は表示した。

「目視できます！」

フラウがうわずりながら、叫んだ。

「今だ！撃て！」

メイサが叫んだ。

そして、標的に向かって2本の青白いレーザービームが長く長く伸びていった。

ステルスを解除されたバルーン状の2機の模擬モバイルスーツは、跳ねながら暗黒の宇宙そらに消えていった。

宇宙世紀0084年1月7日 PM 1:46

メイサ中尉以下のモバイルスーツ部隊は、廃棄されたスペースコロニーでの数回におよぶ模擬戦闘訓練を終えると、スペースコロニーのソーラーパネル翼の一枚に隠れるように係留してある強襲揚陸艦のカタパルト・デッキに戻ってきた。

数名のデッキスタッフが指示灯を振りながらモバイルスーツを誘導してカタパルトデッキからエレベータの台に乗せる。

それからモバイルスーツはエレベータを下り、それぞれの格納庫に収まっていく。

エレベータから格納庫に降りる間に、メイサ中尉は光学迷彩のスイッチを切った。

101部隊のモバイルスーツは、はじめてきらきらした液晶のようなパネルに覆われた機体を現した。

この液晶状の微細な記憶合金が光学迷彩信号を受けて背景に溶け込むようにたえず変化しているのだ。

メイサは、モバイルスーツが背中に背負っている小型核融合炉のバッテリーの出力をゆるやかに落とす。

ランドセルとよばれるバッテリーの中にモバイルスーツを動かす動力源、核融合炉がケーブルでつながれている。

ランドセルがモバイルスーツを稼働させる主なエネルギー発生装置だが予備動力装置をモバイルスーツの腰にあたる場所に備えている。

ランドセルを背負ったの戦闘が危険な場合は、予備エネルギーだけでの闘いとなる。

ランドセルは宇宙での闘いでは有利にはたらく。

もし、メイサらが惑星都市に侵攻する場合、宇宙でランドセルをつないだケーブルをはずし、簡易な低重力でも大丈夫なパラシュートで地面に降下するだろう。

はずしたランドセルは、味方の誘導ビーコンによって味方の鑑に回収され再利用される。

スペースコロニー内部や惑星都市での市街戦では小型核融合炉のエネルギーでは危険で扱いにくいからだ。

メイサはパイロット着用のヘルメットを外す。

長い髪が無重力の空間で拡がる。

東洋人の綺麗な黒い髪。

切れ長の眼がモニター画面をみつめている。

メカニカルスタッフによる機体の整備の前に、今回の戦闘データの蓄積の確認をおこなっていた。

戦闘訓練や実戦を通して、モバイルスーツ自体に搭載された高性能なコンピュータが学習し経験値をあげていく。

・・・

・
・
数時間後。

エリア818 宙域。

・
・
・

光学迷彩だけが隠密技術ではない。

トリックがいくつも仕掛けられている。

ブービートラップも仕掛けられている。

モビルスーツを操ることは、曲芸のような飛翔を続けながら解析に次ぐ解析を行っていくことである。

「つぎそこ！」

フラウ少尉の気合いは、つい言葉に出してしまう。

フラウが乗ったモビルスーツが握った銃から、数本の光の筋が伸びていく。

3か所で球状の爆発が起きる。

微粒子化した破片が四方に散らばる。

戦闘地域離脱。

高速機動。

フラウは、口にはめたマウスピースをかみしめる。

身体がパイロットシートに押し付けられる。

パイロットシートの数か所にあるエアバック装置が緻密な計算で柔らかいフラウの身体を支える。

加速Gが猛烈にかかる。

パイロットスーツの中に仕組まれた注射針からフラウの血管に薬物がうつされる。

気を失いかけたフラウの瞳孔がひらく。

操縦桿を握った手が、機動調整する。

適時、コンピュータの計算で薬物がパイロットに投与される。

命を削る、命を吸い取る機械、それがモビルスーツ……

とフラウは思う。

それでも、私はやるんだとも、フラウは思う。

数秒前から、モニターしていたレーダー装置の策敵情報が混乱していた。

連邦の中枢コンピュータとのリンクも切れかけている。

……。

この宇宙域は汚染されている……。

モリス・クライトン粒子が散布されているのかもしれない。

波長をカット出来る粒子を散布されれば、通常のレーダー装置は意味を失う。

そのかわりゴーストにする装置、光学迷彩も使えなくなるが。

そうなるかと視覚装置に頼った闘いとなる。

ドッグファイトだ。

局地戦闘モードに入ると、量子的に暗号化された無線通信は戦闘中のみ封鎖される。

ポップアップディスプレイにグリーンのAUTOという文字が点滅する。

手動での切り替えもできるが、戦闘区域に入ると特段のことがない限り、自動で通話回線は封鎖される。

戦闘リーダーや僚機のモバイルスーツから、モバイルスーツの指やジェスチャーで合図と指示がでる。

メイサ中尉のモバイルスーツが仕掛けられたブービートラップに引っ掛かった。

激しく光が漆黒の宇宙に輝く。

メイサの後ろに続いて飛翔していたカニンガムとフラウは、360°全方位をカバーしている

モニタースクリーンの輝度を瞬時に落とす。

パイロットの視覚情報の負担を軽減するために360°全方位をカ

バーしているモニタースクリーンは、宇宙の色を青みがかった眼にやさしい色合いに自動調整してくれている。

パイロットの操縦席は、湾曲した大型ディスプレイで覆われている。フラウラ機動戦士は、卵の殻のなかにおさまる黄身のような存在でしかない。

モビルスーツの胸のあたりにおさまった球状のパイロット・ポットは、モビルスーツから退避するときには、救命・ポットとなる。ただ、救命ポットを利用することを軍の上層部も、機動戦士も望んではない。

モビルスーツのジャイロを無効にも有効にもできるが、宇宙での戦闘モードでは自動で無効になる設定だ。

くるくる回る。

銀河と星がそらを流れる。

普段は静止している宇宙が動く。

どんなに精神が強くても、漆黒の宇宙に球状の殻に守られ浮かびながらの生死を賭けた戦闘は、すさまじく精神と体力を消耗していく。積載されたコンピュータが戦闘区域でのパイロットの疲労を軽減するため薬物投与と生命維持のモニタリングを続けている。

(このあたりは、連邦の要塞が造られる区域だ。これほどの浮遊機雷がすでに敷設してあるとは。

デブリ(宇宙ゴミ)に混じってトラップが仕掛けられていたってわけか。)

カニングラムが高倍率の光学装置を使って眼で、トラップかデブリかを360°モニタースクリーンで識別しイエロー表示でマーキングしていく。

搭載されたコンピュータのデータバンクから機雷との照合を行う。

カニングラムは、モビルスーツの左腕のところにある突起から通信ケーブルを引き出し、メイサとフラウラのモビルスーツの通信接続端子に接続する。

宇宙で3機のモビルスーツは、通信ケーブルを接続して交信をはじめめる。

「カニングガム、フラウ。多数のデブリのなかに、浮遊機雷がいくつも敷設されている。」

8隻の前衛艦隊が来る前に掃除したいところだが、いつきに突破するよ。」

「りょうかい。コードネーム クラウンの連中は相当の準備をしているようだ。」

カニングガムが応える。

「後衛についているレディから有視界レーザー砲撃で焼き払ってもらよ。」

フラウ、信号弾をあげよ。」

「りょうかい。」

フラウが上ずった声で応える。

フラウのモビルスーツが握っている銃からカートリッジをはずし、機体の側面にアタッチメントされている信号弾を銃にとりつける。

フラウのモビルスーツの指が人間の指のように引き金をひくと、するすると信号弾が3機のモビルスーツの上上がり、不規則な輝きで信号を送る。

輝度の高い青い点滅信号。

後続で待機しているペガサス級の強襲揚陸艦『レディ・マドンナ』のブリッジに数秒もせず信号弾のひかりが届く。

ブリッジの中央に座っているジャック・テレマン艦長は、こちらも信号弾をあげるように伝える。

ジャック・テレマン艦長の襟元の徽章には、連邦統合軍のシンボルのほかに『ティターンズ』のしるしが入っている。

ティターンズである証し。

地球を持ちあげる巨人の図柄。

地球連邦政府統合軍機構の中で反プロメテウスを標榜する組織。

プロメテウスが地球圏のナシヨナリズムで押され勢力拡大を図るエ

リート集団であるのに対し、ティターンズという集団は連邦統合軍の中でも明らかに敵対色を強めていた。

アクシス騒乱の鎮圧派遣部隊に連邦とティターンズの混成部隊であることになったのは、ことを大きくしたくないという連邦政府議長の政治的な配慮があったからである。

このような連邦政府議長の決議にプロメテウスの上層部は遺憾の意をすでに表明していた。

強襲揚陸艦『レディ・マドンナ』に搭乗している軍人のすべてがティターンズのメンバーではなかった。

正規の連邦軍の軍人とティターンズのメンバーが混在していた。

艦長のジャック・テレマン大佐は、連邦の正規の軍人であり、なおかつティターンズの組織メンバーであった。

40代後半の年齢は最後の男の色気醸し出しており、顔や手足に深いしわを残しはじめていた。

ロンドン生まれのイギリス人。

染めていないダークブラウンの髪には、いく筋も白髪が混じり実年齢より落ち着いた雰囲気を漂わせていた。

彫の深い顔に無精ひげを伸ばしたままでいた。

ときよりみせる陰鬱なげりは、幾多の人生の荒波を経験し超えてきたもののみが持ち合わせる匂いであった。

プロのサッカーリーグで選手生活をしてきた経歴があり、必要があれば静かなたたずまいからイギリ仕込みの燃えるジョンブル魂を発揮する。

「艦長、廃棄コロニーから違法投棄されたデブリ群の中に多数の機雷が敷設してあるもようです。

本来なら・・・しかし・・・、

暗礁宙域を抜けるコースがアクシスへの最短ルートです、迂回している時間はないかと。」

レディの操舵オペレーター席に座る副艦長のニール・サイダー大尉が、テレマンのほうに振り向き苦い顔をして尋ねる。

さつそくカニンガムからレーダ通信で送られてきた不鮮明なデータは、ブリッジの天井にある大型スクリーンでイエローマーキングされた不審物として表示されている。

「これだけの数だと、ステルス衛星も紛れ込んでいるでしょう。暗礁宙域とはいえ、雲の晴れ間をぬうようにレーダー通信ができるはずです。すでに、こちらの動きは読まれているのでは？」

天井のスクリーンの一部にカニンガムの顔が表示され音声とともに途切れながらブリッジに届く。

メイサ、カニンガム、フラウの3機のモバイルスーツは、すでにレディからのレーザ砲撃に備えて撤収をはじめている。

「艦長、空間に残ったレーダー通信の痕跡を調べました。3日前に地球とフロンティア11にレーザー送信された記録があります。途中、クライトン粒子のジャミングがあるので完璧な追跡は不可能ですが、おおよそ地球とフロンティア11の方面ですね。」

テレマン艦長の前に前後左右に座っているオペレーターの一人、サム・ミリアスが幾筋かの数学的曲線を天井の大型スクリーンの一部に追加表示する。

「連邦のステルス衛星ではないのか？」

テレマンが低い落ち着いた声でサムに尋ねる。

「すいません、ステルス衛星があるかどうかも仮想なので。敵側であればあってもおかしくないと思います。このデブリ群に連邦側がわざわざステルス衛星を置く必要はないと思います。」

「地球方面に行ったレーダー通信はクレムリンに届くだろうな。．．

テレマンはなにかを悟りきったように静かな口調で語る。

「えっ。？」

サムは驚く。

「ロシアとフロンティア11になにかかわりがあるとも．．？。」

サイダー大尉が3基のレーザー砲台をデブリ群に誘導指示する。それぞれのレーザー砲台には、すでに砲撃手が着座済みである。「ゼロ大戦後に残った大国で領土も野心もそのまま残っているのはロシアだけだ。合衆国も中国も解体されて前世紀の軍事力はない。ロシアは合衆国の代わりに超大国になろうとしている。地球上にはもはやライバル不在のように振舞いつつある。」
テレマン艦長は、手元のディスプレイ装置に表示されている「レディ・マドンナ」の航海予定針路とアクシスへの到着時刻を眺めつつ語る。

「ロシアの覇権主義が宇宙^{宇宙}まで伸びるのは時間の問題だった。独立運動家が多数潜んでいるフロンティア11（イレブン）と裏でつながっていてもおかしくないだろう。」
一息ついてテレマンは続ける。

「アナハイム技研のジャミトフという老人もロシアとの太いパイプを持っていることは、連邦の誰もが知っていることだからな。アナハイム技研の本社がある月とロシアと11（イレブン）が手を組めば、連邦としても迂闊に戦闘もできない。さもないと大きな戦争に発展する。」

あのゼロ大戦のような戦禍は2度と繰り返してはならんだ。
「そうは言うものの、いまさら戦争を回避することは到底むりであるのも、テレマンは知っていた。」

「アクシスへの到着は、少々遅れるがステルス衛星が潜んでいる暗礁宙域で派手に花火をあげるつもりはない。メイサ、フラウ、カニンガムの帰還を待つて航路を変更する。」

意外な艦長の発言にブリッジの雰囲気が一瞬硬くなる。

「先に、フォウ艦長の鑑^{ふね}があるはずだ。『トロイ』に役目を移そう。」
サイダー大尉がごくりと唾を飲む。

「それでは、荣誉ある一番乗りが出来ませんなあ。」
言葉をボソリと言うと残念そうに顔をゆがめる。

ニール・サイダー大尉は感情の起伏が激しいが、態度や表情に出やすいのでテレマンにとって扱いにくい男ではなかった。

「『トロイ』は実験部隊だが、RX-78を3機積んでいる。我々が積んでいる一つ目のMS-ZZKU05より高性能らしいから、その結果をみてから参戦しても遅くはなからう。」

テレマンは、浅目にかぶっていた軍帽を眼のあたりが隠れるように前に傾ける。

「大人のずるさってやつですかね。実験の結果をみてからでもいいでしょう。」

サイダーの軽口に閉口するときもあるが、あながち間違っではないなかつた。

「戦争は生き残ることがミッションだと考えとるよ。勝ち続けてこそ、戦争における勝者だから。」

負ければ、どんな栄誉も消し飛ぶ。『トロイ』に譲っても惜しくはない。」

「きっと、メイサは納得しませんよ。そんな『木馬』に譲るなんてことは。」

「3名が帰還したらすぐにブリッジへあげてくれ。私からメイサ中尉が納得のいくように説明しよう。」

「タイレルを蹴落とし、月面でのビジネスの成功をおさめても、フロントティアでの商売は……。」

「なかなか難しいとお考えか？」

「いかにも。」

「フロントティアの一群、イレブンだけおさえてもこころもとない。」

「同盟をどう結ぶかですな。政治的な同盟関係とは別に経済的な同盟関係を維持していれば、戦争の勝敗にかかわらず、戦後の遺恨を残さずに済む。富も人も残る。」

「富人も残らない戦争では、そもそもなにもしないに等しい。」
「ふむ。」

「イレブンのほかに、セブンとナインに同盟にむけての話を進めている。」

ロシアを仲介にして南アフリカや中南米は、ほぼこちらの陣営に傾きつつある。」

旧合衆国の一部も取りこんでいる最中だが。」

「ひさしぶりに世界規模の戦争になるか。」

「いや、そうはさせんよ。戦禍が地球圏に拡がることをどの国も望んでおらんからの。」

地球圏と宇宙という対立軸があるからこそ、容易に傍観できるのが地上に住む人間のほとんどだろうて。」

宇宙が主戦場になる。」

フロンティア群と月をふくめて。」

そして・・・

戦後に残るのはフロンティアの再編成と構築だ。」

フロンティアというよび名から、『サイド』に変えようと考えている。」

イレブンは、サイド11（サイド・イレブン）となるう。」

「サイドか。タイレルを蹴散らしてしまえば、どのような呼称でもかまわん。」

RX78を連邦に、それと似て非なるものをイレブンの独立組織に供給するか。」

戦争の序盤から終盤まで兵器の供給とモデル開発で潤うわけだ。」

事実、これだけで戦争を裏からコントロールしていることになる。連邦の技術将校どもをたぶらかし、操ればよい。」

戦争する軍人どもには理解できない話だろうがな。」

「いかに、そのとおりで。」

「やっきになつて戦争してくれれば、いい。」

命をなくすことを、栄誉や名誉なぞと。」

おだて褒めればいい。

前時代がかったことを恥ずかし気もなくできるのは、軍人のみぞ。」
「技術競争で我々もタイレルと戦うことになりますな。」

タイレル社には戦後は小規模な商いで満足してもらいましょう。

それに、レプリカント技術では世界2位の日本のオンダ技研を傘下にできたのはなによりも強みですな。」

「アシモか。AI、オンダ技研のAsimoteクノロジー。」

クローンでもネクサスでもない技術とはどういうものか。」

「プロトタイプには、オンダ技研の新技术を一部導入している。」

そう、オンダ技研のRX-7からネーミングをいただいでるよ。R

X-78は。」

「わしのガレージに保存してある化石燃料を使ったクラシックカー・コレクションに、

程度のいいものがある。時より、無性にハンドルを握りたくなるのがあの時代のモーターだ。」

RX-7（アール・エックス・セブン）・・・S2000・・・、

NSX。なぜか、日本車が多いがな。」

「きつと、ジャミトフ閣下の御趣向にあうのでしょような。」

「日系人の血が混じつとるからかもしれん。」

日本は。」

ゼロ大戦後は、大昔の鎖国制度をふたたび布いておる。」

独裁者が束ねておる国家になってしまったがね。」

合衆国の犬であればこそその繁栄を、飼い犬は飼い主にはむかった。」

合衆国が傀儡していた独裁政党から、民主的な政党に政権交代した時代に。」

国家としての独自性をだそうとすればするほど独裁性と秘密性をより強くしはじめたわけだ。」

政治は迷走し、幾度となく外交方針は翻され、諸外国の信頼を失墜させてしまった。」

その後は、血迷った軍人どもに民衆は蹂躪されて自由を奪われ、政

治制度を400年ほど逆戻りさせられたのだ。」

「おもしろい話ですな。」

そのくには。愚かというか……。」

「もともとそういう根っこがあるファシストな国家だ。」

自由な時代があつたのも第2次大戦後のたつた70年あまり。

民衆は自分で選択するものなのだ。」

誰のせいでもない。」

独裁者を選ぶのはその国民が望む天命。」

わしもそうという民族の血をひいておるのだ。」

〈宇宙世紀0084年1月6日AM 11:32〉

その赤いスーツを着た男は、コクピットから降りると念入れに機体を触りながら点検していた。

愛おしいものをめめるように、柔らかく触れている。

機体の両サイドに『妖精』と日本語で書いてある。

彼は、自分の愛機を『戦闘妖精』と名付けて唯一無二の親友のように扱っていた。

『妖精』は、今では旧型の部類に入る戦闘機だ。

戦闘機であり、爆撃機であり兵装によって使い道が変わってくる。

本来は、その逃げ足の速さと機体の軽さでステルス偵察機として開発された。

タイレル財団の軍需部門が生産している。

タイレルは、民需から軍需まで幅広く扱ってる。

宇宙世紀の巨大企業体の一つだ。

タイレル財団のライバルとしては、ジャミトフという一老人が立ち上げたアナハイム量子技術研究所があつた。

アナハイム技研である。

ジャミトフという老人のプロファイルは一種の謎に包まれている。

生い立ちや年齢は、側近中の側近でもわからなかった。

この宇宙世紀のカリスマ企業家である。連邦の軍部と深く付き合いがあるのは、間違いないことであった。タイレル財団は、連邦からの独立を願う地球から一番遠くて最大級のスペースコロニー群の反体制組織にも軍事的支援を秘密裏におこなっていた。

いにしえの頃から、商いに国境もイデオロギーも持たないのが武器商人の武器商人たる証でもあるから。

地球連邦政府は、地球圏と宇宙圏の両方を統治していたが、宇宙圏の生存域が広がるにつれて宇宙で暮らす人々の意識が変わりはじめた。

人の革新を問う者が民衆の意識改革を問うようになった。宇宙圏が拡大するにつれて人々は懐古主義になっていた。

地球から遠く離れれば離れるほど、地球の古き良き時代の文化への憧憬と憧れを強く持つようになっていた。

連邦政府は、公式にはけして認めるはずがないに違いないが、宇宙の果てのコロニーで王政復興が始まるうとしていた。

赤いスーツの男は、宇宙の果てのコロニーの偵察任務から今戻ってきたところだった。

「スレッガー中尉、御苦労様。戻ってきてすぐで悪いが、ブリッジまで上がってきてくれ。」

スレッガーは、苦虫をつぶしたような顔で、不躰なことを言うなど『妖精』の格納庫からあたりを見渡した。

「そののだががしらないが、今戻ってきたばっかなのよ。一服する時間くらいいれないか。俺が、危うく戻れなくなるとこ助けてくれたのは嬉しいけどさ」

軍位は、救助してくれた連邦のサルベージ艦の艦長よりスレッガーのほうが上のはずである。

宇宙世紀でも、軍属だけは厳しい階級社会である。

スレッガーが所属するのは、地球連邦政府直轄の軍隊組織である。

誰がつけたか、『プロメテウス』とよばれる。

同じ階級でもプロメテウスで軍務につけば2階級は上の立場にあるはずだ。

連邦の船乗りの艦長くらいでは、スレッガーの上の立場につけないだろう。

プロメテウスは、二度目のレプリカントの反乱の後創設された。

宇宙圏勢力からの攻撃に対し、武力行使発動可能な軍組織体である。2度目のレプリカントの反乱は大規模なものであった。

当時の地球圏の地球上空はるか上を回る人工飛翔物（人工衛星群）は、すべてなんらかのかたちで地上に落下した。

コロニー落とし。

人々は、そうよんだ。

その事件によって、宇宙圏からの攻撃に対する備えが必要と人々は考えた。

新たな連邦軍組織を設立したわけである。

しかし、宇宙世紀になってもゼロ大戦以前の国家のかたちは、いぜん残っていた。

地球連邦政府といってもそれほどの指導力を発揮するわけではなかった。

地球上の諸問題のことにはまるで弱かった。

ゼロ大戦を生き残った国家間のしがらみも残ったままで、以前解決のつかないことも宇宙世紀まで持ちこされていた。

小さな地域紛争は相変わらず。混乱は増していた。

ゼロ大戦以前の超大国や大国のほとんどは、国家としては消滅していたがいまだに地名は残っている。

ただ、地球に残っている人々は宇宙圏の問題が発生する場合のみ、自分たちだけが人類で地球人であるような奇妙な団結心を抱き、我々こそ地球圏の人間であるというナシヨナリズムを持っていた。

それは、地球圏と宇宙圏の対立を深刻化させる原因のひとつとなっていた。

プロメテウスという軍組織体は、連邦軍の一組織ながら地球圏ナシヨナリズムに熱狂する地球市民から熱烈な支持を得ている。

連邦軍の中にも、プロメテウスの勢力拡大と発言に警戒を持つものが増えてきている。

プロメテウスに入隊するには、連邦軍機構での軍務の実績がものをいう。

プロメテウスの採用している軍装は、連邦のアースカラーをモチーフにした軍装とは異なり派手な赤と黒を基調にしている。

着心地もよさそうで、正規採用の連邦軍服より軽量化され補強強化されている。

細部のデザインも凝っている。

プロメテウスの軍装に身を包むことは連邦のエリート下士官である証しだ。

ひとの帰属意識は果てしないもの。

プロメテウスに配属されれば、プロメテウスにいそうなステロイドタイプの人間になるものだ。

だが、スレッガーは違っていた。

生来の気質が、そうさせた。

彼は、どこにいようが自分がスレッガーという人間であることにかわりないと信念をもっている。

たまたま、仕方なくプロメテウスにいるだけさ。

結構な皮肉よ。

宇宙圏に住むようになれば、すぐさま宇宙人と言われそうだ。

スレッガーには、愛国心は無縁だ。

感受性豊かな面を持ちながら、雑な行動をとる。

ぶっくらぼうで、てきとーで面倒なことが嫌いで、常に真剣味がなくいい加減な風である。

しかし、彼の行動をつぶさにみていると手抜きもいい加減さもなかった。

常に仕事の仕上がりは完璧だった。

旧アメリカ合衆国の典型的なカウボーイ気質である。

スレッガーは、無重力区間を器用に足で壁を蹴りながら次の気密室区間に移動していく。

登ってるのか下ってるのかわからなくなるが、やがて人工重力が働いてくるはずだ。

人工重力区間が始まる境界を青色発光ダイオードのような色で示してあるのがわかる。

そこにスレッガーは、トンと右足をおとした。

それは、唐突にきた。

ぐっ と懐かしい感覚が頭の前から足元まで伝わる。

なにものかの手に身体が押し掴みにされ軽くフロアーに叩きつけられるようだ。

血の気が引くようで失神しそうな感じがする。

この7日間はほぼ無重力で過ごしていたので尚更だった。

スレッガーは、いつまでたってもなれないなと思った。

こんなときは、スレッガーも自分が根つからの地球育ちの地球人を意識してしまう。

彼の主義から、認めたくないところだった。

これじゃ、宇宙人にはなれないな。だが、無重力空間での戦闘なら勝機はあるさ。

スレッガーは『妖精』を操る腕には自信があった。

妖精は、宇宙そぶを駆け抜ける。

宇宙は、真空中で音がしないと思っていたがそうでもなかった。

あるとき、粉々になった敵機の傍をかすめ飛んだことがある。

スレッガーにすれば、あまりに近いドッグファイトをってしまった。まずかった。俺としたことが。

スレッガーが破壊した敵機の破片ともっと細かく粉々になった微粒子がとんでもない速さでスレッガーの妖精に迫っていた。

レーザービームやミサイルよりたちが悪い。これは、宇宙空間を浮遊する微天体と同じだ。

ひとつひとつが震動して揺れが増幅されスレッガーの操る妖精のクピットにまで伝わってきた。

あれは、間違いなく音だった。

機体まわりの防壁シールドが薄ければ、破壊して飛散した敵機の破片でひとたまりもなく損傷していた。

宇宙空間でのドッグファイトはよしたほうがいい。

アウトレンジで敵機を発見し、素早く破壊し、破壊した的からなるべく遠くに避難すること。

これは、卑怯なことではない。綺麗ごとといえば、星の破片に食われてしまう。

重力のある場所での戦闘とは違って当たり前なのだ。

スレッガーは、気密室の扉を閉じた。フレッシュな酸素が充満しはじめる。

素敵な香り付き。香りをつけることにより酸欠を予防できる。

スレッガーは、おふくろが好きだった懐かしい香りを選んで正面にあるデータパネルにタッチする。

気密室に入ると15分程度の与圧調整で、しばらくここに待機することになる。

ここでやっとヘルメットを脱いだ。

端正な顔立ちと鮮やかな金髪が現れる。

高貴な顔立ちだった。

とても、一介の軍人にはみえない。

中世のヨーロッパ貴族の風格だった。

腰のベルトにしまっていたモバイルガジェットを左手に巻く。

そして、小さなイヤリング状のものを耳にはめる。

昨今のクラシック音楽ブームはスレッガーにもきていた。

イーグルスの「ホテル・カリフォルニア」が流れ始める。

スレッガーは、この曲の特に歌詞が素晴らしいと思っていた。

たどりついたところには、結局なにもなかったんだ・・・俺たちはなにをしたんだろう・・・

スレッガーは疲れと安心から、外からサルベージ鑑の乗員に開けられるまで気圧調整室で眠ってしまっていた。

宇宙世紀0084年1月5日PM 4:51

プロメテウスに対し、警戒するものは確かに連邦軍内部にいた。表立って、プロメテウスをまだ非難は出来ないが、連邦の正規軍の中から苦情や相談がちらほらと持ちこまれはじめていた。

地方の連邦軍機構の事務屋にすぎない甲斐曹長は、次々と持ち込まれる正規軍人とプロメテウスのトラブルに困ることもあった。

小役人の板挟み状態だ。

甲斐曹長は、気が小さいほうなので何事も穏便にいききたいと思っている。

いや、手柄も欲しい。

よければ、給与で優遇されるプロメテウスに配属になりたいという希望がある。

しかし、目立つ働きもなく採用されることはないだろう。

一生、連邦の事務屋で過ごすのがせきの山かもしれないと思うとため息がでる。

それでも職務を粛々と務めることが、結局は甲斐曹長の現在の幸せの土台であった。

レコアという恋人のためにも、安定した仕事に就いて平凡に暮らすことがいいのだ。

彼の人生において、レコアはビッグサプライであった。やる気にさせる原動力なのだ。

だが、民間会社からの連邦政府機関へ転職してきてから、この堅苦しさにとくに辟易していた。

タイレル財団の下請け企業に勤めていたころのほうが気が楽であった。

しかし、景気で給料が変動する民間企業より安定して暮らせるだろ

う連邦政府で働くことにした。

すべて、レコアの幸せのためだった。

収入が安定すれば、レコアも喜ぶに違いない。

レコアのことを思うと、職務を放棄したくなる。

すぐにも会いたい。

週末のデートを重ね、いずれ2人は結婚するのだろうかと思うと、胸が熱くなる。

軍隊の仕事は向いてない気がするが、そのうち慣れると甲斐を思っていた。

基本的にネガティブ思考で覇気がない人物だが、逆境になると途端にポジティブな行動をとる。

机に向かって気忙しく事務処理を行っていても、自然に顔が赤くなっていた甲斐曹長の姿に周りの同僚は、クスクスと笑いをこらえていた。

度をこした純情は、笑いの種になるものだ。

曹長は、周りを気にせず今日の仕事を仕上げ、さっさと帰るつもりでいた。

だが、甲斐曹長はその日、家に帰ることは出来なかった。

上司からの突然の呼び出しがかかってきた。

「甲斐曹長、週末で早く帰りたいからうがすまない。仕事がある。奥さんにはよろしくいってけ」

「はっ、？」

甲斐はとまどった。えっ？レコアとの週末デートが・・・あ・・・

「よくわからん仕事だ。君の管轄内にお尋ね者が潜伏しているらしい。詳しいことは、現地で指示すると言ってきておる。プロメテウスの連中からご命令だ。気を引き締めて任務にあたれ、以上だ」

「断れないんですよね・・・僕でないと駄目ですかあ？」

甲斐は、小声でやんわり拒否を示した。俺でなくても変わりはいらだろっし。

沈黙・・・

あれ^^;

まずいいこといきましたっけ・

上司のブライアンがわざとらしく咳払いをした。

「プロメテウスの連中が決めたことだ。軍法会議に出たかつたら、自分で断れ。この件に関して私は君にちゃんと連絡通知した。職務はちゃんとはたしているぞ。責任はないからな。曹長。」

耳にはめてある視聴覚デバイスから上司のブライアンがかなり声で吼えた。

「ごもつともですう」

甲斐は、消え入るような声で応えた。

(ブライアンさん、あんた仮にも上司でしょう・・に、責任逃れして・・仕事すましたら部署替えか辞表だしますからね)

プロメテウスと正規軍のもめごとの処理をしてる俺にご命令とは、やれやれだと甲斐曹長はため息をはいた。断れば、軍法会議にかけられる。

奢れるもの久しからずという日本の古来からのことわざをプロメテウスの連中に教えたいくらいだ。

連中はなんでもかんでも軍法会議にしてくれると甲斐は思った。

甲斐曹長は、不満たらたらであつたが、あることを思い出した。

同期入隊して今はアメリカにいる林から、以前もらった情報である。反プロメテウスな動きが、連邦内にあると。

そついう連邦の雄志たちの集まりを、たしか仮の呼称でティタンーズかタイタンズとかいうらしい。

なにかあつたら相談をすればといいと。

労働組合みたいな駆け込み寺なんだろうと曹長は思った。

そして、何回もプロメテウスから気の進まない仕事にかりだされるのはごめんだから、一度のぞいてみる気でした。

「ブライアンさん」

「なんだね、今度は。」

「もしよろしければ、お願いが」

「言ってみろ、曹長」

「はい、ヤザンを同行させていいでしょうか？」

「認めることは出来ないが。君が勝手にやることだから聞かなかつたことにする。以上」

ブライアンは通話を絶った。

勝手にしろって塩梅ね と甲斐は思った。

部下のひとりであるヤザンくらい連れていっても問題なしと判断した。

ヤザンは何かの格闘技王だったらしいので、ボディーマスターガイドにつけてつけである。

甲斐は今までやっていた事務処理をとなりの同僚に押し付けた。

「困るんですけど。曹長、そういうことされても」

曹長は、にこりと笑い、

「やる気なくしてさ。気分転換行ってくるわ。プロメテウスの連中が来たらよろしく言っといて。あっ、それとけて逃げないからね。一服するの。じゃね。準備しなきゃ、準備、準備、心の準備。すぐ戻るよ」

と、ポンと同僚の肩をたたくと、椅子にかけた上着を肩にひっかけフロアを出ていった。

あーという態度は甲斐曹長らしいといえば、曹長らしいけど困るんだよなと先ほどの同僚はうなだれた。

宇宙世紀0084年1月6日AM 11:59

スレッガー中尉は、7日間の旅ですすけたしまった赤いスーツをさっさと脱いで、ぬるめのバスタブに入りたいものだと思った。

密閉された軍艦の中は結構な臭いがする・・・

「中尉、御苦勞様です。私は、この揚陸強襲艦ペガサス？の艦長のフォウ・ビダン少尉です。乗員は、この艦を『トロイ』とよんでます。トロイの木馬からでしょうか。」

スレッガー中尉は、笑った。

サルベージ艦と思っていた船が、偽装を施した最新鋭のペガサス級の正規の軍艦であることと、艦長が蒼い髪の年若い女性であることを。

フォウ少尉は、利発な碧い眼をしており、鼻筋が通った小さな顔をしていた。

スレッガー中尉からみれば、少女のようなフォウはまだまだ宇宙を泳ぐには早いような気がした。

「報告したいことは、このファイルに保存してあります。転送するためのキーコードを添付しているから、照合して解凍してもらえば中身がみえますよ。」

スレッガー中尉は、慣れない丁寧語を使っている。

仮にも艦長だから、仕方がないか。

「ありがとうございます。中尉。長旅の疲れを落とす時間が取れず、にすいません。事態が切迫しているようなので、急がせてしまって。」

若いフォウ少尉は、少し緊張している。

スレッガー中尉がプロメテウスの軍人であること、スレッガー中尉が持っている雰囲気はフォウ少尉にプレッシャーを与えている。

スレッガー中尉のエメラルド・グリーンの瞳はコンタクトレンズのようでもあり、義眼のようでもあった。

その眼は、フォウ少尉にとってあまり心地のよい眼差しには思えなかった。

（この男、すごくプレッシャーを感じる、なんだろう。この感覚は……）

フォウ少尉は、不安げになる心をスレッガーにみすかさねないように気を配った。

「最新鋭艦ですね。この艦は。」

スレッガーがフォウに聞く。

「ええ、偽装を施してありますからまだ軍部での正規な登録はして

ないんです。ペガサス級の軍艦であります。これに乗ってる船乗りはみんな実験部隊なんです。実践経験はこれから。」

「実験部隊？」

スレッガー中尉はなにかにひっかかる気がした。

「タイレル財団から預かったあるものもつんでいます。」

フォウが含みを残す。

「例の、あれですか？モビルスーツ」

フォウは、はつきりした口調で応えた。

「はい。そうです。我々は、中尉の情報の解析とモビルスーツの実験を行います」

スレッガー中尉は含み笑いをした。左手で頭をかいた。金髪が揺れる。

「フロンティア7群では、実験段階はとうに終わってるようです。フロンティア（国境）7とは、月の裏側にある人工コロニー群である。」

「それは、すでに連邦でも掴んでる情報です。中尉は、その調査のためにフロンティア7に行ってもらいました。」

「どうもタイレル財団は2枚舌のようですよ。タイレルは、反連邦組織体にもモビルスーツの技術を流してる。モビルスーツの基本的な骨格は、ワッケイナー博士の設計図どおりのようですがね。ただ、気になるほかの情報も得てきましたよ」

スレッガーの口調に堅さが取れてくる。

「気になる情報ですか？」

フォウが聞く。

「タイレル財団のほかに、アナハイム技研が創ったモビルスーツを確認出来ました。」

スレッガーの言葉がフォウに突き刺さる。

「アナハイム技研……」

フォウは、黙り込む。

「アナハイム技研のモビルスーツは、ワッケイナー理論とは異なる

気がしますよ。むこうにも、実験するやつがいれば、これからでしょう。まだ、プロトタイプですからね。まだまだ実戦に投入されるのは遠い話でしょう。」

フォウはスレッガーをみる。

「中尉、敵をあなどってははいけません。フロンティア7は、宇宙のコロニー群の多くを設計してくれた技術者集団の家族が住んでる場所ですから。アナハイムの人間もタイレルの人間も同じように暮らしています。」

スレッガーは、フォウがみかけによらず鼻っ柱が強いところを知った。

スレッガーとしては、エレガントな女性より向こうっ気の強い女性に惹かれる。

こういうタイプは弱くなれば、あっけないものだとしてスレッガーは知っている。

「ビダン艦長は、敵はプロトタイプの実戦配備もすでに可能とお考えのようですね。」

スレッガーは誰に言うでもないそぶりで話す。

「情報としてすでに入ってきているのは、そうです。少尉は、ナノ・ブラックホールをご存じのはず。」

人工コロニーの中心部に使っている『マイクロ・ブラックホール』の応用です。

すでに技術的に古い核融合炉を背負ったモビルスーツより革新的な性能を保有していると私は思います。」

「人工コロニーの重力の源であるマイクロブラックホールの応用技術……」

スレッガーはつぶやいた。

宇宙世紀の黎明期に人類の活動範囲と太陽系の半径は飛躍的に広がった。

その太陽系の最果てに近いところに、木星の大きさに匹敵し組成も

似た惑星が発見された。

組成が似ていると、すべての科学者が思いこんだ。

しかし、違っていた。なにもかも。根本から違っていた。

電子が反応する。

反物質が、この世界ここのせかいに存在することを人類が発見したのは、宇宙世紀0028年である。

ゼロ大戦以前の世紀に科学者が預言していたことは、この惑星の発見で実証された。

ただ、あまりに近くに存在することを誰も予測は出来なかった。

そして、人が生活する世界のすぐ近くに（宇宙のサイズからすれば近い）、人を寄せ付けない物質世界があることを知った。

『マイクロ・ブラックホール』は、反物質の反応の応用である。

それは、信じられないエネルギーを生み出す。

質量に対するエネルギーの大きさは核融合どころではなかった。

人類が応用を間違えれば、それは太陽系を食べてしまうだろう。

地球サイズなら、あっという間にブラックホールが食べつくす。

反物質の応用は、悪魔のようなエネルギーであるが人工コロニーの建設には、欠かせない材料でもあった。

宇宙世紀の黎明期のシリンダー型の宇宙コロニーは、反物質の発見で姿を変えた。

球型宇宙コロニーである。

それは、中心部にマイクロ・ブラックホールを有し、地球並みの重力を発生させる。

人工的に創られた大地と空を持つ。

大気は、マイクロブラックホールの重力で捉えることが出来ている。

自転しており、昼と夜が当たり前のようにある。

小さな地球を人は、宇宙そらに創ったのであった。

それを実現できたのは、反物質のおかげだが。

しかし、今度はは人の中に、欲望の赴くままに利用しようとしているものがある。

人が再び愚かな方向にむかいつつあることをスレッガーとフォウはお互いに予感していた。

「西暦の世界戦争で、当時の核兵器の使用によって戦争の終結があった事実を、中尉はご存じでしょう。」

フォウの瞳が輝く。

「ええ、新兵器であっけなく戦争の行方は決定づけられたようですね。」

フォウが続ける。

「でも、それが使われる前にほかのサイド（大西洋）、つまりヨーロッパ大陸のほうでは人の力で戦争の趨勢が決められました。Dデイといわれる作戦^{オペレーション}」

スレッガーはフォウの熱心さを感じた。

「我々が、遂行しなければいけないことは、そのころのDデイに匹敵する行為ですね。艦長のお考えは理解できます。しかし・・・」

スレッガーはつぶやく。

「

少し話ただけであったが、フォウが先ほど抱いていたスレッガーへの気持ちが変わった。

不思議なプレッシャーを持つ男だが冷血ではなさそうだ。

むしろ秘めた情熱をスレッガー自身が持っている。

（なにを考えている、スレッガー中尉・・・プロメテウスらしくない男だ）フォウは思った。

プロメテウスの軍人と連邦の軍人が同じことを考えるなど、あつてはならないような気がする。

しかし立場が違えど、通じあえるような気もしてきた。

フォウは初めて、スレッガーの前で堅くなった表情を崩した。

「少尉・・・いえ、艦長？」

「スレッガー中尉。しばし、休憩をとりましょう。最新鋭艦だけに結構な設備があります。良い湯船がつんであります。中尉・・・」

いたずらっぽい表情でフォウがスレッガーに近づいてくる。

「あなた、臭いますよ。」
スレッガーは、眼を丸くし、やがて眼が細くなった。
スレッガーとフォウは互いに大いに笑った。
ペガサス?のブリッジにいる乗員^{クルー}たちは、艦長とスレッガーの間に
信頼が今結ばれたのを実感した。

宇宙世紀0084年1月8日 PM 1:11

いつの時代も新しい価値観を持っていたり、風変わりな行為をし
たりすれば、ひとはそういう人々を新人類、変わり者あるいはニュー
タイプとよびさげすんだ。
新世紀、宇宙世紀においてニュータイプという考えは、宇宙空間へ
の適応能力の高さを表すことになった。

ひとがフロンティアのスペースコロニーで何世代も暮らし続けると、
宇宙空間への適応能力はいつきに飛躍した。

宇宙空間と壁ひとつで隔たったスペースコロニーの内部では、地球
と同じような街が拡がり人や車が行きかっていた。

地球と違うのは、厚い大気で守られていないこと。

大気が抜けたりすれば、瞬時に人々は窒息してしまう。

地球からの直行のスペースシャトル便でフロンティアに着いた『地
球人』は、はじめは観光気分で旅を楽しめるがやがてガラス瓶の中
にいるような心もとなさと不安に襲われる。

地球と似た風景を地面に見ながら、空^{そら}を見上げるとそこに鏡に映つ
た風景のように裏返しになった同じような街並みが何キロも拡がっ
ている。

ところどころに太陽光を入れるスリットが入っているが、そこから
覗き見られるのは、隔壁ひとつ隔てて真空の宇宙が背中合わせに存
在するという事実。

フロンティアへ訪れる旅人がはじめに感じる拒絶反応。

宇宙環境への不適応。

閉じられた環境とはいえ、月の惑星都市や宇宙シャトルの中にいるときの『ふつう』さとはあきらかに違う緊張感と危うさが旅人を襲う。

地球そっくりの大地と環境の違和感に慣れるには、時間を必要とした。

フロンティア7のロンドンベル宇宙港に最初に降り立ったジヨナサン・バウワー准将は、多少の気分の塞ぎと息苦しさを我慢していた。月から飛んできた特別なシャトル機に搭乗中にランフラット・アグリー参事官から宇宙酔い止めのドリンクを処方されて飲んでみたが効果は薄いようだ。

吐き気で胃が裏返しになりそうだ。眼のあたりにもやもやとしたものを感じる。

「宇宙酔いとは違った奇妙な気分だな。」

ロンドンベル宇宙港の横に隣接してある統合宇宙軍の連邦ビルの上階にあるVIP室の椅子に着座すると、バウワー准将は太った首周りをまわし、肩をあげさげしてなんども息をつく。

「そのうち慣れますよ。ジヨナサン・バウワー准将。」

細い身体に細長い顔をした神経過敏症に見える眼鏡をかけた若い男が軽く微笑んでバウワー准将の対面の椅子に腰をかけた。

「駐屯中の連邦統合軍は、警戒レベルをあげているか。」

准将が机に貼られたディスプレイ装置に触れると、空間にメニューが表示された。

准将はビールを注文し、細身の男はアイスコーヒーを注文した。

「はい。アクシスへの最前線基地が完成次第、派遣部隊をさらに増援していきますから。」

連邦の保有する軍事力の三分の二は、宇宙に展開されます。」

准将は額の汗をぬぐい、また不快な息をはいた。

「懸念がある。」

准将のカエルに似た眼まなこが男を見据えた。

「どついう。懸念でありましょうか？」

細身の男は身じろぎもせず、身体を准将の前に傾けた。

「地球育ちのひよつこどもで、宇宙移民と宇宙そらでひとしく戦えるのか。」

悩み深か氣に上目遣いで男にたずねた。

「・・・」

男は、動揺してる風もなくただ沈黙していた。

准将が次に何を語るのか興味があるという顔つきだ。

「ランフラット、即刻 各フロンティアに住んでいる若年者に対して人材の現地調達をしたまえ。」

徴用して連邦の軍人に育て上げる。」

准将の腫れたような厚い唇が動く。

「確かに、宇宙空間での戦闘には、重力になれてしまった地球育ちの人間には厳しい環境かもしれませんが・・・。」

ランフラット・アグリー参事官は細い顎に右手をもつていく。

顎のあたりをなでながら、准将の言葉を待った。

「早期決着を計りたい。そのためにも、連邦をささえる真の軍人たちの消耗をおさえる。」

緒戦は、宇宙そらに住むものどうしで闘ってもらおう。

連邦の主な戦力を地球に温存しておき、敵の侵攻のピーク時に一気に形勢を逆転させる。

敵が調子にのって軍事拠点を奪い勢力を拡大させようが、経済力、軍事力では連邦とは彼岸の差が開いている以上、侵攻の限界と停滞がある。

そこを突く。

世界大戦のシナリオは似たようなものだ。

緒戦で宇宙そらに散ってもらうのは、宇宙そらの同胞どうしてもよかろうが、

准将は、薄い大気で高山病にでもかかったような曇った表情でランフラットにおもいを伝えた。

「西暦1940年代の世界大戦のおりにもそのようなことがあつ

たと記憶しております。

太平洋の戦いの逆のサイトで、日系人の2世部隊がヨーロッパの激戦地で活躍したという記録がありますからね。

彼らが、常に最前線で同胞と同盟を組んでいたナチス・ドイツと戦えたのは、合衆国のゲットーで悲惨な生活を強いられている日系人の家族や恋人の開放と自由のため、ヨーロッパの開放などという大儀はなくごく個人的な理由からでした。

彼らに愛国心もなんら大儀もありませんでした。

目覚しい活躍をした事実はありませんが公式の書簡には一切の記録は抹消されています。

今回の案件でも、宇宙移民に対し圧力をおかけなさるつもりでありましょうか。？」

常に微笑をたやさないランフラットの顔は、准将に対する礼節と服従を伝えていてパウワー准将の苦悩を癒していた。

「ランフラット、私のいちぞんなぞでは決められんよ。責任をひとりで持つつもりもない。

連邦政府の政治家どもに法律を敷いてもらわないと、な。」

ランフラットは、微笑みをたたえたまま両手を組み直した。

准将の興奮を鎮めるのを確かめるとランフラットは、足を組んだ。

「准将もご存知のはずです。」

ランフラットの低い声に准将の眼が細くなった。

一息おいて准将が椅子から立ち上がった。

窓辺に行き、最上階から隣にあるロンドンベル宇宙港を観おろした。蟻のように人も車も小さく見える。

シャトルも同じく模型のようだ。

「まるで、人間なぞレミングスの大量自決のようであるな。」

准将がなにをおもってそういったのかとランフラットは、少し考え間をおいた。

それから、

「なるほど。地球という惑星に住みながら、ときに増えすぎた人口

を調整するように滅びに突き進むのですな。

自然の摂理が働いているような気もしてきます。

ひとの及びもしない力がなにかをつくりだしている。

それに、踊らされてるだけが人の一生ならよく出来た悲劇です。

いや・一級のコメデイですかね。」

ランフラットは、あたりさわりのない言葉で准将の気持ちを探ってみた。

「コメデイだ。軍人だ、政治家だ、といえど民衆の民意で動いているに過ぎないところもある。

屑のような輩が自らを駒のようにいうが、我々だって民衆から無責任にいいように扱われている大きな駒にすぎないと思うと気が滅入るばかりだよ。」

ランフラットは准将の気持ち言葉通りとは思っていなかった。

准将のことをわかりすぎるくらい知っている男は、ここで言う言葉は心得ていた。

「大きな駒でいいかとおもいます。」

つまり素直に同意することだ。

「ランフラット、いいのだな。」

准将はランフラットに背を向けながら満足そうに窓の外を覗いていた。

「はい。」

ランフラットは応えた。

「ところで。」

木馬の艦長は、ニュータイプだそうだな。」

そう言うと准将は窓辺を離れ、椅子に深々と座りなおした。

「ニュータイプかも、しれませんが。実戦はこれからです。

今回の作戦では、最前線に出してあります。

初陣を飾りますよ。

歴戦の軍人たちにとっては、歯がゆいところでしょう。」

准将は醜い顔をゆがめた。

笑ったのだ。

ランフラットは慣れていた。
動じない。

「そこにプロメテウスの赤い奴を なぜ入れた。？
今回の作戦任務ではプロメテウスの軍人はうまく排除していたらう
に。」

それとも。？」

准将の語気が強くなった。

両生類に似た男の口臭がするよう な すえた空気が漂った。

「准将。赤い彗星とは違います。」

伝説のあの男ではありません。

ご心配なさらずともよいのでは。

似てますが、別人です。」

准将のカエルのような眼がかつと見開いた。

脂ぎった顔と首筋の血管が浮く。

皮膚が赤く染まった。

「我にとって赤い彗星は伝説ではない。

わしは、赤い彗星に沈められた艦ふねに乗っていた。

後にも先にも、短時間であれだけの戦艦を何隻も沈めた男はいない。

あの赤い機体を2度と拝みたくはない。

なのに、プロメテウスの輩やからは、エースパイロットには赤いスーツと

赤い機体を与えるとは。

正規の連邦の軍人としてはやりきれないおもいだ。」

准将は、一瞬のうちにフラッシュバックに陥り、過去をみた顔にな

っていた。

汗をかき怯え慄いていた。

「准将のお気持ち 察しいたします。」

プロメテウスは、愚連隊です。

役割りを与え正規軍人が手を出し辛い作戦こそ利用価値があります。

「

「汚い仕事に就かせるか。」

准将がランフラットに尋ねた。

常に冷静さをランフラットが与えてくれる。

准将は、ランフラットの優秀さに惚れていた。

「うまく導きます。」

それから『レディ・マドンナ』から情報を得ております。

ロシア、月面のクラークシティ。フロンティア11は協力関係にあるようです。

フロンティア11では、『王政復古』主義が叫ばれております。」「
規正の事実だった。

目新しいことでもない」と准将は思った。

当然、知っている。

「この宇宙世紀に、なんと回顧主義な話だ。」 a

准将はのどのあたりで笑った。

「おうせの通りで。」

フロンティア11はハプス皇国となり初代皇王は、ヨーロッパのハプスブルク家の末裔が就くとか。」

准将の眼が細くなり、ゆがんだ口元がひらく。

「宇宙に浮かぶフロンティア群は国家ではないぞ。」

まかり間違っても国ではなく、単なるスペースコロニーにすぎん。

国家というものは地球にしか存在せんのだ。

それを自ら、勝手に国を創ろうとは。笑止ぞ。」

ほんの少し語気を強めてランフラットに語った。

「阻止しなければなりません。准将のおうせの通りです」

ランフラットの瞳がつよく輝いた。

「ふむ。」

准将は、ランフラットの眼が語った意味を理解した。

そして、それを自らの眼で確認すると安心した表情を取り戻した。

アースライトセレナーデ・2

宇宙世紀0084年1月2日 PM 6:15

月にあるレールガンから次々と発射されたコンテナは、2週間後にはソロモン宇宙域に届く予定だ。ソロモンに到着後に、コンテナで運ばれパーツは集められ連邦の最前線基地が造られる。

最前線基地は、武装化され堅固な要塞となる。

人工の要塞群が出来上がれば、小惑星アクシスと対峙することになる。

宇宙に浮かぶ軍事要塞群……。

連邦が築いた要塞群を基点に、艦が集まり作戦行動を取る準備を始める。

連邦の要塞が、数ヶ月のうちに少なくとも5箇所設置される予定である。

地球連邦政府は、反体制勢力の進行ルートを封じ込める必要があった。

月は、まだ地球連邦政府の統治下にあり連邦の最大の要所であるが、宇宙に浮かべた連邦の要塞群で十分であろうと高官たちは思っていた。

1週間前に先行して航海している連邦所属の艦隊は、全部で8隻である。

宇宙艦隊とはいえ、地上の艦隊のような船の型はしていない。

宇宙を泳ぐ艦は、かたちの制約を受けずに済む。

大胆なかたちをしていた。

高イオン・プラズマレーザ砲3連装を上下・左右に2段つつ備えている。

後方に、同じく2連装で上下・左右に1段で武装している。

ミサイル群を発射できるノズルが両サイドにある。

連邦では、駆逐巡洋艦ビーターバンとよんでいるタイプの艦だ。ふね

駆逐巡洋艦が合計5隻。

駆逐巡洋艦よりひとまわり大きい艦ふねが駆逐巡洋艦ビーターバンの左右に並ぶ。

戦術戦艦である。

駆逐巡洋艦の倍の攻撃力を保有している。

戦術戦艦バトルリョットは、揚陸強襲艦ヘカサスを2隻格納できるスペースをもっていた。

揚陸強襲艦ヘカサスは、モビルスーツ8機分積載可能であるが、今は配備さ

れていない。

いずれ配備されることになっているが、現在はステルス戦闘機が搭載されているだけであった。

8隻の艦ふねは、地球連邦治安維持軍に所属し、第7機動艦隊に所属している。

旧世紀（西暦の時代）の国連の治安維持軍と同じような活動をする性格をもつ。

地球の国家間で集められた精鋭部隊である。

圧倒的な火力で戦意を消失させ、話合いのテーブルに当事者同士をつかせて、和平交渉を行わせることがひとつの目的である。

また、軍事力の規模だけで相手が戦意を失くせば、武力行為は一切せずに民間人の治安維持を行い復興の手助けをすることも任務である。

そして少なくともこの艦隊の乗員クルーのほとんどは、軍事行動を一切せずに穏便に治安維持の任務をおこなうことを希望していた。

任務が終了しだい、無事に家族の暮らす地球に帰ることが乗員クルーの本音だった。

連邦の軍人は、そういう人間が多いのだ。

プロメテウスになると毛色が違う。

かつての大国であったアメリカ・ロシア・中国は今ではゼロ対戦後の後遺症で小さな国家となってしまうていたが、地球連邦政府の閣

議でも、今だにタカ派な主張をしてくる。

限定的に核兵器が使用された大国の土地の多くは、放射能レベルが基準値を大きく上回っておりひとが住めなくなっている。

それでも、昔の栄華にすがりたい高官たちがいる。

典型が旧アメリカ合衆国の軍人であった。

プロメテウスの中には、アメリカ・ロシア・中国からの出身が多いのもそういう特徴があった。

プロメテウスの軍人たちはアクシスへの治安維持任務に就かずに、ことの成り行きをみていた。

地球連邦政府としては、プロメテウスの介入を極力排除したいのでなかばほっとしているといえる。

そして、第7機動艦隊よりさらに先行して任務にあたっているのが、フォウ少尉とスレッガー中尉が乗っている艦トローであった。

スレッガー中尉は、モビルスーツを眼のまえにしている。

モビルスーツの足元から上のほうへ視線をめぐらす。

白く輝く2脚の足は、無骨にどっしりとしていた。

人間の胸部にあたるところにコクピットがある。

モビルスーツの表面は、鏡面のように輝いている。

鏡面状の表面は、光学迷彩で変幻自在に色をかえる。

モビルスーツは、ひとが扱う人型兵器として進化してきた。

つまり、足があり腕があり頭部がある。

全長19メートルの高さがある。

いつからひとが乗るようになったのかとスレッガーは思う。

宇宙世紀の黎明期には、パワード・スーツが主流であった。

パワード・スーツもひとが操る人型兵器であったが、パイロットがコクピットに座り操縦するのは違う。

パワード・スーツは、着用する。
着る。

下着を着るような感覚で動ける。

忍者のような俊敏性と凶暴な狼のような殺傷能力を全身に身につける。

はじめてパウード・スーツを着る人間は、その力、しばし万能の力に酔いしれ恍惚となると聞く。

パウード・スーツが幾多の戦場を駆け抜けるている間に、人型兵器は時間とともに無人と有人にわかれていく。

さらに、無人でも遠隔操作とAI（人工知能）で。

そこに、タイレル財団の開発したネクスス6が現れた。

パウード・スーツを着用した人間も、無人人型兵器も、戦場からあつさり駆逐された。

テクノロジの進化は、次に要求をしてくる。

恐竜の進化のように。

スレッガーは思う。

進化論からすれば、巨大化によつてなにを得て何をなくすのかと。

この白い巨人を自在に操り、宇宙^{宇宙}を駆け抜けることの意義とは？。

攻撃する側からすれば、攻撃標的の大きさが大きいほど数の集中力で撃破できる可能性が高い。

1体のモビルスーツにたいしてステルス戦闘機複数で挑めば、勝てない話ではない。

波状攻撃を数波にわけてしかければ、巨体ゆえに必ず倒れるだろう。しかし、人間の心理がそうはさせないのだ。

畏怖である。

恐怖心である。

原始の本能が恐怖に駆り立てる。

逆に、^{モビルスーツ}巨人を操るほうは、万能の力を得た魔人と化すだろう。心理戦で圧倒的に有利にたつ。

太古の昔も、原始人が武器を持っていようと、巨大なティラノザウルスを簡単にハンティングはできなかつたように。・・・

スレッガーは、このような『いくさ』は好まなかつた。

モビルスーツを一機のステルス戦闘機で屠ることが、数倍 自分を

誇れる気がした。

それでも、先ほど行った連邦の軍事シミュレーターでおおよそのモビルスーツを操縦するコツはつかんだ。

次は宇宙での模擬戦闘訓練にうつる手はずになっている。

あと数時間後のことであつた。

そのころ、最果てのスペースコロニー群では、地球連邦政府から完全独立をめざして密かな集まりがあつていた。

この最果てのスペースコロニー群は、のちにハプスブルク家の末裔にちなんでハプス皇国を名乗るようになる。

宇宙で暮らす移民たちは、地球を遠く離れば離れるほど地球に対し郷愁の念が強まっていた。

ゆえに、地上のひとより人間らしい生活と自然環境を求めている。

最果てのスペースコロニー群は、フロンティア11（イレブン）とよばれ、全部で7基のシリンダー型コロニーで形成されていた。

7期のスペースコロニーにおよそ2000万人の人々が暮らしてた。地球に近いコロニーがマイクロブラックホールの応用で球型スペースコロニーに順次変わっていたのに、フロンティア11（イレブン）は以前旧式のコロニーのままであつた。

時代に取り残された感があつた。

ドイツ系移民のクレイグ・カーンは、若きころから西暦の時代の社会主義や共産主義に深く傾倒していた。

虐げられた人々の境遇改善のために、この宇宙世紀に生きる人々のための新しい思想がぜひ必要であると考えていた。

クレイグ・カーンの古くからの友人であり、宇宙世紀の新しい思想を共に語れる唯一の人物がラードルフ・ベルガーであつた。

カーンとベルガーは、思想の推敲をまとめるにあたって、兄弟のように過ごし寝食をともにした。

極貧を味わい、辛酸をなめた。

「地球に住んでるやつに、教えてやりたいよ。宇宙つてやつをさ。」

カーンがぼやくと、ベルガーがたしなめた。

「いずれ、宇宙移民が大事にされる日がやってくるよ。ずっと奴隷の一生を送るつもりはないからね。」

地球環境の悪化で、今ではむしろスペースコロニーのほうが大気はクリーンだ。

風景だつて綺麗だよ。

皮肉に聞こえるかい。」

「それでも、地球環境に残って暮らしている人々のほうがはるかに多い。」

富も食料も比べ物にならないほど潤沢だ。

そのうえ母なる地球は、連中から毎年汚される一方さ。

フロンティア11（イレブン）の天文台からの観測でも確認できるくらいだ。

ベルガー、また地球は汚れはじめている。」

安楽な椅子に腰掛けて、椅子の袖に頬杖ついて足を組んでいるベルガーは眠たげに応える。

「レーニンやスターリンのように、きみは粛清を考えているのか？。君の考えはいずれ独裁国家を導く。」

同志を集めて、組織的な反抗をやっているうちはいい。

しかし、地球連邦政府を転覆させたあとにどうする？。

政権についたとたん同志の仲で反乱分子が生まれれば、すぐに粛清というジェノサイド（虐殺）がおこなわれるぞ。

社会主義や共産主義を標榜した連中はイデオロギーで民衆を引っ張っていいこうとするが、民衆のよい生活までは面倒をみないからな。いずれ硬化した階級社会になる。

連邦と同じような腐敗が始まる。なにより、ひとがひとを監視する

監視社会が出来上がるのが怖い。」

鋭い眼をしてカーンはささやく。

「それでも、フロンティア11（イレブン）の増えすぎた人口をこのスペースコロニー群だけではまかないきれないんだよ。地球への一時帰還制度の廃止法案が連邦の閣議で決定されたことにより、食料や富を自ら養えといわれているようなもんだ。地球連邦政府は、フロンティア11を見限っている。

われわれは、棄民された哀れな子羊だよ。」

「それで、地球に住む連中を肅清するのか？。一方的に？。」

「太古の地球の砂漠地帯に救世主が多数あらわれた。ローマ帝国の属州からの独立を待ち望む民衆の熱烈な声が救世主を生み出した。真の救世主があらわれたとき。しかし・・・救世主はなにもおこなわず、処刑された。

その民は、それ以降 流浪の民となり長い年月、国をもたなかったと聞く。」

「その救世主が、かたつたのは『愛』だな。」

「そうだ。『愛』だ。人類愛だよ。すべての。やすつばいはなしだ。」

「そうかだろうか？。たんなるおひとよしとはいえまい。」

「それだけでなく、同時期にローマ帝国にまたもや複数の救世主があらわれたそうだ。

砂漠地帯の『真の王』（きゅうせいしゅ）ではなくて偽者が・・・な。

にせものは、ローマ帝国を内部から崩壊させた。真のきゅせいしゅは、にせものだった。そこに真の王が語った『愛』などどこにもなかったのかもしれない。跡形もなくな。

いつの時代も歴史は改ざんされ、勝者の記録として伝えられるに過ぎないものだ。」

「歴史は、確かに勝者のものかもしれん。しかし、人のころころには負けた者への思いやりのほうがはるかによいのではないのか?。」

負けたものへの憧れを人間なら少しはあるだろう。

憐憫や同情でもいい。感情移入でもいい。

弱者へのおもいやりこそ大事だ。

時間はかかるが宇宙で暮らせば、ひとの革新は必ず起ると、私は信じている。

だから、砂漠の真の王であるキリストのころざしは、のこったのではないか。

ほかの思想もそうではないのか?。カーンよ。」

「ベルガー。俺は、おまえの知っているとおり、その『あい』とやらから一番遠くにいる存在だ。」

この世界に生れ落ちてこのかた、俺はその愛がなんたるかを理解出来ずにいる。

愛とは、そのように簡単なものなのか?。

そのような簡単なものが、なぜ平等にひとに与えられぬ。

俺は、人類の起源があるように愛という言葉が生まれた起源があると思うぞ。

サルは愛を声だかに語らない。

弱肉強食の自然界で生き延びるためには、愛も手段に過ぎないのだ。砂漠の王が間違えていたのは、ひとははじめから平等ではない。

愛は、支配し差別をうつむ。

愛することはできても、愛されない存在はやがて愚者になり敗者になる。

醜く朽ち果てるまで、なにも知らずに。」

「カーン。おまえのもとを去ったものたちをそのように言うものではない。

ジェイミーは、そういう女ではなかったぞ。」

「違うというのか」

「愛は風と同じ・・・。」

眼には見えないが感じるもの。

高ぶらず、誇らず。

苛立たったりせず、恨みをいだかない。

すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える・・・。

愛は、風ように振舞う。」

「俺にはやはり理解できない。痛みを伴うものが愛なら、俺は・・・」

「よそう。個人的見解をこれ以上しても。」

ただ、カーンよ。

お前の息子と娘は誇りに思っていていいぞ。

それを、忘れるな。

ジェイミー・ランドンが残したお前への贈り物だ。」

「そうだな。どうかしてた。赦してくれ。」

「わかるよ。気にするな。」

地球しか住む場所がない人々が、墮落して地球の環境破壊を続けているのだからな。

地球に住む人々が、地球を離れてみたらきつと気づくことではあるが。

地球の重力に惹かれたままでは、生まれ星を失くすまで気づかない。彼らが、一生の間に宇宙そらにあがることはほとんどないだろうから尚更だ。」

「まさに、そのとおりだ。

スペースコロニーで生活する宇宙人ホモサスペンスが宇宙そらという環境に完全に適用できる時代には、地球のほうが辺境の惑星になりさがっているだろうて。」

「カーン。コロニー落としをするつもりか?。」

「いずれしなければなるまい。・・・」

「連邦の締め付けがこれ以上たかまれば仕方がないことではあるが。私には、妻と5人の子供がいる。」

長男は、プロメテウスで軍人を勤めているが有事の際は、フロンティア11（イレブン）に戻ってもらう。

私の片腕となる。

少々、理想主義者で気が強すぎるところが困りようだがな。

上の娘は、フロンティア11（イレブン）で連邦の情報管理省移民管理局外惑星室で室長をやっている。

私には出来た娘だ。

むしろ、カーンよ、私を継いでほしいのは嫡男より、娘のフィオナのほうだが。

私の考えに理解がある。

ふっふっ・・・

今は、ふしておくよ。

いろいろあってな。

家族というものは。

しかし……

私が生きてる時代に、未曾有の大戦がおこるとは夢にもおもわなかったよ。」

「まだ、おきてはいない。ベルガー。

いくさをとめれるかもしれん。

歴史の流れの中に人々が飲み込まれてしまえば、誰もそれに逆らえない。

組織だろうと、個人だろうが……歴史の証人になるのだ。逃れられない。

そこには、善も悪もある。愛もその逆も。喜びも。悲しみも。ある意味、ひとの原罪さかだろう。……

だが、最低限でもお前は、お前の家族を守るのだ。」

「そうだな。」

「お互いに、友よ。これからいそがしくなる。」

「カーン、そろそろ演壇へ向かうか。

今日、ここに集まった同志によって新しい宇宙世紀の一步を踏み出すのだ。

お前の『人間の革新論』と『ニューフロンティア&ニュータイプ論』がフロンティア（イレブン）11の民衆を革命に導くだろう。」

2人は椅子から立ち上がり、群衆が待っている場所へ向かっていった。

会場には、アナハイム技研の人間がいた。

タイレル財団の人間もいた。

人間でない「にんげん」レプリカント「ネクサス？もいた。群集の中に瘦せた眼鏡をかけた中年男がいた。

きつちりした西暦風のダークスーツに身を包んでいる。神経質そうな目元をしている。

耳にはめたガジェットで通話をしはじめた。

「ベルガーとカーンが、壇上に現れてきました。

これから、演説が行われるようです。

ベルガーもカーンもよく働いてくれます。

長引く連邦の不況と地球での紛争の激減で、大変でしたが。

連邦とアナハイム技研との取引も激減しましたからね。

ようやく、

傾きかけた我社をいつきに立て直すチャンスがやってきました。

大口の契約を結べたと思います。」

「会長も喜んでおられる。連邦とフロンティア（イレブン）11に武器供与が出来ることは喜ばしいことだ。これで、どちらが勝とうが負けようが利益を得られる。

さらに、戦争責任も回避できるというわけだ。」

「そうですね。敗戦後の戦争責任の追及を逃れられる口実を開戦前に作っておくことは重要かと思えます。復興後の世界を救済するおききな受注も待っていることでしょうし。」

「ビジネスライクな話だな、ギレンスキー博士。なにかと知恵がまわるお方だ。

ほんとうに戦争を引き起こしているものを大衆は永遠に知ることはないのだよ。

巨大資本のマスコミも傘下にある我社であるから、圧力をかけられるし。」

「疲弊した地球経済を回復させるにはどうしても必要なカンフル剤となるでしょう。」

経済の行き詰まりへの唯一の打開策です。」

「ギレンスキー博士。」

連邦政府議長も、連邦の高官もなっとくのことだ。事前に情報はとどいてるはずだ。

この戦争は、1年くらいで決着をつけねばならん。

アナハイム技研としては、1年以上の戦争となると、急速に利益配分が落ちてしまうからな。

うまく、両陣営をコントロールするようにしたまえ。」

「はい。ただ・・・。」

「なにかあるか？。遠慮せずに言いたまえ。」

「はい。連邦とフロンティア（イレブン）11はコントロールはできると思いますが。」

あのプロメテウスの動きが今のところ不足の事態をよばないかと少々気がかりです。」

「あの極右勢力か？。三つ巴の戦争はよくない。プロメテウスをどちらかの陣営に組み込まねばならん。」

それは、ギレンスキー博士。別の人物にまかせることにする。」

「はい。」

「ところで、ギレンスキー博士。フロンティア（イレブン）11の独立運動を導くものは・・・ひとりで十分だろうか？」

「おつしゃると通りかと。カーンを残すか、ベルガーを残すか。調べているところですよ。」

「博士。会長からの通達だ。カーンを残せ。ベルガーは革命を導いた殉教者にしたまえ。」

そして『ニュータイプ論』は、ベルガーが導いたとする。立場を逆にする。

会長の判断理由は簡単だ。

ベルガーは、子が皆大きい。カーンは、独り身で幼子を抱えている。・・・」

「まさか・・・実は、私は、ベルガーを残す気でいました・・・。ニュータイプ論を持ち出した学者のカーンでは政治は理解できないかと思いましたが。」

「そうだ。カーンは、愚か者だろうて。ベルガーがいたからカーンが世にでたようなものだ。だからこそ、世の中の理ことわりをなにもわかっていない愚か者のほうが傀儡しやすいのだ。」

「ベルガー一家を処理せよと、ご命令ですか?。」

「そうだ。君に良心というものがあるなら。どこかの辺境に永遠に幽閉したまえ。」

「わかりました・・・。しかし、ベルガーの長男はプロメテウスの軍人でありますから、慎重にことを運びます。」

ギレンスキー博士は、通話を切った。

ベルガーには、確かに5人の子がいた。

長兄のシュミハルト・ベルガーは、連邦のプロメテウスに所属し、地球連邦政府コロニー公社外惑星管理局フロンティア管理調査部に
出向し局長を勤めていた。

月面にあるクラークシティにコロニー公社の所在がある。

古典の文学者、アーサー・C・クラークからのネーミングらしい。

そこで局長を中心に対外惑星^{そび}諜報活動をおこなっていた。

連邦内部では、通称 シュミハルト機関とよび諜報戦の一翼をにな
っている精鋭である。

連邦に諜報機関は、原則存在しない。

あつてはならないのだ。

地球連邦政府規約にある。

国際機関である連邦に諜報活動は許されない行為だからだ。

ゼロ大戦後に地球に残った国家には、自前に諜報活動をする組織が
西暦以降も存続し続けていた。

イギリスには、M I 5、M I 6が存在するし、イスラエルにはモサ
ドがあつた。

旧合衆国は5つに分割されたが、対諜報機関であるC I AもN B A
も存在した。

特殊部隊も。

旧合衆国の軍隊組織の特殊部隊であるデルターフォース、シールズ
等もいまだ健在であつた。

ただ、シュミハルト機関と違い、地球上での国家間の外交や紛争の
解決手段として存在しているだけで、

対宇宙^{そび}からの攻撃に対しては各機関がばらばらに活動していた。

シュミハルト機関のように地球連邦政府をひとつの国家としみなし、
外敵からの脅威に備えるという感じではなかった。

地球上に存続する諜報機関も特殊部隊も、あくまでも自国の国益の
ためだけにあつた。

シュミハルトより2つ歳下の妹にフィオナ・ベルガーがいる。

フィオナは、連邦政府情報管理省移民管理局外惑星室で室長を勤めていた。

最果てのスペースコロニー群の中にあるフロンティア11と月のちようど中間にあたる位置にフロンティア9がある。

フロンティア9は、いわば宇宙の経済特区で賑やかな場所であった。アトラクションやカジノが並び、西暦の時代のラスベガスや上海のような歓楽街型都市群であった。

その9（ナイン）の2番目のシリンドー型スペースコロニーに、プロメテウスのような連邦政府軍組織とは直接関係のない機関である移民管理局の出先機関が存在していた。

移民管理局は厳密には諜報活動を行っていないが、宇宙への地球からの移民や渡航を管理し監視をしていた。

地球から宇宙へのテロリストや犯罪者の逃亡を防いだり、地球への侵入を阻止していた。

また地球から消えたVIPの失踪者の搜索活動もしていた。

もちろん、一般人の外惑星への移民手続きが主な仕事ではあるが。

シュミハルトとフィオナは、プロメテウスと連邦政府という立場の違いがあれ、諜報活動を秘密裏に行える立場にいた。

父であるラードルフ・ベルガーの野心がそうさせたわけではなかったが、2人の子は何がしかの意志を持って地球圏のために働いている。

シュミハルトとフィオナが職務上で会議をしたり食事をもにしたりすることはなかった。

2人が、直接 会わなくなってもう5年以上の月日がたっていた。

ただ、シュミハルト機関のエージェントが2人の連絡係をしており、お互いの仕事のために情報の共有をおこなっていた。

ラードルフ・ベルガーの残りの3人の子は、宇宙に住んでいる。

末っ子のティアナ・ベルガーは、行方が知れない。

フィオナが連邦の本部勤務から移民局に移った動機のひとつに消えた妹の搜索があったのは事実である。

ティアナは、ハイスクールの最後の夏に忽然と消えた。

フィオナとは12歳も歳がはなれた妹である。

よく事情を知らない他人からみれば母と娘に見えたかもしれない。

ラードルフのティアナへの溺愛は、誰の眼からも明らかかなほどであった。

「歳をとってからの子は・・・」とよくラードルフは言葉をこぼしていた。

「成人して綺麗になったティアナを生きて見ることはあるまい。ティアナにはベルガー家にはない家風と

自由な生き方をしてほしい。年老いた老人の本音だ。」

たまに、父がこぼしていた言葉、あるいは声がフィオナの脳裏にいまだに残っている。

父親は、フィオナに非凡な才能を見出し兄とかわらずに厳しく英才教育をしてくれた。

そのおかげで、今現在 兄とはりあえるほどの地位と名誉を手に入れている。

むろん、偉大な父に感謝しなければならないことは承知している。

だが、なにかが足りなかった。

（わたしにはなにかが、はじめから欠けている気がする。

それは、しあわせの理由わけを知らないから。

わたしは、きつとわたしを。真実のわたしを解放してくれる出来事、ひとを待っている・・・）

厳格な父親は、兄と同じように、それ以上に男性のような教育をした。

ラードルフは、時に不良化した兄・シュミハルトを期待はずれのように愚痴をこぼした。

フィオナは愚痴っばい父のよい話し相手となり、それをしてあげているときに湧き出る感情が父からの愛情に違いないと信じていた。

そばにいればラードルフはフィオナに兄以上の期待をかけているよ

うに囁いた。

まだ世界が清く輝きをはなっていた季節だからこそ、父の期待に応えることこそ『愛情』だとフィオナも思っていた。

（あの頃は、父に疑問も邪心も抱かなかった。でも、ティアナが生まれて父が変わった。

父がティアナに見せた笑顔もやさしさも、わたしには向けられることはなかった。

ふっ、笑うわ。今さら昔のことを思うなんてどうかしている。）

たしかにルードルフは、フィオナに女性らしい特性を生かした進路を口に出したこともなく、将来美しく育って平凡な女性の幸せ送ることを願っている風には見えなかった。

「強く生きよ。」とルードルフはフィオナに求めていた。

素直に、フィオナをこころをあらわせば

『父にうまく利用されているだけではないのか・・・』

・・・ただの道具ではない。

父の気持ちはティアナに対してと私とでは、あまりに違う。』

この疑念が歳を重ねるにつれフィオナの頭をよぎっていた。

フィオナもティアナも綺麗な見姿をしている。

移民局の室長といういかめしい肩書がなければ、その美貌で男を惑わすだろう。

しかし、フィオナはこの歳になるまで本気で恋愛をしたことは一度もなかった。

いや、なかったとフィオナが思い込んでいた。

そうでもしなければ、自分自身を築いていたものが音をたて壊れてしまう気がした。

人知れず、だれかに熱をあげたことはあったとしても、偉大な父の要求に応えるためにはベルガー家を背負う運命と諦めなければならなかった。

それは、とても蒼く淡い記憶であった。

そういう感情に触れるものは、いつか消えてなくなると自分に言い聞かせて生きてきた。

たび重なる喪失体験が、フィオナを仕事だけにうちこませる女にしていた。

そして、気づいたころには兄・シュミハルトに近いところまで上りつめていた。

フィオナは思った。

本気になれないのは、幼い頃からの愛情不足かもしれないと。

特に、地球圏と宇宙圏での諜報戦の最前線の指揮をとる立場について尚更そう感じていた。

兄であるシュミハルトは、そのような妹をときに不憫に思った。

そしてフィオナが、父・ルードルフからの必要以上の期待の高さに生真面目に応えすぎるところに、

少なからず心配をしていた。

幼きころは、あれほど仲が良かった2人であったからこそ、ここ数年のフィオナの変わりようは、

シュミハルトにとっても懸念すべきことであった。

シュミハルトは、細身の体躯にブロンドの短髪。

長く通った鼻筋と、沈黙をしていれば冷徹な印象しか与えない薄い唇をきつく結んでいる。

人前で笑った顔をつくることはままずなかった。

父に似て、軍装に身を包んでいなければお堅い学者のようにしかみえなかった。

連邦の機関であるプロメテウスでの異様に速い人事の抜擢は、類いまれなる己の才覚にあると、シュミハルト自身がそう確信している。悪い噂もある。

それが事実だろうとそうでなかつたと、シュミハルト自身が知っていることである。

諜報活動をすることにたけていることは、内外に多くの敵を創り出す。

味方の組織内の人間であろうと屠らなければならぬ場合だつて出てくるだろう。

そういう理由^{わけ}ありで、希有の出世を果たしたように世間の人々はシユミハルトに感じていた。

諜報機関の長^{おほ}を務めるものにとって、孤立と孤独はもつとも親しい友であつた。

孤独を親友とし、冷徹に判断を下す力量が、連邦で、特にプロメテウスの年老いた高官からの指示を集めていた。

腐つた高官の老後を守ってくれそんな狡猾な人物として……の抜擢である。

飼い犬。都合のよい猟犬。

そうだろうか？、世間の風潮をシユミハルトが気づいてないはずがなかった。

それは、それでいいだろうと苦笑う。

そういうことにしておく。おうせのままに……。

そしてプライドが高くうぬぼれやすいことを、シユミハルト自身が自覚していた。

それが、生来の気質であり避けられない性格だからこそ、そこを伸ばしていけば決して悪いことではないとシユミハルトは考えていた。

（俺は、自分自身でここまで上りつめてきたのだ。

父の力でも、影響も受けていない。

むしろ、父がああのだろふであるからこそしりを受け、辛酸をなめたことだつてある。

父の寵愛をつけて、将来を囑望されつつづけているフィオナとは違つのだ。）

シユミハルト自身、フィオナにときより抱く嫌悪の感情をどこにもつていけばよいのかわからずにいた。

ルードルフに操られている感じはフィオナと同様に感じていた。

（出自を間違えたようにも思う。あの父であるがゆえに、われらの家族は不幸なものよ。・・

しかし、運命を呪うだけではあまりに平凡過ぎる。

父のような思想やイデオロギーでは人の革新はおこりえない。

民衆の目前で起きる出来事によって、ひとは驚き自ら意識改革をするものだ。

自然と。なりゆきまかせて・・・。

俺が描く理想とする人類の真の姿は、繰り返されてきた破壊と再生。栄光と挫折の連続の末に訪れると思う。俺は、フィオナのように父の言いなりにはならない。）

ルードルフやフィオナのことを考え落ち着かなくなるとき、シユミハルトは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「セイラ」

地球光を浴びながら、フィルターの利いた保養地にいる。

ここが月の表面だとは、気をつけないと忘れてしまいうだ。現実には私は、適度に空調の利いた浜辺にいる。

海が確かに存在し、波が打ち寄せてくる。適度に。自然に。

風もそよいでいる。

砂浜にパラソルをたて、クラシックな椅子に寝そべって地球を観ている。

ゼロ年代以前が昨今のブームで、私もクラシック音楽に夢中になることがある。

とくに、西暦1980年代のマイケルと、ザ・ポリス（ステイキング）がお気に入りである。

ブームは何回か再燃するものだ。マスターはそう言っている。

心地良い。これは、ほんものだ。

たしかに。

疑似体験と現実とは、確かに違わなければならないのだから。

もちろん私が体験しているものは、バーチャル3Dの映像処理でもなく薬物でのトリップでもない。

この時代で一番おてがるなのは、やはりドラッグによるトリップだろう。

安くていいが、その代償はきつと高くつくだろう。

とてつもないリスクを背負う。危険だ。

少なくとも、富裕階級には、そのリスクを負うものはいない。

私は富裕階級ではないが職業から、ここにおいてもなんら問題はない。

これは、つかの間のご褒美でしばらくしたら仕事に奔走させられるだろう。

だから、ゆっくりくつろぎたものだ。職業はなにかって？

それは、今は休暇中で。語らなくてもいいだろう。

地球にいたころは、確かにトリップしまくっていた。

あれには、もどれない。本当と本物を味わうと味気ないものだ。

あれは、やすものだ。

所詮、安物は安物でしかない。

テクノロジの限りを尽くしたトリップ端末は、

最下層の住民を偽りの充足感を与えるために用意されたものにすぎない。

皮肉なものだ。

「やすもの」＝通称：（ドラッグ）は、愚民を納得させるために莫大な開発費がかけられて創られたのだ。

大戦後の混乱で誰もが背負うことになったDNA疾患を治療するためと、

限りある資源の有効活用のためにもいたしかたないことであるが。

宇宙世紀には、本物やオリジナルには高い価値がつけられるのだから。

私がオリジナルであるかどうかって話は別問題だけど、今のところ私はで私に出会ってない。

オリジナルだ。オリジナルだと信じてる。本当に。

違法コピーでもされない限り、データつまり、私のDNA情報は漏れてないはずだからね。

大戦後に一時的に流行って（はやって）衰退したテクノロジーの一つに、人体への端末移植がある。

モバイル端末を人体に移植することは、貧しきものの証明でもある。ID識別は、なんらかの型で個人認識が必要であるから。

もつとも安かな電子端末を人体に埋め込んでいるこども（子供たち）に出会うと同情して哀しくなる。

しかたがないことだか・故障も多いらしい。部品の劣化もこの時代からしたらナンセンスに近くローテクである。

私が、使ってるモバイルガジェットは、左手首に巻いてるスカーフのようなもの。

今の流行り（はやり）でこう巻いてる。

光学迷彩を軽くほどこしてあるので、手首に巻いてることすらわからないかも。

そう、休暇3日目に地球にある考古学博物館にいった。

昔の人のアイデアもすごいなと感心するが、おかしかった。

ゼロ年代以前のクラシック2D映画。

頭部に大きいプラグ（？）を差し込んでいた。

あれは、・・痛そうだ。あれは、未来人でも避けるよ。

宇宙世紀では、頭に電極を差し込むプラグのようなものはない。

あれは、美的にセンスがなさ過ぎるし、ナンセンスだ。

もつとさりげなく洗練されている。

スタイリッシュで目立たない。

腕に時計（宇宙世紀でも高級時計は価値ある本物、特にアナログは）のように巻くスタイルが、

指にはめることが多いのだ。

ゼロ年代以前から開発され続けたナノ技術と量子化されたデーター端末は無骨な姿をしていないのだ。

未来とは、旧世紀の人々が想像していたものとは、違ってても仕方がない。

西暦の人々が時間を超えて未来に来た時、戸惑うのはきっとモバイル端末（当時はそう言っていたらしい）だろう。

未来のモバイル端末は、スカーフのようにふわりとしており、腕の巻いたり、指に軽くはめるものなのだ。

月面基地ルナ？は、月の南極のクレーターの中に創られた。候補地として選ばれた理由。

それは、ほぼ永遠の昼間だから。

太陽エネルギーと水資源確保には日当たりが大事。

そして、小天体や微天体の衝突を回避出来やすい。

微天体の1日当たりの月面衝突は、80回ほどだ。

大きい微天体の衝突でもあれば月震が起こる。

さらに月の自転や公転を考えると、交互に訪れる長い夜と長い昼を最小限にするには

月面の極地方が一番だから第1候補で選ばれたのだ。

どこの世界でも、日当たりがいいほうがいいにきまつてる。

まっ、人間の世界もね。

私には、運が向いてきてる。

やっと幸運の日がさしてきたようだ。

このご褒美は嬉しい。

私は、セイラ。

偶然だが、旧世紀のアニメ(?)の人物と同じ名だ。

私は、セイラ・マス。

『セイラ。十分休暇は取れたかい?』

ジエリドが相変わらずの能天気さで呼び出してくれる。

彼は月面の某所で待機任務を実行中である。

ルナ?の近くにいたので中継してくれてるわけだ。

昔の同僚。旧同僚。それ以上の関係があったのか、なかったのか。

もう、忘れた。

忘れたんだ・・

『あんたの声で眠気がとれたわ。感謝のかわりにキスしてあげる』

『キスは結構。かわりはごまんという。かりは必ず返してもらうぞ。

それから、君の兄貴の居場所が特定できそうだ。潜伏先は、別の組織もさぐってる。出し抜かないと、助けられない』

休暇の終わりの訪れは、いつだって急に来るんだ。

満足に休暇がとれた試しはないのだ。

あきらめもつくが、月面基地ルナ？での高級海岸リゾートを後しばらく楽しみたかったと思う。

いつだって私たちは運命の奴隷だね。と自分に言いきかせて納得する。

耳にはめたイヤリング状のデータ端末からデータが転送されてくるのを待つ。

待つ間、ワールドニュースを観ることにした。

この時代の多チャネルは膨大で真実のニュースが伝わることはない。どこかで、意図的に情報統制と管理されているから。検閲である。

私がニュースを観るのは真実の報道をみるためではない。世間が何に興味を持ちどう伝えられているのか傍観者としてみている。

リアルタイムでのワールドニュースが始まった。

こんぺい糖。

アステロイドベルト地帯から弾き飛ばされてきた小惑星。

それに人類が手を加えて、第2の月にした。

こんぺいとう。別名でアクシスとよばれる。

その後の人工コロニーの第一歩ある。

ソロモン宙域で不穏な情勢が起きていると現地入りしてるニュースキャスターがさげんでいる。

混乱している模様で群衆となにかの小競り合いが起きているようだ。

私は、サングラス型の視覚デバイスの精度を上げてみる。

市販されていない特注のガジェットだ。

視覚だけを使った細かい操作を必要とするが、訓練すれば自在に操れるだろう。

視覚デバイスのモニターの中に映ってる群衆の一人一人を識別、チ

エックを入れていく。

ジエリドが中継してくれてるので助かる。

地球と回線をつないで、量子コンピュータとの連携で人物検索を同時に行っている。

量子コンピュータとの連携で群衆の中に、探している連中が数人確認できた。

暴動を扇動してる連中だ。

3匹のレプリカントも含まれてる。おぞましくも、私のよく知っている人物のレプリもいた。

私は、捜査9課のブレードでもなければ、バウンティハンターの賞金稼ぎでもない。

ブレードの経験はないし、EQ検査で適正がなく幸運にも選考に漏れている。

EQ検査に落ちたことは、人間らしい証拠だから誇れるはずだ。かつては捜査9課に在籍した女。

今は別の組織体で仕事をしている。

ジエリドは、今だに捜査9課の捜査官として私を支援してくれてる。3度目のレプリカントの反乱を予兆させる動きだ。

レプリの反乱を扇動しているのは、はたしてレプリカントたちなのか。

背後に、人間どもの介在はないのだろうか。

それ以外の案件も視野に入れて連邦警察機構は慎重に内偵していた。耳元で蓄積したデータの解析は完了した。

データにアクセス不能なキーワードが含まれている。強化人間？

ニュータイプ・ラボ？

ニュータイプ研究所か・・・

非合法のネクサス？と強化人間の関係を調べる必要がありそうだと私は思った。

月面の常夏から今度は極寒の地へ行くことになる。

『ジェリド、データーをありがとつ。そちらにも暴動の様子は伝わってるかしら。』

レプリ処理班をアクシスに派遣するのは、少し待ってくれる?』

『セイラ。俺には、ブレードを止める権限はないんだ。やっこさん達、狩りになるとしてもたっついていられないらしい。すでに、ブレードの数人が現地へ向かっている。』

レプリを消されて困ることでもあるのか。』

『アクシスのレプリ?はしばらく泳がしたほうが賢明な気がするの。』

『なら、ブレードを出し抜いてやれ。』ジェリドが言い放つ。冷たくは感じない。

彼らしい響きだ。

『ブレードの中でも特にデッカーはやっかいな奴だから。気をつけろ。』

『そうね』

『レイチエルを失ってから、奴はレプリを目の敵にしている。』

『ジェリド、わかってる。でも、デッカーの気持ちもわかってあげて。』

『了解。君はやさしい。』

*

く 健太郎く

確かに、7年ぶりの再会となった女性は、以前にまして魅力的になっている。『

タフで賢く、クールな目元でこちらを覗き込んでいる。好奇心の塊のような瞳は、美しくて少しきつい輝きを放っていた。』

あの冒険談をこの街の片隅の喫茶店でまた話すことになりそうだ。』

彼女の名前は、詳しくは知らない。コードネームでは覚えきれないから、昔付き合っていた彼女の名前でいいだろうか、『凜』に出会って15分過ぎた。

彼女は肩肘ついて左手でストローを退屈気にまわしている。

グラスの中で残ったアイスコーヒーと氷の音がかき回されている。

終始無言。

僕のコーヒーはすっかり冷めてしまっていた。

そして、『凜』に対する想いも随分昔のことのように思えてすっかり冷めてしまっている。

凜が失踪してから数年間、探しまわっていたときの深い絶望と哀しみを思えば不思議な気持ちになる。

目の前に、探していた彼女が座っている。

ごく自然に、違和感なく窓際の席に収まっている。窓から見えるこの街の喧騒に混じって目立ちもせずここに現れたのだから。

僕は、意図的に成長を止めたから彼女と僕が同じ年とは周りから気づかれないと思う。

7年前に僕は15歳で体の成長を止めたのだ。

目の前にすわってる『凜』は22歳というわけであるが彼女も成長を止めることは可能だ。

まだしてないだけだ。

特殊な能力や超能力でもないから。安心してほしい。

荒唐無稽なSFな世界でもない。ただ、それを知らない人はたくさんいる。

ところで、僕らは子供のころに難病中央監理センターで初めて出会っている。

そこは、なんらかの難病を患った患者と患者の家族が集まる交流の場なのだ。

全国にある組織であるから、誰もが知っている。

そこで凜と出会った。互いに15歳。なんらかの病を抱えて生まれしてきたもの。

凜はさそり座で、偶然にも1日遅れで僕もさそり座生まれ。

おまけにハローウィンの日生まれ。神無月。

僕は車椅子が必要な状況だったし、いろんな覚悟は少しは出来ていた。

進行するばかりの病。

彼女は見た目にも、すぐに命の心配をする必要もないような気がするほど元気そうにみえた。

たぶん、はじめから意識していたのは難病を抱えていることと同年、それから星座が同じことくらい。

患者会の病におけるカウンセリングのセミナーの席で近い席で講演を聞き、その後の懇親会で親同士のつながりで、凜と初めて出会った。

凜の印象は最初は、良くはなかった。僕の病は知られた病で先がななく、凜の病はよくわからないが元気そうだ。この場には不釣り合いなほど健康的に僕からは見えた。

外見から判断するのは不謹慎だけど、僕は当分先がありそうな彼女を好ましく思わなかったのだろう。電動車椅子から、震えながら冷たくなっている右手を不器用に彼女に差し出す。

かたわらの親同士はにこやかに歓談している。

僕の目や耳は、一瞬にしてセンターの喧騒から離れて沈黙している。はつきり覚えているほど鮮明にその時の彼女を今でも覚えているのだから。

髪の毛は穏やかに巻いて髪の色は漆黒と違っていいほど。

艶やかに輝いている肩まである髪は照明の光のあたりようによつては、青みがかってみえる。

顔立ちは、個人の好みがあるだろうから言及しないけど好きなタイプである。

もっとも特徴あるのは、凜の眼だ。

その人目を惹く眼からの印象は、僕の言語野では説明できない。

髪の色にもまして漆黒で深く、哀しいなにかをたたえている。

凜も無意識に手を差し出す。はじめて触れ合った凜の手は、同じく冷たかった。

僕が、僕以外の人間で手で触れて冷たく感じたのははじめてのことで驚いた。

掻き消えていたセンター内の音楽や喧騒がまた目や耳に戻ってきた。時間はしばらく止まっていたようだ。

そして、いつの間にか凜もどこかにいってしまった。

凜とはその後いろんな出来事があった。

僕は、ずいぶん昔のことを思い出すように遠い眼になっていた。

凜との心の距離間を急に埋めることなんてできるのだろうか。

不安がよぎる。

雨が降り出した。激しく叩きつけるように。

凜の座ってる席の窓際に風と共に激しく雨粒がぶつかる。

平然としていながら、凜は窓辺をみてやっと口を開いた。

「ひさぶりだね、会うの」

照れくささもなにもなく、挨拶のようであまり感情のこもってない声音だ。

どう応えものか、混乱が渦を巻く。

感情的にならず、こちらも平素を装うべきか迷う。

「ひさしぶり」

今までどこで、なにを・・・などすぐにでも聞きたいことがあるのをこらえる。

胸から喉元にかけて、重い鉛の塊のようなものがぶら下がってる気がする。

「海外に出てみたかったの。身体があるうちに」

凜のはつきりしない物言いに戸惑うことはよくある。

「僕もきつと、凜は海外にいつてもうここには戻ってこないと思ってた」

僕は、あまりに陳腐な応え方だ。良くも悪くも。

凜への気遣いをしてる。凜は気づいてるだろうか？

「大丈夫かな、健太郎。会ってること。迷惑じゃない？」

「迷惑じゃない。ただ・・・」

次の言葉を言い淀んでいたとき、感情が戻ってきた。

心配していた。ずっと、凜のことを。

凜に会えるのであれば、すべてを今なくしても後悔はしない。

そういう感情が沸き起こってくる。

先ほどまでの抑えた感情ではなくなってきたのが自分でもわかってきた。

「追われているの」

「僕も、追われてるよ。連中は探してる。あのときの凜の判断が正しかった。いっしょに僕も行動するべきだった。」

未練とか家族とかそれまでであったものより、ずっとずっと大切なものをなくしていて探してたんだ。

ずっと大切なものって。

凜と再び出会うこと。

僕だって、はつきりと物が言えてなくて笑える。

大切な気持ちをうまく伝えることが出来ない。

「そうだと思った。好きになった彼氏を助けるのもわるくないね。いつから彼氏になったのかと思うと吹き出しそうになる。」

そして、はじめて言われたんだ。今日。目の前で。

好意の眼差しは、ほのかに心を温めてくれる。

先回りして、気遣ってくれてるんだと察した。

「友達以上で、恋人未満。つまり親友のひとりだからね」

誤解しないでって意味だろうけど、眼差しや言葉の抑揚でそれ以上に親しみを僕は感じてる。

十分過ぎるくらい。

凜は、なにか食べないかと切り出してきた。

同じことを随分前から、僕も思っていた。

テーブルの中央に置いてある小型端末のタッチパネルにメニューをみながら料理を注文する。

立体ホログラフィの3D映像でふわり浮かんだ料理の映像は、まだ食事もとっていないのに食欲をそそった。

タッチパネルを指でスクロールさせると3Dの料理が空間で次から次へと踊った。

「ぜったい嘘だね。今までこのメニューどおりに出てきた試しがない」

凧と僕は、同じことを思わず口にして共鳴した。

お互いに笑う。

凧とこれから短い時間を過ごすそうと後悔はしなかった。

そして凧をなくしてまで、僕はこの世界に生き続けることを望んでいないことも。

はじめから長い苦しみを味わうより、僕は凧と過ごす儂い時間に生きることに決めていた。

22歳で人生を終えようと後悔しない。

120歳までいけても、生き続けても今の僕にはそこには幸せがあるようには思えない。

若いからわからないのではなく、若いから人生の真理を理解できる。

テーブルから浮かび上がったメニューで選んだ食事が運び込まれるまで、

凧と何気ない会話で過ごしている。

外は人工降雨であるのは、わかっているけどとにかく土砂ぶりだ。

腕に巻きつけたモバイルガジェットの時間表示に、降水終了時間が表示されている。

もうしばらく続くらしい。

気候管理局も万能ではないので、たまに降水時刻を過ぎても降りや

まないこともあるがそれに抗議する人は滅多にいないだろう。宇宙世紀になってから、水はなにより貴重な資源となっている。降った雨水は、宇宙服の中のようにリサイクルされている。詳しく仕組みは知らないけど。特殊なナノ素材でで作られた道路や建物は、降る雨をろ過していく。僕らが歩く道路は、スピナーが走るほど堅いのに、柔軟に水を吸収していくのは不思議だ。だから人工降雨で流れた水は、再びすべての人々の生活に余すことなくほぼ100%還元されている。

僕や凜が知らないどこかでは、気候管理局にサイバー攻撃やリアル・テロを行ってるとも噂話で伝え聞くがほんとかどうかはわからないけど。

僕らこそ、そんなことよりだいたいぶやかいでやばい状態。それでも凜と僕はお互いまた再会できたのだから、つかの間の食事でも

おもいつきり楽しもうと思っていた。

追跡を逃れてる時間。

こちらがゆつくりしている間でも、間違いなく追跡者たちは追跡の速度を緩めないだろう。

近づいてくる予感。

15歳で成長を止めてる僕は、凜より代謝を抑えている。基礎代謝能力を抑えることによって病の進行を止めている。

生きていながら、人工冬眠カプセルで寝ているようなものだ。

寝ているのに起きて歩いて、食事している人間。不思議だろう。

まるで、バンパイヤーだ。

そうとも、バンパイヤーかもしれない。

凜も僕も、オリジナルとよばれる子供。

大戦以前のDNAを身体に保有し、放射能や有害で深刻なDNA損

傷を受ける前の状態の人間である。

つまり、西暦の時代の人類の姿をしている。

見かけも中身も身体能力もオリジナル。

今どき、古風な若者といえいいのか。あるいは、『オールドタイプ』。

この宇宙世紀ではもっとも弱者であるのに、それほど大切にもされない。

追われる身である。

料理が運ばれてきた。

『お待ちせいたしました、どうぞ』

すらりとした長身の女性は、器用に料理をテーブルに置いていく。

アースカラーブルーの髪と緑の瞳、そして異様に白い肌を持っている。

運んできたのは、レプリカント、ネクサス？型アンドロイド。

ネクサスの女性モデルである。

この世界のどこかにオリジナルは存在するが、レプリカントはその複製ではない。

オリジナルからのDNAコピーでダビングしたわけではないし、クローン技術もさほど適用されず、廉価な部品で創られている。

工業製品に近いものである。

オリジナルの情報に基づき基本的な性格や思考能力、身体能力を移植されているが、知的な部分や人間味のあたりは大幅にダウングレードされているようだ。

開発者の嗜好によって偽りの『記憶』を最初から移植されている。経験も体験もしていないのに、完璧な刷り込みである。

成人として工場から出荷されるときに、子供時代の記憶や青春期の記憶をすでに持っているのだ。

宇宙世紀において過去に2度、レプリカントの『反乱』が起きてい

るので安全装置を組み込まれている。

人間並みの寿命は与えられない。長くて4年。

その後は、DNAの中に組み込まれた致死的ウィルスの増殖で急速に老化する。

中途半端な生体であるが、やがて感情を持ち始める。

最初の反乱が起きたとき、レプリカントは人間並みの感情を持つていた。

あまりにも短い”人生”に憤りを感じたらしい。

それで月のグラナダでの港湾爆破、宇宙船の占拠というテロを行い、レプリカントの数人（数匹？）は地球にもぐりこんだ。

そのときの暴動を導いたレプリカントのリーダーは、同じネクサス6の『恋人』の命を救うためにだけ、地球に降り立ったと聞いている。

宇宙世紀黎明の頃である。

自分の命より他者の命を救おうとする行為は、いかにも人間的であり人間以上であった。

崇高な観念であった。並みの人類を凌駕してしまった。

人類は、総毛立ち恐怖した。

『レプリカントは「ロミオとジュリエット」の夢を見るのか？』

すでに、多くのレプリカントが人類と共存していた。

家庭に入りメイドや労働で使用されていたレプリカントは、返品されるか焼却されて破棄された。

その数は、おびただしい。

人型アンドロイドであるだけに、ジェノサイド（虐殺）が実行されるようで悲惨だったろう。

人間並みの感情が生まれる前に多くのレプリカントは短い一生を終えた。赤子の心のままに。

2度の反乱ののち、宇宙世紀に設立された連邦政府の閣議決議で、

アンドロイドの製造と販売・使用は禁止された。

人型アンドロイドは、一時期人類世界から消えていたのだ。

しかし、非合法的取引でアンダーグラウンドではネクサスは創られていたのである。

法律で禁止されても、それを破るのもまた人類の性さがなのだろう。

需要があるから創り続ける。法律を潜り抜ける。

外宇宙の探査や過酷な環境での重労働、慰安的な道具、さらに高額な美術品として闇オークションで売買されている。

その多くが連邦政府の高官が秘密裏に使用していることは、人々は知らないで暮らしている。

ここにネクサス？型の女性型レプリカントがいるのは、ここが連邦高官の持っているチェインレストランのひとつであるからだ。

機動警察機構に圧力をかけられる人物が経営しているのは間違いな
いことである。

レプリカント？型も追われる身であるから気の毒である。

非合法の工業製品とみなされて、機動警察機構捜査9課が日夜処分に
駆けずりまわっている。

通称ブレードとよばれる特捜班が捜査にあたる。

ブレードの連中は、EQ検査で非人間的であるがゆえにレプリカント
処理に適任とされるのだ。

あっさり情け容赦なくレプリを消せる人物。

宇宙世紀の皮肉。非人間的人格のブレードと、より人間らしいレプ
リカント。

僕は、目の前に立って指示待ちの？型レプリカントに微笑んで言葉を
投げかけた。

「ありがとう。名前は？」

微笑んで親近感をだしている。

「私は、プリス。」

彼女は微笑んだまま硬直している。僕は多少の違和感を感じた。

「もういい」

プリスは微笑んだまま、「御用の節は、およびください」と軽くお辞儀をし去っていった。

凜も不思議そうにプリスの後ろ姿を眼で追っている。

追われる身としては、境遇は同じだし。

遺伝子の致死的ウイルスの増殖という点でも共通項があるからなおさらである。

僕は、凜に向き直り微笑んだ。

「今日はおもいきりご馳走になるわよ」

凜がオーバーにリアクションする。

「僕の奢り？まいったなあ。払えないときは、逃げようか」
まんざらでもなさそうで喜んでいる。

シンパシーをととも感じるよ。

どの道、逃げるのだから。

く健太郎く

「DNAは、時間を旅する」

凜は応える。

「私たちの身体は、DNAの乗り物にすぎないって考えね。」

僕は頷く。

「DNAの塩基配列だけで命が組み立てられるなんて、神様は単純なカタだ。遺伝子だけが、次々と身体を乗り継いでいだけ。僕らはいらなくなったら捨てられる」

僕は、神妙で大げさに語る。

「この宇宙も以外と単純で簡単な構造かもしれないわ。

DNAの塩基配列のように。

この世界（宇宙）に無なんて存在しないのよ。」

そうだと僕も感じる。

「簡単なことを、難しくするのが人間だけだね。僕らの時代に何種

類の人が存在する？」

僕は、凜を試してみる。

「大戦後の人々、クーロンされた人たち、ネクサス？、そのオリジナル、そして私たち。ほんとうに生きてるひとは少ない」

また、僕は頷く。

「僕らは種の保存のために存在するわけでは、ない」

「そうよ。」

凜の眼はとても真剣になる。

「私はね、こつも考えるの。意識あるものはすべて、人であるような気がするのよ。」

たとえ、ひとがひとを創ってしまったても、そこに意識や人間らしさがあれば、それは人よ。」

僕は凜を試したことを後悔した。

「ごめん。そういうつもりで語ったんじゃないんだ。」

凜は堅くなった表情を崩す。

「いいの。だいじなことだから。」

凜と僕は、プリスが並べた料理を半ばたいらげてしまった。

食欲が身体を満たしてくれて、気が緩みそうだ。

僕が代謝を落としても、生きていられるのは理由わけがあった。

科学者や技術者ではないのですべてを理解してはいないけど。

身体の新陳代謝を抑えることによって、身体からだの”時間”だけは、ゆつくりとすすむ。

7年たつても15歳でいられる。

でも、病名から宣告された残りの時間は、3年となかったはず。

いくらゆつくりとすすむといっても、ゴールは近い。

もし凜が先にゴールしたら、僕は”時間”をもとにもどす。それで僕もゴールだ。

僕は、凜がいない世界でうつろに生きていたくなかった。

「時間を操るってどんな気持ちがある？」

髪を右手先で触りながら、凜がたずねる。

「時間を操ってるんじゃないんだ。そう見えるだけだよ。気づいたらそうなった。結果として時間を操ってるように見えるんだ、凜からみればね。凜は僕のこと知ってるからそういう風に言えるけど、他人はそんなこと気づかないし、気にもしてない。」

確かに僕の”時間”は伸びたり、縮んだりする。

それは、あまり使いたくなかった。ひどく疲労するし、危険だから。

「ふ〜ん、加速装置みたい」

「なに、・・・それ」

凜は笑う。

「なんでもない。食べよ。もっと食べよ。」

僕を気遣かってくれる。

ほんとは、僕が君を守るべきなのに、すまない気持ちでいっばいだ。

「だいじな力はね、必要なときだけだせばいいよ。」

料理を頼張った凜の顔はおかしくて、自然に笑みがこぼれてくる。

おどけてみせる彼女が、僕は大好きだ。

愛おしくて・・・

いつか訪れる別れのときに、僕は泣かずに彼女のそばにいたいと思つた。

ずっと、ずっとそばにいと誓う。

「ねっ、健太郎。動けなくなったら。ね。・・・ベッドの上でね。ずっ

と、ずっと寝ていることになつたらなにを思うのかなあ」

凜が不思議なことを言い出す。

「仰向けに寝ていたら。人工蘇生装置とかいやだな。それで、動けなかつたら・・・」

「わたしはね。健太郎と過ごしたことしか考えないよ。誰かが言つてたんだ。そういう時って、一番大切な人と過ごした日々を想いかえすんだって・・・だから、生きてる間はね、元気なうちに辛いことがあつても良い思い出をいっぱい作っておくもんだって。そういうときのためにね。後悔しないように。ね。」

あっけにとられた僕の顔を見て凜は笑う。

「わからないでしょ。」

「うーん、少し難しいね。」

僕は応える。

「そう」

凜がみつめる。

僕は、凜が言いたいことがよくわかるけど、今はあいまいにしていたかった。

凜

「幸せとか不幸とかひとそれぞれだけど、どうして感じるのだろう。」

凜

「私は、不幸を感じることができるのは幸せなことだと思うわ。だって、なにかが足りないことを気づいているから。」

足りないことを気づくってずっと大事よ。」

「足りないってことに気づくことは、もともとは足りていた可能性があるってことかな。」

「そもも言えるけど。足し算で考えても引き算で考えてもいけない気がする。」

「凜らしいね。」

「だって、誰だって自分の認識や常識を覆すようなことが嫌いだよ。」

「そうだね。個人の尺度や認識で、認めたいものや認めたくないも

のがあるしね。

個人的な感覚で認知不能な出来事は、平気で無視していたり日常的にパスしているかもしれない。

ほんとは、いけないことだけだ。」

「ううん、誰もがしていることは気にしたらだめ。それでいい。

見える範囲、聞こえる範囲、理解が及ぶ範囲でみんな生きているわけだし。」

「けっこう。気ままで、いい加減。」

「そうだね。」

「だからね。」

「これもひとそれぞれだけど、
宇宙の大きさの尺度も個人の認知の領域で変わる気がするの。」

「大きくなったり、小さくなったりする。」

「ワールドニュースが流す事件や事故、垂れ流されるマスメディアの情報を知らなければ

今日は、天気がいいよねなんていえる。

関係ないし、平和な一日を生きれるわ。」

「情報化社会は、不幸だね。」

知りたくないことまで、見たり聞いたりするから。」

情報端末を身体からはずして自由に生活できることが、今の時代のひとの幸せかもしれない。」

「日々の情報を鵜呑みにしていれば、駄目ね。ネットの世界だってそんなに^{リアル}真実はないし。」

「うん。^{リアル}真実体験が大事だと僕も思う。僕は、今日はとても幸福な気持ちだ。

だって、目の前に凜が座っているから。

こうやって

なんか・・・

しゃべっているから。

それだけでいいんだ。」

「うん。」

「凜。単純すぎるかな。」

「そんなことない。

言わなくてもわかることでも、ことばでいってくれるから。

とてもやすらぐから。

それって、

うれしいかも。」

私は思う。

恋をするとき。

誰かを、本気で好きになったとき。

その人が、なにを考えているのかとても気になる。

そして、自分のことをどう思っているのか気にしはじめると不安になっってくる。

だから、ときどき自信を喪失したりするし、見栄っ張りになったりする。

素直でない自分にいらついたりする。

そういうとき、何気ない一言で、安心する。
救われる。

不安な気持ちや相手に対しての疑念を拭い去れる。
だから、ことばってだいじなこと……。

ほんとは、誰でも経験することかも。

ほんとに、真剣に誰かに恋をしているときって、
まだ恋が成就するかどうかわからない時期だと。

不安で、

せつなくて、

さびしくて、

好きで、

こんなに好きで、

あいたくて、

あいたくて、

それが、

相手に伝わっているかわからないとき、

その気持ちが、

恋 そのものだ。

そして

恋が成就したあとから、

気持ちや事情がほんの少しかわりはじめてくる、

微妙な変化をみせる、

お互いに……

せつない気持ちやうたぐりが消えていた、

ほんの少しの時間、

至福の気持ちになるけど、

尊厳、

高貴さ、

誰よりも、

目の前の人を愛している自信も・・・、

色褪せていきそうで、

なくしそうで、

こわい。

やがて、

恋をはじめたころのように、

せつなさやさびしさが頭をもたげてくるかもしれない。

でも、

それを想像したら、

一歩も、

まえにすすめなくなるから。

MS戦役―ファースト・コンタクト（前書き）

リアルな宇宙そらの闘い・・・それは・・・

MS戦役―ファースト・コンタクト

「確かに、？は無駄な殺生をしないようだな。」

コツラード・ミラー大尉は、眼の前の少女の銃口が遠いビルに潜んでいたSWAT隊員を一瞬で始末したのを目撃した。

SWATの狙撃手を素早く感知し、身を潜めて狙いを定めて撃つ。ミラー大尉の脇に、銃から跳ね上がった大柄な熱い薬莖が落ちる。硝煙がミラー大尉の鼻を刺激する。

片膝をつき、かがんだ姿勢のまま次を狙いを定めていた。

すでに、SWATの犠牲者は10人を越えていた。

ミラー大尉とティムとその小隊は、複数のネクサス？に拘束されていた。

ただ、？が握っている銃口は誰にも突きつけられていなかった。

ミラー大尉以外は。

「俺がボスだつて知ってるのか？」

ミラー大尉は地面に伏せられたままの状態ですぐに頭だけ上げ、？の少女を見る。

？の少女は、片手で軽くミラーの背中を地面に押さえつけている。

終始無言。

「なあ・・・、話せないわけもないだろう。それとも話せないのか。」

「？」

？は、ふしめがちにミラーに眼を配るが、すぐにスナイパーライフルの照準器を覗く。

ビルの瓦礫と横転した車両に囲まれた窪地に、数名の武装した人影が動くのをミラーも気づいた。

「パワードスーツ着用の特殊部隊だな。」

ティムは、ミラーとは違い手だけを手錠で拘束され立位させられている。

ティムのすぐ足元には、？が数名、地面に伏していた。

「？のお嬢さん、パワードスーツの特殊戦に勝てないぞ。スナイパーライフルの玉やレーザーでは。重火器には勝てんぞ。」

「？の少女は、ミラーの言葉を聞き照準器から眼を離すと口元をゆがめた。」

「あなたたちを救いにくるのか。？それとも、わたしたちとともに消すのか。？」

少女の声は、見かけよりはるかに幼く弱弱しく聞こえた。

「もちろん。拘束された小隊の救出のためだ。人質も救援隊も多少の犠牲が出るが。なにもしなかつたら、俺たちは、

お前らに殺されてしまう。」

ミラーは、皮肉を蒼い髪の少女に言う。

「わたしたちは、わたしたちを攻撃したり排除したりする行動をとられない限り、命を奪わない。」

「おいおい。特殊部隊に、清く降参しろなんて土台無理だよ。」

ミラーは口元だけで含んだ笑いをする。

「パワードスーツは、モビルスーツの原型だ。君らネクサス？が生身で勝負かけてもハンバーガーの原料にされちまうぞ。無駄ってことだ。」

救われる側のこちらにも犠牲者がでるのは覚悟している。」

『すでに悟られてるだろう。ケビン。衛星から？の位置把握は出来るか。』

『了解。衛星からの情報によると このあたりにミラー大尉と小隊の姿を認めます。』

が。。。？がすぐ近くにいるかどうかはデータがとれていません。データ通信を解析しても、？はミラー小隊の近隣には存在しません。

』

『光学迷彩の信号も。？』

『はい、光学迷彩信号を送受信している痕跡はありません。』

『なら、なぜ ミラーは地面に伏してるのだ。あの警部補は手錠を後ろ手にかけて立っているんだ。？』

『たしかに。その他の小隊の連中も身動きしないのは不思議です。』

『あの様子だと？が近くにおり、』

『小隊は拘束されているように見えます。』

『やはり小隊は？の人質となっている可能性があるってことだな。』

『それも、慎重に考えたほうがいいかもしれません。』

『大気中に幻覚を生じる薬物を散布されていれば、暗示や催眠にかかっているかもしれませんね。』

『ミラー大尉や小隊の連中にとっては、？に拘束されているのは『現実』でしょうけど。』

『？のスナイパーが近隣のビル群で十字砲火をしかけてくるかもしれませんね。』

『畏が張られてるか。トラップは近代戦の常識だ。』

*

「見える。」

『黒い髪に白い肌を持つ女が、照準器を窓越しに覗きながら右脇にかがんでいる女に尋ねる。』

「あー、丸見えだ。パウード・スーツに身を包んだ海兵隊だ。」

『蒼い髪に血がついたような唇を持つ冷たい皮膚の女が無表情に応える。』

「レイチエル、どうする。？」

『レイチエルと呼ばれた女は、長い黒髪を頭の上にまとめていた。』

『右手を上げ束ねていた髪をほどくと、艶々とした人工的な毛髪がそよいだ。』

たれた髪の奥に緑の瞳が輝く。

エメラルドグリーンの瞳。

「ガンダムに乗る。」

レイチエルの青紫がかつた唇が囁く。

「RX-78を宇宙そらに上げる。」

スナイパーライフルを構えた蒼い髪の女が振り向きもせず、動揺もないままレイチエルに問いかける。

「早くないか。」

レイチエルはかがんだ姿勢のままにきびすを返し応えた。

「知ったことか。」

冷たく言い放つ。

……

……

：

「スレッガー中尉。オペレータの予測値より上限で機動してますよ、速度と反応が速過ぎます。」

「それでは……」

「スレッガーだ。大丈夫。まだいける。センターのオペの予測範囲が狭すぎるんだよ。」

「戦場では……」

「スレッガー機、小天体、微粒子シールドへの気配りがなさ過ぎです。」

「モビルスーツなんだろう、機動性を殺してまでシールドを厚くしたくない。」

「しばらく黙ってくれないか。」

「カッシニー少尉、スレッガー機から離されます。」

「ベルモンド少尉の機体もスレッガー中尉の機動能力に追いつけてません。」

ベルモンド少尉、機体のシールドがレッドゾーンに入ってます。それではデブリをはじけない。」

少尉。聞こえますか。」

漆黒の宇宙で3機のモビルスーツが実戦を想定して模擬演習を繰り返していた。

宇宙のほとんどのところは、戦場にはならない。

ごく人が住めるスペースコロニーと惑星都市の近隣が主な戦場となる。

広漠たる宇宙の闇が拡がるのみ。

だからこそ、模擬演習とはいえ注意を怠ると、戦闘訓練は光学レンズで後で捉えられてしまう。

地球やコロニーの天文愛好家が天体望遠鏡を覗いた時、戦闘の光を見ることになりかねない。

それでは、困る。

今だ開戦の知らせもなく極秘に任務を遂行中のフォウ少尉以下の「トロイ」の乗員は

重力レンズの応用を行い、戦場の様子を伝える視覚に入る光を銀河系のほうへ曲げていた。

重力レンズ効果は、きつちり2時間しかもたなかった。

ナノブラックホールが消滅する時間がおよそ120分程度。

ナノブラックホールを打ち出すレールガンをペガサス級の強襲揚陸艦「トロイ」は船体の普段は閉じられている両サイドのカタパルトにしまい込んでいた。

3機のモビルスーツは高高速機動をステルスモードに変えると、トロイのブリッジを挟むように左右に展開した。

「パワー・スーツ着用の海兵隊員の準備完了。バイクでの降下訓練までカウントダウンに入ります」

トロイの格納庫には、パワー・スーツを着た重機動歩兵32名が惑星都市降下用のエアロ・バイクに跨っていた。

重機動歩兵のパワー・スーツは、初期の頃のような無骨なロボットじみた鎧ではなかった。

ヘルメットをかぶり、柔軟性のあるレアメタル混合ナノ・カーボン

素材のスーツを皮膚の上に着る。

体表面を隙間なく覆った人工筋肉が、海兵として鍛え上げた身体をさらに人並み外れた腕力と脚力に飛躍させる。

ナノチューブが血管のようにパウード・スーツの内面に巡らされ水分や栄養素、薬物が循環している。

生理的な排泄物もナノチューブに無数に点在するセンサーで感知して過され体細胞へ再利用される。

96時間以内であれば、食事もトイレにいく必要もなく行軍し従軍出来る。

パウード・スーツを着用するには、それなりのコツと慣れが必要だった。

宇宙世紀の初期の頃のロボット型スーツではないので、乗り物に乗るような感覚はまるでなかった。

宇宙世紀の初期の頃から活発に開発されたパウード・スーツは進化系統を2つにわけてしまった。

ひとつは、海兵が着るようなパウード・スーツへ。

もうひとつの進化系として従来のように人が乗り物にのるようにコクピットに座り操縦するモビルスーツへ。

宇宙の海兵にとってパウード・スーツは『軍服』だった。

裸の身体に着ている下着のような感覚に近い。

あるいは、裸に近い。

訓練を積み着用の機会が増えれば、直接肌に触れるわけだから次第にパウードスーツと皮膚感覚との境界線がかなり怪しくなり自身の肉体と融合したかのような錯覚に陥るかもしれない。

テクノロジーの進歩でスーツの素材はより薄くなったが、戦闘でダメージを食らうとスーツの表面と内面に張り巡らされた微細なセンサーがダメージの強度によって自動修復を行う。

それと同時にスーツの中の『人間』の戦闘におけるダメージを医療行為に特化したモバイルAI（人工知能）で治療を行う。止血を行いショックから海兵を蘇らせる薬物を投与する。

「なにを見てるんですか？。ムーア上等兵。」

エナン・フェデラー3等技術士はバイザー越しに感じる視線を、向かいに座っているライオネル・ムーア上等兵に訊く。

「こつやつてる時間は長いです。待機時間はいろんな思いがめぐってしまふんです。」

「エナン技術士。足は閉じたほうがいい。ムーアは、よかんらんとを妄想している。」

カリイ・ステイル少尉の声がナノ素材と連結したエナンの内耳に響く。

誰もが笑う。

エナンも苦笑する。

「スリーサイズは、パワード・スーツ越しにはわからないはずよ。」

「ムーアがエナンにぞつこんなのは誰もが知ってる。」

悪ふざけだ。

「小隊のアイドルだからな。俺も惚れている。」

ざわざわと複数の声がエナンの内耳で共鳴する。

ライトな冗談とくすくすとした健康な笑いが拡がっていく。

小隊の男どもは全員、エナンに求愛を告げる。

エナンは、もちろんすべて断った。

いつもの儀式めいた小隊のジnkスだ。

俺たちは『お姫様』をお守りする勇士。

宇宙そらの海兵。

重機動歩兵のレンジャー。

トロイのブリッジにある艦長席に座っているフォウ艦長は、モニター越しに重機動歩兵らの緊張と結束を眺めていた。

フォウは、身体が強くない。

海兵のような身体は、創れない。鍛え上げた肉体を羨ましく思うこともある。

地球の自然な重力で、自然に適応し鍛え上げられるのだろうか？とフォウは思う。

フロンティアのスペースコロニーで生まれ育ったスペースシストは、地球生まれのアーシストを羨ましく思い懐かしく思う。スペースシストの夢。

地球の海で泳ぐこと。

多くのスペースシストが一生のうち何回か夢をみて、けしてかなわな
い夢だ。

どんなアーシストより宇宙を……縦横無尽に泳げるのに。

上手く泳げるのに、地球にある芳醇な生命の海を泳げない……。

母に抱かれたことがない子供のような心許ない気持ちだが、コロニー育ちのスペースシストたちの心の根底に暗い根を生やしていた。

「フォウ艦長、海兵隊のほとんどがアーシストで大重力に対応出来るが無重力下での戦闘となるとコロニー育ちのスペースシストの骨格や筋肉の動きのほうが理にかなっている気がするよ。」

宇宙空間での独特の反射神経は、重力のある世界に慣れてしまった人間にはなかなか身につかない課題が多くあるんだ。しかし……昔はパワード・スーツとよんでいたものがスクランブル・スーツとよんだほうがいくくらいに軽くなった。あのスーツの重量でさえ、コロニー育ちの人間にはきつかるうに。」

フォウ艦長の右隣に歩み寄ってきたのは、ドクター・サリバンだ。ルーニー・サリバン医師は軍医ではなく軍籍はない。

タイレル財団のある研究施設から特別にトロイの乗船を許可された民間人の一人である。

タイレルからは、モビルスーツの諸問題の現場での対応のために技術顧問として数名が乗船していた。

ドクター・サリバンは、軍事アドバイザーのような特別なものではなく、『観察者』のようでありトロイの乗員にとって戸惑う人物であつた。

確たる目的が明かされない人物が乗っていることは、当然のごとく疑惑や不信を多くの乗員が抱えていた。好まれる人物とはいえなかつた。

「フオウ艦長の故郷はどちらかな？」

私はシアトルで生まれ育った。

地球の重力下でごく自然に子供時代を過ごしほんの少し学んで医者になった。

地面から見上げた宇宙は美しく、それは綺麗なものだった。

そこがどういふ世界なのか知らないだけに憧憬をもったものだ。

だが、実際にこうした長旅をさせてもらって感謝はしているが、早くも地球に帰りたいと恥ずかしくも弱気の虫が囁いておる。

宇宙環境に順応するには歳を老い過ぎたようだ。」

「ドクター・サリバン。」

いくつになっても宇宙環境には適応できますよ。

私は環境への適応能力は、ひとえに個人に資質のみに関わっていると考えています。

アーシストとスペーシストの間に大きな差があるとは考えておりません。」

フオウは、自分の気持ちを偽っていた。

少しはにかみ笑いをしながらドクターの眼を覗き、ドクターの柔らかな眼差しを受け取った。

「機会があれば海を泳ぐように、宇宙服を着こんで遊泳してみようと思う。」

ドクター・サリバンの丸っこい赤ら顔には幾筋かの傷痕が残っていた。

再生医療がここまで発展している時代に、顔に傷のトレードマークを残したままでいられるのはどういう訳だろうとフオウは思った。

「私もフロリダに叔母夫婦が住んでおりますので、機会があれば海で泳ぐ経験をしたいと思っておりますよ。」

ドクターが望むなら、このミッション終了後にまずは宇宙の泳ぎ方をお教えいたしましょう。」

フオウの身体では、地球の海に潜ることなどとうてい叶えられない夢想でしかなかった。

それこそ、宇宙服のうようなものを着用して気圧を調整をし、低重力な環境を人工的に整備してもらえば叶う願いかもしれないが。

そういうスペースシスト向けに築いたフロンティア5群のコロニーにあるデイズニールランド並みのアトラクションがフロリダの地であれば、フォウは飛んで遊びに行き眩しい陽光の中、魚群の群れの中に戯れることができるかもしれない。

「そうかね、それは楽しみだ。フォウ艦長が地球連邦統合軍本部でおおいに活躍されるときには、合間を縫って是非シアトルまで遊びにきてほしい。我が家に招待しよう。」

アメリカじゅうの名所、観光地を紹介する。」

ドクター・サリバンは、乾いたさざりとした言い回しを使いながらフォウのコンソール端末について表示される情報をしばらく見続けていた。

ドクターがみてもかまわない。

部外者から隠匿すべき情報は、なにもみつけれないはずだとフォウは思った。

ドクター・サリバンが一番知っていることは、フォウ自身のこと。

フォウとその仲間たち。

ドクター・サリバンが『観察者』であり、『監視役』であることもフォウ自身はとくに気づいていた。

新型モビルスーツ。

パワード・スーツのレンジャー部隊。

ニュータイプの艦長。

トロイが連邦の特務実験部隊である所以であった。

**

*

ジャック・テレマン艦長は意外な気持ちでいっぱいであった。

ブリッジにあがってきた3人にミッションの変更とトロイへの任務移譲について説明したとき、一番納得しなかったのがメイサではな

くフラウであることが。

フラウ少尉は熱に浮かされたように、激しくテレマンに詰め寄ったのだ。

それをメイサが肩を掴んで止め、それでも興奮が収まらないフラウの頬をはいいた。

フラウは金属音めいた悲鳴をあげ、艦橋の床に身体を流して倒れて伏した。

カニンガムがゆっくりとした歩調でメイサに近づき、メイサの右肩を軽く合図のようにたたく。

メイサは放心したように、テレマンと伏したフラウの間で瞳を泳がす。

テレマン艦長は、深く息を吐きその表情は影になりよくわからない。

「テレマン艦長、申し訳ありません。フラウは先ほどの戦闘時の興奮がおさまらずにブリッジにあがってしまい見苦しいことに・・・。

ノーマルスーツから与えられる薬物が体内に残ったままであるがゆえに・・・」

「メイサ中尉。わかっている。薬物の影響もあるだろう。しかし、パイロットとしての適性は薬物依存とは別の話だ。フラウの戦闘時の接種量は耐えられる範囲なのか軍医の再審査が必要かもしれん。」

「艦長。」

カニンガムのこわばった顔がさらに曇りはじめた。

「私も、気持ちフラウ少尉と同じであります。予定の変更は受理しがたく・・・」

「カニンガム。およし。」

メイサが言う。

「カニンガム少尉。戦略、戦術、戦闘はそれぞれ違う立場の人間が適正に応じて配置につく。

わたしらの任務は戦闘行為だ。適性は大事な要件だよ。」

メイサの平静を装った抑揚のない口調が、逆に不自然さを表していた。

「生身のにんげんですが強化されていますから、いくぶん。メンタル面での調整が行き届きのところは、訓練と実戦で時間が解決してくれるものと信じています。」

わたしの部下ですから。」

テレマン艦長はキャプテンシートから立ち上がるとメイサとカニンガムに背を向けた。

「君らは、強化人間だと聞いている。歳も若いし、実戦経験もないに等しい。」

連邦政府が、連邦の軍事作戦の先鋒に君らのようなひよっこをよこしてくるのはどうということなのかと疑問をもっているが。」

「艦長。」

メイサは言葉を出そうとして失った。言わずにいようと思った。

「不審船が先ほどから、こちらの座標に近づいている。5時間後にはコンタクト出来る距離になる。」

フラウを起こし、実戦に備えよ。感応波を使った訓練は実戦で試すことになるようだ。」

さがってよいぞ。しばらく自室でくつろぎたまえ。」

カニンガムは気を失って倒れたままのフラウの左肩に首を入れ起こして抱えあげた。

メイサとカニンガムは連邦の軍人らしく拳手で敬礼をするとブリッジを降りるエレベータに向かった。

「艦長。新兵器の実験じゃないですか。これじゃ。」

ニール・サイダーが言う。

「ニール。人間は兵器なのか。そうお前は思うのか。」

テレマンの低い声は、ニールに陰鬱な感情を呼び起こす。

「そうは・・・思いませんが。」

自分が発した軽口に汗が出て、ニールは後悔した。

「兵器だけでは、戦闘も戦争も起こらないだろうな。それを使う人間がいるから争いが起こる。」

いっそのこと機械同志で戦争してくれば人命を失わずとも済む。」

「たしかに」

「ひとの命が消えなければ、戦争の大義はなくなる……。」「
ニールは一瞬、艦長の言っている意味がわからなくなった。

「えっ、??？」

「いや、気にするな。ひとりごとだよ。ニール君。」

強化人間とは、ひどい言い方だとテレマンは自嘲気味になる。

テレマンは妻のサファイアのことを思う。

ジャック・テレマンとサファイアの間には子供は出来なかった。

ジャックとサファイアの身体の体細胞ではクーロンはつくれても短命に終わる。

子を持つことを諦めかけたところに、

遺伝子バンクから連絡が入った。

そうして、遺伝子バンクでジャックとサファイアのDNA配列に近い他人の精子と卵子で

子供を授かった。

生まれたひとり娘はソフィアと名付けた。

誕生する過程は、メイサ、フラウ、カニンガムとソフィアとは同じ境遇。

違うのは、メイサ達は初めから連邦の軍需品であること。

連邦の中枢コンピュータを『マザー』とよび親代わりに育った。

彼女らが大人になれば、それを『マスター』とよぶ。

数回の大戦で放射能に汚染された人類の身体は、多くの亜人類で雑多になっていた。

宇宙世紀。

人が、自分自身を『ひと』であることを疑いもせず暮らせた西暦の世紀ほど単純な社会構造ではない。

国籍や肌の色くらいの差ではない隔たりや壁がいくつも存在する社会をテクノロジを駆使して創り上げてしまった。

西暦の時代のどの預言者も預言もできなかった悪夢のような世界が、宇宙世紀かもしれないとテレマンは思う。

「俺もどうか。疑ってみたくなる。」

絶滅の危機に瀕している人類は、自らの脳が創り上げた『ひと』の多様性で種の保存をしているのだろうか？

地球上の生物の種の多様性を破壊しておきながら、人類のみが永久とわに続くはずはない。

生き物としての個体の終わりがあるように、必ず種の絶滅はいつか訪れるのだ。

それをテクノロジーの力で超越しようと思あがきをしている。

人類の延命。

（宇宙そふまで生存圏を延ばしても、太陽系を超えて他の星系へ辿りつくことも暮らすことも不可能に近いのだから。）

「ニール、5時間後に遭遇するUMFの予想される軌道の解析データを私のほうへ転送してくれ。」

テレマンは、艦長席より一段下にある操舵パネルに座っているニールにホロディスプレイへのデータ転送するように促した。

テレマンは艦長席のディスプレイにデータ転送が完了するまで、しばらくブリッジから観える漆黒の宇宙そふを眺めた。

その旅は実に退屈だとテレマンはときに思うときがある。

地球テラから宇宙そふにあがって、しばらく感じた興奮や感動はもうなかった。

宇宙そふにすることが日常になれば、非日常ではなくなる。

ペガサス級強襲揚陸艦である『レディ・マドンナ』は、臨界に近い速度で目的地であるアクシスへ向かっている。

テレマンはその速度感をまったく感じない。

ブリッジから観る宇宙そふは、のっぺらとして止まっている。窓に星や銀河が張り付いているようだ。

銀河も星も惑星も、ブリッジから眺めている限り視覚的になんの変化も感じられなかった。

ひとが感じとれるスケールをはるかに凌駕している、絶対的なスケ

ール。

この広漠とした宇宙の絶対的なスケールが長期の宇宙滞在を必要とする乗組員の心理に不安と虚無感を及ぼすことが多々ある。

だから通常は、『レディ・マドンナ』の出力で換算される宇宙速度にに応じて疑似的な映像をCGで艦橋の窓に映していた。

現実とは違う速度で星や銀河が窓を流れる。

そうすることによって鑑が確かに動いているという実感を乗組員に与えることが出来た。

人間の五感が感じ取りやすい尺度に宇宙の遠近感の尺度を圧縮して観ているわけだが、こちらのほうが人間には都合が良かった。

現在のように艦橋であるブリッジから特殊強化クリスタルグラスをじかに通して宇宙を観ることを行うときは、有視界軍事行動が必要な場合のみである。

再びテレマンは思った、宇宙の旅は実に退屈な旅だと。

テレマンは、キャプテンシートに戻ると、データ端末に転送されたニールからの解析情報に目を通した。

「ニール、お前は気づかなかったのか。」

テレマン艦長の声が荒々しい。

ニールはなにか不備が起きていることを感じテレマンに向き直る。

「これは……。ニール、暗礁宙域に潜んでいたステルス衛星からのクレムリンとフロンティアA11への通信痕跡を解析した際に……

このデータは、レディ・マドンナの中枢コンピュータを使って解析したんだらう。」

「はい。確かに。技官たちが行ったと憶えています。」

「地球にある連邦の中枢コンピュータとのリンクを保ったままか？」

「通信痕跡の解析にリンクしたままであったと思います。ログを読み直すとレディの中枢コンピュータに余計な負荷がかかる場合はリンク先に支援を自動的に行っています。」

「マニュアル通りか。」

「はあ？」

「戦時下では。」

「?」

「いいか。ニール。艦長席に転送されたデータを今ほど受け取ったが、

いくつかの情報が削除されていた。

レディが搭載している中枢コンピュータのセキュリティが働いたようだな。

5時間後に遭遇する艦は『存在』しない。

改ざんされたデータがレディの中枢を浸食していたようだ。」

「つまり。」

「そうだ。」

暗礁宙域でレディはウイルスに感染していた。

我々は、巧妙なステルス・ソフトウェアがレディの情報システムを書き換えていたの気づかず航行していたようだ。

ホログラフィックデータのような負荷がかかるデータ転送、特にセキュリティランクが最上位の艦長席にデータを流したことによって連邦仕様の基本ソフトに合致するか再度仕様解析が行われた結果、疑似であることが判明したんだろう。」

「・・・」

「敵は近くにいます。それもすぐ近くにだ。」

テレマンは、自らの専用端末装置を熟練した指裁きでキー入力をする。

セキュリティで削除されたデータの復元を再度中枢コンピュータに演算をさせ始めた。

同時に、テレマンのキャプテンシートの四方に囲むように座っている索敵オペレータに艦内のハードウェアとソフトウェアのすべてチェックを行うように指示を出す。

「レディのすべてのコンピュータシステムが復旧するまでに相応の時間がかかる。」

メイサ中尉らのMS部隊には、中枢コンピュータからの支援はいっさい出来ないってことになる。」

テレマン艦長は、硬い表情のままホロディスプレイを流れる数値やデータを眼で追っている。

「光学迷彩が出来ないまま、中枢コンピュータの数値計算支援とリンクもせずに。」

機動パイロットだけの判断では、

宇宙での戦闘行為はほぼ不可能でしょう。」

ニールは動揺していた。

「まったくだ。この状態で敵がMS部隊で攻撃を仕掛けてきた場合には、レディの全方位シールドは破られるだろう。やれるとすれば、有線ケーブルで3機のMSにデータ転送をしつつの時間稼ぎだよ。レディの中枢コンピュータが、本来ある姿に戻るまで頑張ってもらうしかないようだな。」

レディの周りにシールドを厚く張って、その膜の中での機動に専念してもらえないか。」

「遠隔操作でニードルを放つ実験にもなりますな。」

「ニール。感応波で働くアレは、誘導装置がない魚雷のようなものだ。」

ターゲットに対して起点と終点の数値計算を勘でやれるものか。」

「ファンネルは、勘で跳ばす兵器らしいですよ。ちなみに私もシュミレーションした経験があります。」

スコアは・・・ひどいものでしたが。」

「勘ではない。」

ファンネルを正確に跳ばせる奴はどこにでもいるわけではない。

連邦でスコアがほぼ満点でクリアできたのは過去5人しかない。

その中で私が知っている人物は、赤い彗星と呼ばれた男とスレッガーだ。」

メイサたちのスコアでは戦闘時にその威力を發揮するかどうか危うい感じがする。」

本来、実戦投入は避けたいところだが。」

苦悩の表情だ。

「モリス・クライトン粒子の散布を厚くしますか。」

ニールの横に座っているマシュー・パレ1等技術士官が、ホロレーダーを空間に浮かべながらニールを一瞥する。

テレマン艦長の視線の先に、ホロレーダーが100インチ四方に浮かびあがった。

パレ1等技術士官の左右の手は、前方に直立する半透明の50インチディスプレイの上の数値データや画像処理を行った映像を掴んでは上下左右に流し、ときにそれらを交錯させて、複数の画面を立体的にスクロールさせていく。

パレ1等技術士官の背向かいに着座しているミキ・ハートネット3等技術士官補は、暗礁宙域から機能不全に陥っていた『レディ』の中枢コンピュータが見失った数時間前にさかのぼり、敵の追跡が予想されるコースを、

（数万パターンもある中から）最も確率が高いコースを高速演算処理させて探していた。

ホロレーダーにピンクのアイコンが浮かび、その周りにグリーンの濃淡色が覆っている。

ピンク色のアイコンの一つは艦ふねの型をしており揚陸強襲艦、『レディ・マドンナ』を表していた。

それを囲むように、少し小さめのピンクのアイコン、MSが3つ表示される。

さらに、パワード・スーツを着用した1小隊分の海兵隊員の輝点が表示された。

パレ1等技術士官は、空間に浮かび上がったホロレーダーを全方位360°に回転させスクロールしていく。

半透明に見えていた複数の画面は、パレの手によって重ねられ、張り合わせられて、

やがてパズル状のデータの断片は一つになり、1枚の立体マップが出来上がっていった。

ホロ・マップがパレ1等技術士官で完成をみるころには、ハートネツト3等技術士官補のほうでも、精度の高い予想追跡コースがはじき出されていた。

ホロレーダーのグリーン濃淡は、モリス・クライトン粒子の散布濃度を表し、暗礁宙域から『レディ』の背後にのびる赤い輝線は予想される敵の追跡軌道を表していた。

赤い輝線は、45分前に5つに分かれていた。

それぞれのコース確率は誤差の範囲と『レディ』の中枢コンピューターは応えたようだ。

「5つの予想コースのいずれかに敵の追尾が考えられます。」
ニールはそう言いながら立ち上がり、ニールの視線は空間に浮いているホロレーダーの前でそれぞれの座標を追いかける。

「モリス・クライトン粒子の散布濃度が高まれば、こちらのステルスは上がるが索敵は弱くなる。」

ファンネルもいわば微弱な電子を含んでいるので影響は避けられないからな。

敵と近接しないと使えないしろものだ。」

テレマンの苦しい胸の内が言葉に含まれている。

「パワード・スーツ、海兵の展開が重要になってくるな。」

テレマンは顎のあたりを左手で掻く。

「艦長。」

パレ1等技術士官が、テレマンに向き直り

「後続艦隊からの後方支援の要請をしたほうが・・・」

緊張で声がうわずっている。額には、冷たい汗が流れていた。

「レディの後方に弾幕をすることか。マシユー。」

体格のいいニールの太い首がマシユー・パレのほうに向く。

「後続艦隊からのミサイルで弾幕を作ってしまうと、その光が地球とコロニーに見えてしまう。」

これまでの作戦行動の意味がなくなってしまっぞ。ステルスに徹してきたのに。」

ニールは、少し顔をゆがめて語る。

不思議にニールは、それがいいと思っている。隠せない笑みが出る。『トロイ』の実験部隊より正規の連邦軍が、開戦の火ぶたを切ることは悪くない。

「予測される敵の量と質は？」

テレマンは両手を組み、ミキ・ハートネット3等技術士官補の解析を待つ。

「まったくの不明です。」

MSを積んだ我々と同艦艇と仮定すれば、3機のMSと1小队分のパワード・スーツでしょうか。

AI付きの無人ポット複数も考慮にいれておくべきでしょう。」

ハートネット3等技術士官補は、3枚のホロディスプレイ画面に表示される連邦軍部で登録され確認できる

MSのスペックを一部読み上げた。

テレマンは聴く。

ミキ（美樹）・ハートネットは、黒い長い髪、ふくよかな優しい顔の輪郭、東洋系の切れ長の眼をマルチ・サングラスで覆っていた。女性士官である。

「予想される最も早い接近遭遇は？」

ニールが美樹の肩に手をかけて同じく3枚のホロディスプレイを覗き込む。

美樹は肩に触れられたニールの太い指が気になる。

美樹は、こういうニールのなれなしさに鳥肌が立つことが多いが、笑顔で応える努力をする。

「およそ18分後。正確には17分19秒……。」

美樹は額の汗を拭うのもどかしくコンソールのマルチタップのキーを叩き演算を繰り返す。

美樹は、決してミスをしないと常に自分に言いきかせている。

「ハートネット、後続艦隊への支援要請の限界時間は？リミットはいつになる。」

ニールの質問に美樹は応える。

「えっと・・・、並列演算してみますね・・・。」

ニールは、美樹のそばを離れ空間に浮かんでいるホロマップを見る。

「トロイの現在位置も表示できるか？」

美樹は、ニールに眼を向け、困った顔でマシュー・パレに眼を細めた。

「艦長。トロイの位置は残念ながら把握できてません。お互いにステルスミッションですから。」

マシュー・パレは、ニールには語らずにテレマン艦長に応えた。

「そうか。」

テレマンは、キャプテンシートを立ち上がるとニールの横に立ち、ホロマップの座標を指す。

「このあたりに、未確認の小惑星群があるはずだ。記憶にある。」

「木星圏で破壊された彗星の残骸ですか。」

美樹とマシューの瞳が輝く。

「そうだ。オルートの雲からはじき出された彗星が木星の重力に囚われて、飲み込まれずに粉碎され弾き飛ばされた、21年前にね。」

美樹とマシューは記事にもならない小事を記憶しているテレマンに確かなものを感じた。

「前世紀、西暦2032年の地球圏への小惑星のニアミス以来、地球を被爆させる恐れのある小天体には、『核』を埋め込んである。軍部と連邦中央政府の暗黙の事実だよ。」

連邦軍のサイドビジネスで、わたしも数度、掘削と取り付けをしている。」

・・・

「核の・・・浮遊機雷って、ことですか・・・。」
ニールが驚く表情が、どうにもおかしい。

マシューと美樹は、眼を合わせ苦笑いをする。

「そういうことだ。ニール君。

後方は、後衛艦隊のミサイルの弾幕。『レディ』は、前方の核の付いた小惑星群に敵を誘い込み殲滅する。メイサたち、3機のMSの誘導作戦が勝敗をわける。初めてのMS戦がはじまるな。」

・

・

・

・

CNN23(ツー・スリー)放送が伝えるロシアの軍事演習は、日本海近海と黄海で行われていると緊迫した雰囲気を映した表情で記者が伝える。

ロシアが保有する太平洋艦隊は、多数の空母群と航空機、海中に潜む潜水艦隊。

地球連邦政府からテロ国家支援の嫌疑かけられている日本への挑発的な軍事行為である、と記者はさらに付け加え伝える。

日本こそテロ国家であると、皮肉を交えて中継を引き継いだCNNの女優あがりの派手な女性キャスターは声高に語る。

別のチャンネルでは、アメリカの機動艦隊がペルシャ湾から太平洋へ向かっていることを映像を交えながら連邦政府の軍事顧問が、欲深そうな軽薄な笑みを浮かべながら解説している。

チベットあたりまで領土を縮小させてしまった中国は国境に嚴重な戒厳令を強いた。

アフガニスタンとパキスタンの核ミサイルは、弾道の照準をロシアとアメリカに向けたまま、凍り付いていた。

インドは滅び、核で焼き払われた大地は既に住む人はおらず、放射能汚染は隣国への最大の脅威となっていた。

アフガニスタンとパキスタンとの核の抑止力は、インドの滅亡によって意味をなさなくなった。

・・・

赤道上・・・軌道エレベーター。その先には、地球を土星の環のように全周を囲う軌道ステーション。

その一画に、プロメテウスの軍装に身を包んだ士官たちが集まって200インチのディスプレイに流れるCNNのニュースを観ている。

年寄りの声。

枯れた声。

かすれた不鮮明な発音。

「ゆえに、モビルスーツを使い、地球上での軍事的脅威を永久に排除するという考えに至ったわけだ。

よって、諸君らは国家という概念を永遠に地上から抹殺する、失礼、

・・・

「いいです。抹殺です。」

「国家という概念を取り払うべく、ロシア、アメリカの軍事的脅威を排除するのだ。」

「地球にある軍事国家はすべて消します。我々の手で。MSで。複数の笑い声。

含み笑い。

「ロシア、アメリカが地図から消えるなら喜んで参加します。」

「安室曹長。張り切りすぎだが・・・」

笑い。

複数の含み笑い。

「いえ、日本人ですから。坂本竜馬さんの思想がありますから。」

さらに、笑い。複数の雑音。

ノイズ。

ノイズ。

「アムロは、リョウマか？」

冷やかし。音。金属音。

怒声が少し。

「静かに・・・」

誰？

誰の声？

「ロシア・アメリカが展開する機動艦隊を殲滅する。太平洋上ではじめてのモビルスーツ戦が始まる。

諸君らの手で、宇宙世紀の歴史が新たに開闢するのだ。」

歓声。

大きな歓声。

音。

音・・・？

銃声！

何？

何が起きた？？

途切れた。

ツー、ツー・・・

赤い彗星（前書き）

隠された人類補完計画とは？
人類の再生とは？

赤い彗星

過ぎ行く夏の季節

熱をなくしたような風が吹く。

涼しさと、寂しさが風となり、変われなかった季節が過ぎていったような後悔がまとわりつく。

いつまでも。

翳りを感じる夕暮れの空、天空にひとつの星が瞬く。

沈みゆく太陽は雲を赤く染めはじめ、青かった空の色は次第に蒼く変わっていく。

やがって街の灯りがともりはじめ、走りゆく車の列は長い光の帯となる。

家路に急ぐ人々、これから職場に向かう人達。

交差する人々の歩み。

バス停に並ぶ人の影が沈む太陽の角度で長い影になって伸びていく。影絵のように、行き交う人々の姿がおぼろげになっていく。

沈みゆく太陽の淵は、一瞬の輝きを放ち地平線に光の輪郭を作り上げる。

深くなつた空の碧さに潰されるように、くすんだトキ色に輝いていた雲が

空と地上との境界線を光の筋で撫でる。

そして、闇が訪れ、夜になる。

僕は、夜の街を歩いている。

大学4年。

就職はしない。

親はいない。消えた。どこかに。

それは、僕にとって大事なことや大切なことではない。

たぶん、そう。

一人で生きてきたなんて、言わない。

いや、弱気が出る前に白状する。

たぶん、

一人で生きてきたんだ。

殻に閉じこもって生きてきた。

矛盾に満ちた長い時間を過ごしてきた。

心の葛藤。

自ら高い壁を築き、固い殻の中で膝をかかえて浮かんでいたような
感覚を覚えている。

奇妙な浮遊感覚の中であてどない思考を繰り返し、答えのない答え
探し求めていたんだ。

そういうことって、悲しい話かい、それとも愚かなことかな。

同情は嫌いなんだ、なにもわかっていないのにわかっているような
顔で近づいてくる大人には、無言でまなざしを向けるようにしてい
る。

唇から出る言葉は、嘘を生み出し都合よく事実を捻じ曲げるから。

僕のまなざし、強い相貌でいらんでいるように感じたら、それは勘
違いだ。

僕は、眼が弱視で強い光に弱い。

だから、色素偏光バイザーを常にかけている。

コンタクトにしないのは、見たくないものはバイザーを外すことに
よって簡単に出来るから。

視野がはつきりしないぼんやりした風景に沈みたい気持ちがあった
ら、バイザーを外す。

だけど、バイザーは必需品なんだ。
遺品。

死んでしまった親友が、ベッド越しに震える手で渡してくれたバイ
ザーなんだ。

「出会えてくれた人が勇気をくれるよ、君にね。生きる勇気を。き
つと。」

寄り添って、手を携えてくれる人が現れるよ。

悲しみさえも、超えていくんだ。

手を握ってくれないか。もうすぐ消えそうなんだ。意識が、ぼんやりしてきた。・・・」

僕は、哀しみてさえ超えていく約束を冷たくなっていく友の手に手を重ねて誓った。

「もうひとつの未来で、待っているから・・・。悲しむなよ。シャア。」

「

夢を見た。

浮遊するベッドの上で幾度も繰り返し見る夢、あるいはシャア・アズナブルの原風景。

宇宙空間に漂っていると奇妙な夢を観るものとシャアは思った。

ゼロ大戦を生抜くために『保存』され『オリジナル』なままで解凍されて、

宇宙世紀に生きている今の自分のことを思うと、冴えない含み笑いになってしまう。

僕は生き続けているよ。友よ。まだ、まだ、だよ。・・・簡単には死なんよ。・・・

僕の親友は、どのくらい前に亡くなったんだろう？と考えることと、自分の年齢を換算することは同じで

ゆづに刻ときを超えて、1世紀以上の時間が過ぎ去っていた。

果てしない時間をコールド・スリープで過ごした。

100年分の夢をカプセルの中で過ごした。

コールドスリープの間、人は夢を観ないと言った技術者たちは、やはり嘘をついたようだ。

100年分の夢の観た。

その記憶と、遠い過去の記憶が混じり、記憶障害を起こす。

凜・・・

『凜』

凜という少女の名前と、ぼんやりした面影が夢の中を通り過ぎるとき 甘酸っぱい嗅覚に包まれて切なさに押しつぶされそうになる。凜を探さなければ、いけないような気がする。

隣にいて、手を携えてともに生きていける唯一の人のような気がして仕方がなかった。

凜は、ラリアとは違った感覚を持っている。

宇宙世紀に はぐれてしまった同胞を探したい要求を、シャアは止めることは出来なかった。

「シャア大尉。追跡中の連邦の艦ふねに追いつくころだ。」

「ブリッジに上がらずに、MSに乗り込むよ。そういう器用さはもっているから。」

「わかっている。気に障ることは言っていないつもりだが。戦闘には集中してくれ。以上だ。」

「乗り込むMSは？」

「汎用ザクで十分だろう。新型はいらなと言ったのは大尉の申し出があつたからな。」

両脇を新型MSで援護するから、構わず連邦の艦ふねを沈めてほしい。」

「時間はかかるがそうしよう。」

そういうと、シャアは通信回路を絶った。

眼を覚ますためにシャワーを浴びいく。

ブリッジの艦長席に座っているバーニング少佐は、シャアが生まれつき備えている不遜な態度にイラつきの限界にきていた。

「生意気な小僧め・・・」

「艦長。シャアなど連邦崩れの傭兵にすぎず、・・・と考えれば腹もたたないでしょう。」

マクベと名乗る痩せた身体と縮れた髪を長く伸ばした男は艦長席に近づいた。

両手に携えていたコーヒーカップのひとつをバーニング艦長に渡す。

「ありがとう。ミスター・マクベ。オリジナルのシャアには手を焼いている。」

「そうでしょうなあ。」

オリジナルがゆえに、ニュータイプの覚醒など起きないでしょうし。性格がゆがんでいたり、こころが折れやすいんでしょう。

ただ、オリジナルだから環境順応力は宇宙世紀のどの人類より優れた資質をもっているのも確かですね。」

「私にはわからんね。化石のような大昔の人間が優れているなんて到底思えない。

シャア・アズナブルという名も偽名にすぎない。奴は何者なんです？マクベさん。」

バーニングは、疲れ果てたグリズリイのような腫れぼったい瞼を塞ぎ、ため息を漏らす。

マクベは、バーニングが座るキャプテンシートの袖に左手を預け、静かに時間をかけて

コーヒーを飲み干す。

キャプテンシートにあるホロ・ディスプレイには、湯気に遮られてはいるが、シャワー室でのシャアの様子がモニターに映しだされていた。

両手を壁にあて、うなだれているように見える。

シャアの綺麗な金髪を、いく筋もの水滴が流れては落ちていく。

「シャアはシャアですよ。赤い彗星のシャアでいいじゃないですか。・・・」

マクベは、なにかを隠しているような不自然な笑みを浮かべながら、バーニングに向き合う。

「ミスター・マクベ。話によると連邦のスレッガーとシャアは・・・マクベの一瞥でバーニングの口は止まった。

その強い視線は、バーニングを戸惑わせる。プレッシャーだ。

「シャアはオリジナル。スレッガーはシャアの遺伝子を持つ男。

シャアとの間柄は親子みたいなもの。双方どちらも知らないことだが。それでいいでしょ。」

「スレッガーは連邦、プロメテウスのエース。シャアのクーロンにすぎない・・・」

「そこは違いますよ、バーニング艦長。」

スレッガーはクーロン化されたものとは違います。

昔ながらの方法で生まれてきましたよ。」

「・・・?・・・」

「まっ、自然に任せて生まれてきた男です。今時 珍しい『出産』という型で生まれてきましたよ。」

シャアの遺伝子と産んだ母の遺伝子を継承しています。

スレッガーもオリジナルなんですよ。」

『人類としての系譜』が我々とは違います。」

「ふむっ・・・。」

「古い人類からすれば、我々の系譜こそ違つと言われそうですが、仕方がないでしょ。」

今や、オリジナルの人口は地球圏、宇宙圏 合わせても総人口の1%にも満たない。」

西暦の時代に『保存』され、宇宙世紀に『解凍』された人類は、絶滅するかもしれない種族といえますねえ。」

で、彼らのDNAはとても貴重なんですよ。」

遺伝子情報は、すべてバックアップしていますから。」

彼ら、オリジナルがその日に体験し学習したことは、睡眠時にすべて情報として吸い取っていますよ。」

そういうことは口外しないでくださいね、艦長。」

「もちろん・・・だ。」

「オリジナルを戦わせておいて、こちらが欲しいのは戦闘データのみなんです。」

それを、これからの兵器開発に生かせばタイレル社としてもおおいに都合なんです。」

オリジナルのシャアが戦闘で死亡してもらっては困りますよ。」

究極、わが社が目指しているのは、オリジナルの『生産』なんです。」

精子や卵子の結合で生まれてくる人類の再生と、兵器としての応用が課題なんです。

そうすれば、ネクサス？以上の人型兵器ができますよ。仮にネクサス？としましょうか。」

「とうとうタイレル社は、人間の創造まで、はじめるってことですかね。」

「艦長。そういう皮肉は結構ですよ。」

軍人は職務に専念していただきたい。少し私もしかべりすぎたようですね。

タイレル社が得意とするタイレル・タイマーが、ネクサス？でも継承します。

人口爆発にはつながりません。

きつかり、18年しか生きられない寿命設定をしておきましょう。

タイレル社創業時のネクサス6（シックス）の4年という寿命に比べたら、

ずいぶんとゆるくなりましたが。ねえ。」

「ミスター・マクベ。」

あなたは、私に対して我々と言われたが、どうしても年齢がずいぶんと上のような気が・・・」

「艦長。」

口外しないでくださいね。

実は、私も『オリジナル』なひとりなんです。

ゼロ大戦時に、緊急避難的に人類補完計画を立案した研究者の生き残りなんですよ・・・

宇宙世紀になって、一番最初に『解凍』された『オリジナル』のメンバーですからね。

500年後の未来は、すっかり様変わりしていましたねえ。」

「我々が、睡眠を必要とせず眠らないことも。眠ることを忘れてしまったことをご存じですか。？」

「もちろん。」

知っていますよ。

眠りもせず、『夢』もみない。

結構なことです。

わずらわしいことです。寝ることや夢をみることは。

しかし、・・・

わたしには、寝ることや夢を観る時間はとても貴重な時間なんですよ。とてもね。」

「・・・」

「それから、宇宙世紀が西暦に換算して25世紀であることに最初に解凍されたオリジナルなメンバーは耐えられなかったようなんです。

果てしないショックを受けて自らの命を絶つものが後を絶たなくなつたので、

我々以降の『解凍』者には、少しかり小細工をするようにしたんですよ。

シヤアたちが目覚めるころには、この時代はせいぜい100年後の未来に記憶をいじっておきました。

目覚めさせる作業の過程で・・・ね。」

「シヤアにとつては1世紀分の未来ですな。」

「その通りです。口外されないように。」

ただ、口外されても25世紀という言葉を彼の脳は受け付けませんがね。

そういう小細工は、タイレル社の得意とする分野なんですよ。」

「ミスター・マクベ。DNAの螺旋は時間との調律に因果関係があるということが

注目されているのはご存知か。」

「艦長は、なにかと博識のようです。」

そうですねえ。

吸血鬼伝説や、狼男伝説などは、過去に生きていた『もののけ』の存在ではなくて

遠い未来に出てくるであろう『もの』へのヴィジョンだったかも知れませんがねえ。

現在のDNA工学で生まれ出てきた存在は、必然だったのじゃないかねえ。

やがて生まれてくるものへの予感、当たるようですねえ。

あるいは・・・

空想や妄想から生み出されることではなくて、既に存在していたのじゃないかねえ。

もともと存在しえるものを時間軸がズレて出てくる現象があるのかもしれない。

未来で存在すべきものが、西暦でいう18世紀に既に実在していたいきさつは知りませんが・・・

我々が再生産したものは、人型兵器の失敗作ではありましたが、ね。

「

「ある時を境界にして、時間軸の過去と未来の流れが一瞬、交錯し流れが変わる。

今までも大小、何回も起きている自然現象。

そのタイミングは、長い宇宙の歴史の中で、素数と関係があるそうです。

場合によっては、跳躍して大いなる過去や未来に『もの』や『情報』が

飛ばされることがありえるのでしょうか。

ゼロ大戦が勃発した西暦2010年の8月。それは、最大級の規模の出来事であったとラングレイ博士は論文に寄稿されています。」

「わかりません。しかし、理論科学上ではありえるでしょう。

最近ではその現象がおきたのは、今から2年前の8月のひとつきの間ですね。

時間の逆流減少が起きていたようですよ。

私は何も気づきませんでしたでしたが、そういうものなのでしょう。」

「シヤアも一族ですか。ミスター・マクベ。」

オリジナルの中にバンパイアが数%いましたな。」

「バンパイアとは、可笑しな。」

確かにコールドスリープから目覚める姿は、中世の時代、吸血鬼が棺桶から蘇る様子に似ていなくもない。

吸血の習慣などはありませんが、陽光過敏症ですねえ。

太陽の日差しの下では、皮膚が爛れ、視力をなくしてしまう。

外宇宙に向けた体質のオリジナル達のことですかね。」

「いや。吸血の習慣もあるように聞いている。・・・」

今、眠った状態で待機しているパウード・スーツ要員は、オリジナルのバンパイア部隊。」

「私の私兵ですよ。私兵にすぎない。」

それを今回は、艦長にお貸ししましょう。存分に用兵して頂きたいですな。」

「あなたも、一族でしょうに。たぶん、その青白い肌が私にそう思わせる。」

「こつも長く生きれば、肌も不健康に青白くなりますよ。艦長。」

タイム・ドライブ

セイラが眼を覚ました時、はじめに聴いたのが兄の声だった。

私は・・・だ・れ・だ・れ・・・な・・・の・・・。

身体はなく、魂ソウルだけの存在のような虚ろな靄カゲが、セイラのすべての感覚を薄いベールで覆っているようだった。

コールドスリープから目覚めても、液体の中で漂っていた。

液体の中に浸っていても、呼吸ができる。

理由は、わからないけれどセイラの肺は深くゆっくりとした呼吸を自然に繰り返していた。

コールドスリープ装置は、ゆるやかにセイラの肉体と意識を覚醒させていく。

まだ、ぼんやりした意識の中で、様々な景色が開いていない瞼の下でいくつも過ぎ去っていく。

欧州のいずこかの古城。

掲げられている王家の紋章。

騎馬に乗じた騎士らしき集団が、甲冑を鳴らしながらセイラの面前に近づく。

首領らしき長身の騎士がセイラの面前で剣を腰から振りぬき、こつべを垂れる。

両手で長尺の剣ケンを、白い甲冑の男はセイラに献上する。

セイラは、その甲冑の奥に輝く眼に親近感を覚える。

金髪の前髪から、双眸がのぞきみられて、兄であることを知る。

悪戯な眼で笑い、優しい眼差しをセイラに向けた。

（兄さんが、無事に戻ってきてくれた。！）

ただ、それがセイラは嬉しかった。

セイラは、王家の椅子に坐しており、立ち上がるうとした・・・

そのとき、セイラの観ている景色が乳液状の靄カゲに覆われて、白くホワイトアウトしていった。

セイラは思わず前方に両手を差し出し、懐かしいものから無理矢理引き離される感覚に精一杯の抵抗を試みる。

涙を、流している自分に気づく。まだ、眼は瞼に覆われ開いてはいない。

いつの時代？

わたしは・・・だれ？

あの白い騎士は、私の兄で、私は、王の玉座に座っていた・・・。座るべきは、兄でなければならぬのに・・・。

再び、白い靄が晴れはじめると、寒く暗い雲が覆いかぶさるように垂れ込める鬱屈した街が眼の前に現れる。

スラム街。あるいは貧民が絶望の中でどうにか1日を生き延びるために、生きている街。

悪臭と疫病が、意識だけで街を歩いているセイラにまとわりつく。

ロンドン。

馬車に、帽子をかぶった紳士が往来する絶望の街より少しはましな石畳の街路に出た。

セイラの意識は思う。

周りの、人々は、私のことが見えているのだろうか？

私を認識しているのだろうか？

ふと、セイラが足元をみると浅いくぼみがあり水たまりが出来ていた。

そこに、セイラの姿が曇った鏡のように映っている。

その時代にあつた服装をして、華美な傘をさしていた。

淑女。

金髪を上のようにまとめて宝飾を目立たない程度にあしらい、淡いピンクの幅広の帽子を被っていた。

セイラは、意識だけの存在で街を歩いていたのではないことを知った。

そのことは、セイラを余計に混乱させてしまう。

気づいた瞬間から、セイラの意識をあやふやに覆っていた膜が取り

払われて視界が鮮明になる。

雑踏の環境音が聴覚を刺激する。

私は、いったい・・・だれなの・・・？

実存する肉体を持ちながらの違和感。

この身体は、私のもの？

それとも、私の意識が誰かの体を借りているだけ・・・？

雑踏をかき分けながら、セイラは行き場所もわからず知らない街をさすらつて歩く。

自分が置かれた状況がまるで飲み込めないことに心が震えはじめ恐怖した。

「アル？」

石畳の雑踏を涙を浮かべながら、なかばパニックに陥っていくセイラの左肘が雑踏の中の誰かの腕に触れた。

セイラが声のする方向に振り向くと、帽子を被り、蒼く見える髭をたくわえた男がセイラに眼差しを流す。

誰・・・だれ・・・なの・・・

男は、葉巻を胸ポケットから取り出すと、マッチを吊りベルトの部分で擦り、両手で葉巻を覆う。

煙が上がり、男の口から葉巻の香りが漂う。

「お忘れか。ミス・アルティシア。」

男の風体も、その声にも、セイラは聞き覚えがなかった。

突然の風のように、セイラの心には親近感とは逆の感情が湧き、両腕の肌が泡立ちはじめる。

「マクベですよ。お忘れか。」

セイラの瞳は、戸惑いの鈍い輝きを放つ。

アルティシア？

私のことを、マクベと名乗る男はそう呼んだ。

「霧の街、ロンドンへお兄様とも一緒に。アルティシア様。」

マクベは、雑踏を細身の体躯で慣れた足取りでかき分け、セイラに

近づいてくる。

セイラは、反射的に数歩後ずさりした。

背中が、背後に歩いている数人にぶつかり、罵声が浴びせられる。

「キヤスパル様を探しだすために、私はヨーロッパ大陸から渡ってきました。」

アルテイシア様も同行なのですね。？」

あ・に・兄・兄・キヤスパル・

「わたしには……」
言葉がでない。

セイラには、認識不能な状況下で出来事が進行しているように感じる。

セイラの呼吸がひどく浅く速くなる。

「アルテイシア様もキヤスパル様も、ルーブル美術館にある肖像画で並んで描かれている当時のまま。」

いつまでも、若々しい。

マクベもキヤスパル様の騎士団でお仕えしましたものでございます。遠い昔のようで、つい最近のような気がしますね。」

ルーブル美術館に展示されている絵画に、セイラの肖像画があるということとはまったく意味がわからない。

セイラは、マクベと名乗る男がセイラのことを人違いしているか、ただの誇大妄想癖の狂人のような気がしてきた。

「お忘れか。」

マクベの働きを。

キヤスパル様とエルサレム奪還のために幾度となく生死をともししてきたことか。

マクベ、そしてキリコはキヤスパル様を常にお守り通してきましたよ。

しかし。

今、私がキヤスパル様とキリコを追ってイギリスくだりまで来るような立場になるとは、いささか長く生きましたかな。」

セイラは、話の筋が読めないままも、エルサレム奪還の日々とキリコという名をこころに留めた。

「異端者。」

異能者……。

とくに、キリコは、不死の男。

火刑にかけられても燃えさかる炎の中を生き続け、焼け落ちた処刑台から生還しております。

幾度となくキャスパル様の身代わりを務めておりました。」

一息いれて、マクベは不気味に唇の両端を上げた。

青白い顔色の蒼い髭の奥で笑みがこぼれる。

「記憶をなくされたか、ミス・アルティシア。

それとも、私を嫌っておられるか。

私は、この街ではいささか名の知れた男。通称、『M』（ムウ）と呼ばれています。

バンパイア・ハンターMと。」

セイラは気づいた。

そして、かすかに聴覚になにかが聴こえてくる気がした。

セイラは、この雑踏の中で身の危険が迫っていることを感じ肌が総毛立つ。

やられる！

アラーム音が、響く。

このようなドレスでは、特殊戦闘部隊仕込みの戦闘ができないとぬかむる足元で構えをとろうとする。

アラーム音に聴こえたものが次第にメロディになり、セイラに懐かしさ呼び起こす歌詞がついてくる。

あつ。

セイラは、眼と口を大きく開いた状態でまぶしい白い照明の中を漂っていた。

液体の上に半ば浮かび、漂っていた。

セイラのコールドスリープのパッケージは開き、覆っていた半透明

なシールドは上方に緩やかに上がっていく。

全身が裸であることにはすぐに気付いたが、まわりに同じように眠りから覚めたような人の気配を感じた。

「セイラ、ずいぶんとうなされていたようだな。覚えてるかい。」
セイラより、先に目覚めえて身支度を整え終えたような顔をしてジェリドがいう。

「ジェリド。コールドスリープ中に観た夢は、記憶に残らない。そうでしょ。？」

「そうだ。俺も夢を観たような気がするが、覚えちゃいない。たぶん、救われない夢だろう。現実だろうが夢だろうが、俺は救われない気分さ。」

バーニングから起きてすぐに、戦闘指示が出ている。「ジェリドのはつきりとした声が、セイラを現実に引き戻した。」

「そろそろバーニング艦長と言ったら・・・」
諭すようなセイラの言葉にジェリドが目頭を押さえて眠そうに応える。

「バーニングでいいよ。俺たちは、マクベ伯爵の指揮下にある軍隊組織だから。」

少し、あくびをしてジェリドは続ける。

「セイラには、最新鋭の戦闘機が待ってるよ。」

シルフィールド・Mark-?。

マウアも一緒だ。

2人は、モビルスーツ部隊と連携してくれ。

パワード・スーツを着込んだほかの連中は、敵艦に乗り込んで白兵戦を行う。

俺は、その指揮をとる。ユー、コピー。？」

セイラは微笑んで応える。

「アイ・コピー」

セイラは、コールド・スリープから目覚める数秒間に去来した『夢』を記憶していることを黙っていることにした。

先ほどまでの夢はリアル過ぎて、中世の街で過ごしていたのは現実ではなかったのか？

そう錯覚させるに十分だった。

長い宇宙での生活での記憶障害なのか、今のセイラには判別は出来なかった。

マクベ伯爵と、夢の中でマクベを名乗った男は似ているようで、違っていたような気がする。

しかし、なぜかもっている雰囲気似ていなくもない。

コールド・スリープの目覚めのたびに味あう軽い頭痛と、吐き気がそういう想念とともにセイラの気持ち余計に悪くさせた。

セイラは、コールド・スリープ装置の液体がすべてなくなったあとに、時間をかけてゆっくりと立ち上がった。

「セイラ」

2つ向こうのコールド・スリープ装置から目覚めたマウアがにこやかに笑っている。

「目覚めに、これを。」

マウアはセイラに軽く投げる。

受け取ったものを、セイラは口に含んだ。

「コールド・スリープに入る前に、育てた観賞用のイチゴが実をつけていたんだ。

おいしい?。」

ガウンで体を覆いつつ、セイラは応える。

「すごく甘いわ。マウア。」

「ジェリドも上手く育つといいのね。」

セイラは、マウアがジェリドへの特別の想いを持っているのを、昔から知っていた。

「向こうで、ジェリドがくしゃみしているかも。」

そう言っつて、セイラは微笑んだ。

閃光の中で・・・（前書き）

地球連邦政府、連邦機動警察機構のセイラとジエリド・・・
反連邦組織のセイラとジエリド・・・

閃光の中で・・・

メイサ中尉が乗ったMSのAI（簡易量子コンピュータ）には、デブリ、微小天体の位置と大きさ、それらの予想される軌道の情報がナノバンド域超高速レーザーデータ通信で送られている。

レイ・マドンナの中枢コンピュータは、高高速演算処理をして、3機のMSモビルスーツの機動速度にリンクしながらそれぞれを追尾していた。レイの中枢コンピュータの半分は、コンピュータ・ウイルスの汚染のため稼働が出来ない状態であった。

そのためにマシュー技官らの人の手を必要としていた。

美樹・ハートネット3等技術士官補は、フラウ・ホッパー少尉の専任オペレーターを担うことになった。

………

………

：

メイサ中尉のMS内コクピット。

メイサ中尉が握る操縦桿と足元のペダル状の装置の操作に関わらず、宇宙そらに浮かぶ浮遊危険物の回避はAIが自動的に回避してくれるシステムが稼働していた。

左側面のモニターにモリス・クライトン粒子の散布濃度とレーザーデータの受信感度が表示される。

ノイズがひどくなっていた。場所によっては受信感度がひどく悪い。メイサ中尉は軽く操縦桿を握り、デブリを避けつつ作戦行動を行う。メイサのあとに、フラウ少尉のMSが銀色の機体を輝かせて続く。そのあとを、カニングラムが追う。

フラウのコクピットを覆った360°ビューのモニター画面のブルースクリーンに、10メートルほどのデブリが急速に迫ってくる。

フラウの握った操縦桿は、フラウのMSモビルスーツの前方に障害物はないと判断し、常時オイルグリーン、クリアを示していた。

フラウは、AIの判断を信じつつ進路を保つ。

接近してくるのはコロニー建設で不法投棄された大きな建設機材。瞬時に、フラウのコクピットを眼の前でかすめとんでいく。

AI（簡易量子コンピュータ）がMSモビルスーツの操縦に介入し、MSの機動をかすかに変えたのでデブリはフラウのMSをかすりもしなかったようだ。

セフティ・マージンは十分とあってあるようだが、パイロットにとって、とくに若いパイロットにとって身が縮む思いだ。フラウは操縦桿の感覚ですぐに理解する。

身体に感じるGの変動でも。

コクピット周りのエアバックが開き、また収納される。

AIが介入したときには、操縦桿を握るフラウの手の平の操舵感覚が一瞬だけ軽くなり、ギアが抜けたような不自然なニュートラル（N）さが手に残るのだ。

パイロットが行わなければならないデブリ回避の手間が省けるとはいえ、フラウは落ち着かない。

もちろん、オフ回路があるのでAIの介入を絶ち、デブリや微小天体への衝突回避をパイロット自身の技量で行えるが、現実、MSモビルスーツでの戦闘で操縦と戦闘を両方同時に行うのはかなり難しいといえた。

『フラウ少尉。聞こえますか。』

美樹からの音声通信がフラウのノーマルスーツの中でノイズをまじえて届く。

『ハートネット技官、聴こえています。不思議な気がします。』

『どういふことかしら？・・・』

『だって、ひとりじゃない気がするじゃないですか』

強襲揚陸艦『レディ・マドンナ』のブリッジに座ってフラウのMSモビルスーツの軌跡を追いながらサポートをする美樹は、インカム越しに聞こえるフラウの声に弱音を感じた。

『大丈夫よ。私たちがついてるから。心配しないで。』

『ありがとう。ハートネット技官。信じてます。』

『フラウ少尉。これから、あなたのことをフラウと呼ぶから。私のことは気楽にミキってよんで構わないからね。』

『それじゃ、・・・ミキ。誘導願います。』

『アイ・コピー』

インカム越しに、言葉にならないものをフラウとミキは共有しはじめた。

複数のデータ端末装置にリアルタイムに表示される宇宙そふの状況を、ミキはフラウに送り続ける。

ときに、言葉を添えて。

戦闘情報だけでなく心理面でのケアもフラウには必要だとミキは思った。

人の『力』が試されていると。

戦争や戦闘は人の力が試される究極の状態。極限である。

AIからのレーザーデータ通信で無機質に送られてくる『正確な』情報より、人の『声』を介した情報や言葉にならないものにフォウのこころも強く惹かれる。

人と人との『こころ』のつながりが、人を何倍も強くしていく。

『光学カメラが3機のMSモビルスーツらしき機影をとらえています。フラウ。気をつけて』

『ミキ、それは偵察行動だと思いますか。』

『たぶん』

『それでも、チャンスがあれば戦闘をしかけてくるでしょうね。』

『情報収集が目的とはいえ、相手の戦力を少しでも削ければ次の戦闘のとき楽になるわ。』

『こちららも、相手の戦力を削きます。』

メイサ中尉が、音声通信に介入する。

『フラウ。！お喋りに気を散らしていると堕ちるよ。！！』

戦闘指揮官であるメイサ中尉とは、音声通信を含めマルチチャンネ

ルになっていた。

『聞く気がなくても聴こえてきた。

フラウ。

・・・

機動パイロットとして適正がなければ、MSモビルスーツを降りな。

オペレーターと、親しくなると大怪我するよ。！！

ちよつとした甘えで墮とされる。！

判断をゆだねられてるのは戦闘に直面している機動パイロット、自分自身のみ。

操縦桿から浮気していると、MSモビルスーツにあつさり裏切られるよ。

オペレーターの指示より状況を見極めるように自らを磨くんた。！

フラウ。！！』

メイサ中尉のMSモビルスーツの頭部が、フラウのコクピットのほうに振り向く。

『メイサ中尉。どうやら赤い奴が、出てきたようですよ。』

カニングム少尉の声が、ノイズ交じりに届く。

『偵察行動だろう。最初のコンタクトで戦闘行為はありえない。』

『レディと不明艦の航路が、この宙域で遭遇する機会は3回です。

量子コンピュータがはじき出した正確な予想値です。』

カニングムが咳き込む。ノイズ交じりにかなり聞き取りにくくなっている。

『3回目に総力戦となる。小惑星群に一番に近づく2回目のコンタクトまでに『核』の推進剤を目覚めさせるよ。』

『それも、俺たちがMSモビルスーツを降りてやるんですかい。』

『カニングム、冗談いう余裕があるね。それをやるスペシャリストはパスワード・スーツの連中さ。』

真田大尉が、核ミサイルの封印を剥がすのさ。』

『中尉。』

宇宙空間での核爆発は、限定的で効力は望めません。

大気のない宇宙空間での核爆発の威力は、地上での核爆発の半分以下か100分の1程度ですよ。』

『わかってる、カニングム。』

ただし、大気にかわるものがあるよ。

モリス・クライトン粒子が、大気中の核爆発に匹敵する作用を及ぼす。』

『そ、そんなことを考慮していたんですかい。』

『テレマン艦長さ。モリス・クライトン粒子との相互作用でプラスマが多数発生する。』

巨大な雷の大渦だ。さしずめ、神の雷作戦。いかすち』

メモリー・パッケージ

シヤアのモビルスーツがカタパルトデッキから射出される。

射出時に、若干の艦内大気と射出ガスが湧き上がり、光学迷彩を施したシヤアのMSの輪郭を一瞬捉える。

通称、ザク？（MS-06S）と呼ばれるギリシア神話に出てきそうな人型の頭部に一つ目をやどしたMSは、シヤアの操縦桿の操作にダイレクトに反応して、母艦である駆逐巡洋艦の艦橋を左旋回する。

通常の3倍に締め上げた操縦システムへのフィードバックは、並みの人間ではまっすぐ跳ぶことさえ不可能なほどセンステイプに変更されていた。

シヤアのMSの後続の2機のMSがウイング隊形で同じような軌跡をたどる。

2機のMSは、頭部にザクと同じように人の一つ目のような大型の移動観測装置を備えているが、デザインはまるで違っていた。

2機のMSに搭乗しているパイロットは、レイモンド・レイ少尉とエマ・シーン少尉。

2人は、元は地球連邦のプロメテウスの軍人であり、MS専任のテストパイロットだった。

2人は、ある出来事で連邦のイデオロギーに疑問を持ち、最新のモビルスーツの情報とMS2体をオーストラリアにある連邦の特別管理区から奪取してきた。

連邦からすれば背信行為であり、裏切り者である。

1体は、量産化が目前で最終テストのMSZ-006。

もう1体は、プロトタイプでかなり不完全な状態の、RX-93。

どちらも、連邦では通称はガンダムといわれている。

連邦から、奪取したガンダム2体は、エマ少尉が乗っている駆逐巡洋艦にはない。

そのかわり、エマ少尉が搭乗しているMSはRX-139、ハンブラビと呼ばれている。

単純な可変機構を備え、完全にトランスフォームをするとMSから小型のMAに姿を変える。

『エマ少尉、またジョンレノンのイマジンか。』

エマ・シーン少尉が無伴奏で微かに歌っている。

レイ少尉のノーマルスーツの中で、エマ少尉の歌うイマジンのノーヘブンという歌詞の一部が脳裏をかすめ残響のように残る。

『エマ少尉、ジョン・レノンは地球に住んでたアーティストに過ぎない。彼には、世界がまだ地上と空の境目くらいにしか見えていなかった時代だから。』

その遙か上に、空の上の宇宙があることを意識して考えてなんかいなかったんだよ、きっと。』

シヤアがレイ少尉の通話に割り込む。

『レイ少尉はどう考える？。』

『僕は、ノーヘブンだとは考えないです。地球の重力から離れて初めて、人知を超えたものの存在を感じるようになりましたよ。進むべき道も運命と考えるようになりました。』

『なるほど。運命か。可笑しいな。』

レイ少尉は、シヤアの含んだ笑いが聞こえた気がした。

どうして、この人は、こうも人を見下げたような物言いをするのだろうかとしゃくに触る感覚を念じて抑えた。

『これから、接触する艦艇にはファンネル武装したニュータイプ専用MSが出てくると予想される』

タイムラグをまだ感じさせない距離からマクベの声が届く。

母艦である駆逐巡洋艦から、まだ遠くない位置を3機のMSは目標に向かつて宇宙を駆けていた。

『おおむね、偵察任務と支持を出しておくが、沈めるチャンスがあればシヤアの判断に委ねる。』

エマ少尉、レイ少尉。』

『了解、それではパスワード・スーツ部隊の出番がなくなってしまう。』
『シャアの声だ。彼独特の言い回しは、含みがあり気をつけないと真意がわからなくなる。』

『シャア、貴君にとって連邦の艦一隻を轟沈させるのはたやすいことだろう。』

エマ少尉もレイ少尉も必要なくできる仕事だが。』

『沈めません、マクベ伯爵。私は、あの艦から大事な人物を救出しなければならぬ。』

ジェリドとマウアーが見境なく白兵戦をしないように願いたい。』
マルチレーザ通信回線を介して、エマとレイはシャアとマクベの会話の語気と抑揚に、他人が立ち入れない諸事情を感じとった。

『赤い彗星といわれるシャアよ。お前が助け出したい人物は、連邦の強化人間として記憶を書き換えられ、人格も破たんしていると思われる。ファンネルを自在に操り、貴君の思いなぞ気にもかけず刃をむけるだろう。躊躇はならぬのだ。』

『連邦の艦一隻、沈めることは私一人でもたやすいこと。それを、成させるがための目付け役が、レイ少尉にエマ少尉。』

エマ少尉の微かな歌声が消え、レイ少尉の眼が泳ぐ。

レイ少尉に限っては、今作戦に関する戦闘指示書に書かれた項目以外に、シャアに対しての特別な『指示』は出されていないかった。

『貴君にとつて戦争の大義よりは、宇宙世紀に暮らす、ゼロ年代大戦を生き抜いた同胞を探し出すことのほうが、あるいは救出することの方が大事あるうことは理解している。』

私も貴君と同じ境遇であるから。』
『違うな。』

すかさず、シャアはマクベの声を鋭く遮った。

『ほう』

マクベの声音が低く沈む。

『私のせいだけではないぞ、シャア大尉。』

アルテイシアの記憶パッケージの内、確かに3セットは私が保管所
有しているが残り5セットは行方がしれない。

貴君がこれからの戦闘で武功をあげれば、それに応じて報奨金と同
じく貴君の妹君の記憶パッケージを

3セットまとめて返還いたそう。』

レイ少尉は、記憶パッケージという言葉に反応した。

レイ少尉が知ってる限りにおいて、『記憶パッケージ』は法律で禁
じられている人道上の問題があるテクノロジである。

記憶パッケージを扱うということは、提供する側も、使う側も連邦
の法律により極刑が待っていた。

跡がつきやすいし、いまだきその危険性を冒す人間がいるのだろう
かと、レイ少尉は訝んだ。

記憶パッケージの概略は、生きてる人間の『記憶』を、量子コンピ
ュータの中に『記録』として保存すること。

脳にダメージが及ぶ事故や病気で死滅した脳細胞自体が保持してい
た記憶は、脳細胞自体をクローン技術で元通り復元しても元には戻
らない。

皮肉にも、コンピュータのソフトウェアの再インテールのように、
記憶を新しい脳細胞の決まった基底に定着させなければならなかつ
た。

量子コンピュータ内の光格子状のユニットの中に、人間一人分の人
格と過去の記憶をパッケージにしたデータユニットを記憶パッケ
ージと呼ぶようになった。

普通は、1セット単位で間に合う。

8セットもいる必要がレイ少尉は理解できなかった。

あるいは、1セットで済む記憶パッケージを意図的に、8セットの
記憶パッケージに分けてしまったのだろうか？何らかの理由で？？

『忘れないでほしい、赤い彗星。シャア・アズナブル。貴君の記憶
パッケージの内、いくつかのセットが無くなったままだということ
を、な。』

高慢なシヤアよりさらに高慢なマクベの高笑いが、マルチチャンネルを通じてレイ少尉とエマ少尉に届いた気がした。

『貴君が探しているその人物は、記憶パッケージを開ける鍵を持っていると思っっているのか？』

アルテイシアと貴君が失くした記憶の断片を。ラプラスの箱を。』

シヤアとマクベのやり取りに緊張したレイ少尉のノーマルスーツの中は、身体が冷え切るほど大量の汗が出ていた。

レイ少尉が左手を伸ばし、コンソールの左端のディスプレイにタッチ・タッチする。

エマ少尉の顔がモニターカメラを通して、新しく開いたウィンドウの中に観てとれる。

エマ少尉は、いたって平静で、ノーマルスーツのアイ・サイト（視認装置）を上手に使ってバイザーの中で食事をとっていた。

『エマ少尉。シヤア大尉とマクベ准将の間になにかあるのか。』

シヤアにもマクベにも聞こえているのは覚悟の上だったが、僚友のエマ・シーン少尉に聞かすにはおれなかった。

『連邦の強襲揚陸艦『レディ・マドンナ』^{モビルスーツ}から出たMSは、いずれも3機。

ファンネルを6連装したタイプとは違うんだけど・・・』

まるでレイ少尉の言葉を受け取らないように、エマ少尉は語りながらノーマルスーツの中で伸びたチューブから食事を喉に流し込んだ。

『映画やドラマとは違うの。レイ。宇宙での戦闘は、あっさり終わる。

そのかわり、戦闘すべき宙域にたどり着くまでの時間は、無限の長さ。

今作戦のドッグファイトできる距離まで1時間弱もかかるわ。

戦う時間は、ほんの束の間、秒以下の時間しかからないのに。』

エマ少尉は、操縦桿のすぐ前にあるメイン・ディスプレイにタッチし、立て続けにウィンドウを開く。

『こっちは、駆逐巡洋艦。^{モビルスーツ}MSは、我々の他に、まだ10体が残っ

ている。

生きて帰ってくれば、MSモビルスーツの乗換可能よ。」

エマ少尉の言葉が、シヤアとマクベの話を完全に絶ってしまったようだ。

「シヤア大尉。戦闘指揮官である貴君に、まかせることにする。

状況に合わせて戦闘を組み立ててくれ。約束は守る。私が持っている記憶パッケージは必ず返そうぞ。」

シヤアが応える。

「戦闘宙域まで、52分18秒。カウントダウン継続中。マクベ准将の気持ちが1時間弱で変わらないことを祈ってます。」

「わかった。こちらも貴君らの無事と武勲を祈っている。」

マクベの声音には、高貴なるものが持ち備えた威厳が重なった。

「シヤアよ、私がアルテイシアの不幸を望むものか。」

シヤアの率いる3機モビルスーツのMSへのレーザ通信回線をいったん閉じると、駆逐巡洋艦「エンジェル・エコー」の艦橋ブリッジの中で、マクベはひとり

呟いた。

凜 2

「凜の話聞いてるとなんだか・・・」

「眠くなるなんて言わないよね。」

「まあ、そうだね。それで続きはどうなるのかなあ。」

「金髪の貴公子、シヤアはね。」

「赤い彗星のシヤアは、アニメのまんまだね。凜は、女子のくせにガンダムが好きなんだなあ。」

「ねえ。健太郎。お台場にあるガンダム、観に行こう。」

「今は、静岡にあるよ、たぶん。」

「あつ、それ アイフォン。」

「だめって。これ。凜、くすぐるなあ。ちよい待ち。検索してるから。」

「ねえ。今 どこにあるの？。実物大ガンダム像。観に行きたい。健太郎と行きたい。」

「出た。」

「どこにあった??」

「中国」

「うそ？」

「偽ガンダムだったってさ。」

「もう」

「いたい。わかった。わかった。まじめにさがす。凜、冗談やめよ
うな。」

・
・
・
・
・

「どうしたの。凜。」

テーブルの反対側に座っている健太郎が怪訝な眼差しを私に向けていた。

「こころ、ここにあらずって感じがしたんだけど。」

心配気に健太郎が尋ねる。

「うん、大丈夫よ。」

私は、誤魔化した。

先ほど浮かんだ鮮明なヴィジョンは、懐かしい匂いを残して切なく消えた。

目の前に座っている健太郎とは違う男性を、同じく健太郎と呼び、川辺の土手に横倒しにした2つの自転車のすぐ近くできれいに晴れ上がった青空を仰いでいた。
たぶん、彼氏であろうその人と笑い、じゃれあった。

楽しくて、奇声をあげてふざけた。
抜けるようなどこまでも青い空に、抜けるような気持ちの高ぶりを
感じた。

私の半袖の制服から出ている2つの腕は、陽に焼かれ健康的に日焼
けしていた。

彼の冗談が可笑しくて、顔を両手で覆うと、高く伸びた私の鼻梁を
彼が、意地悪につまんでくる。

そういう彼に軽く土手に伸ばした右足で、抵抗する。

そして、私の両手は愛おしい彼の頬をはさんで、近づける。

嘘がない眼が、痛いくらい見つめてる。

恥ずかしい。

ただ、恥ずかしい。

私の頬は赤くなる。

なりゆきでキスをした。

初めてのキスは、きっと忘れてしまう気がした。

・・・

「健太郎。ごめん。私、固まっていた?。」

嘘は続かない。

「いや。ほんの一瞬だよ。気付かないほどの短い時間。」

そう話す目の前の健太郎に、シンパシーではない感情が湧き出す。

元気な、陽気な、弾けた自分のヴィジョンが目の前を切なく映って

消えたあとに、さえない彼氏とさえない自分。

さえない状況に、違和感を覚えた。

先ほどまでの決意めいた心が揺らぐ。

目の前に座っている健太郎を好きで愛し続けるなんてありえないと、
こころ変わりした自分に驚く。

確たる理由もなく、湧き上がる嫌な自分の気持ち。

それが、私の本性なら私は私を軽蔑しなければならぬ。

「健太郎。ときどき感じるの。この世界に、違和感を。」

「凜が、何を言いたいのか。僕にはわからない。」

私の気持ちが変わってしまったのか、健太郎の声に鋼鉄のような冷たさを感じた。

「生きてる感じがなくて、まるで、まるで……」

健太郎が見詰めている。

「まるで現実感がなくて、夢の中にいるような気がして。作り物のような気がして。」

ネクサスも、宇宙世紀も、コロニーも、すべて創り話の様な気がしてならないの。」

あなたのこと、ごめん。信じるには何かが足りなくて……。」

黙っている健太郎は、眼差しを下げつつむいている。

「私は、覚めない夢の中をさまよい歩いているような気がして。きつと夢の中にいるのよ。ねえ。」

泣き声に近い叫びをあげる。

近寄ってくる人影。

「なにかありましたか。御用のせつは、ここに触れてください。私
がすぐに参ります。」

ほほ笑むネクサス？（ナイン）、プリスはそう言つと長身を折り曲げ類笑みを顔に固めたまま、所定の位置に戻つていった。

そしてマネキン人形のように立ち続けていた。

プリスのエメラルド・グリーンの瞳は瞬きもせず、ただ私を注意深く見つめ続けている。

まるで、私の魂たましいが欲しいように。

「凜。少し落ち着いたら、店を出よう。」

健太郎の優しい声が、冷える私の心を撫でていく。

優しいが、優しいだけの様な気がした。

赤い彗星のシャアに憧れを持つて語る健康な身体をした自分を受け入れて、現実のすべてが違うと否定したくなる。

私が無造作に置いた右肘がテーブルのタッチパネルに触れたので、
3Dホログラムが空間にポップアップした。
そこに、ニュースと広告がながれる。

アナハイム技研・・・、メモリー・パッケージ、事件・・・、・・・

メモリー・パッケージ・・・

記憶パッケージ。

私は、なにか大事なことに気付いた。

転機

エマ少尉は、戦闘宙域に達するまでの間、操縦桿の前のメインパネルを跳ね上げてブルースクリーンに覆われた360°ビューの中に収めた。

手首に巻きつけたガジェットから、細いケーブルをのばし、ノーマルスーツのメットの側面の端子に接続する。

エマ少尉のメットの中で、バイザーに映るバーチャルな風景が目の前に広がる。

エマ少尉の視線移動で、風景が横方向にスクロールされる。宇宙で宇宙の風景を楽しむものは、いない。

多くの選択肢から、グレート・バリアリーフの海を選んだ。

拡がりを感じさせる波の音が、いくつも重なる。

エマ少尉は、ガジェットに触れ、軽くゆすると、ノーマル・スーツのメットが薄い靄のように内側から曇り始める。

メットに充満したガス状の薬物が、エマ少尉の両眼の粘膜を通して浸透する。

視覚神経を通して、全身の感覚が跳ぶ。

そのままエマ少尉が座っているリニアシートは、リクライニングして横倒しになった。

エマ少尉は、仮想現実の中で東の間の休息をとっているはずだ。

彼女は、今 グレート・バリアリーフにいる。

覚めるまで、なんの疑いもなく楽しんでいるはずである。

完全に近いバーチャル・トリップは、記憶パッケージがなくては作れない。

他人の記憶と人格を収めた1セットの量子コンピュータ・チップは、テニスボールくらいの大きさである。

自分ではない他人の記憶を、追体験するのではない。

それくらいなら、すでに西暦の時代に出来上がっていた。

宇宙世紀のバーチャル・トリップは、一瞬の間ではあるが、人格も記憶もすべてその時選んだ他人の人生を生きることになる。

エマ少尉が選んだのは、すでに亡くなっている知人だった。

彼は、エマ少尉の恋人。

彼の人生を追体験するのではなく、彼の代わりに彼になって仮想現実の世界で、彼の好きだった海で泳ぐ。

エマ少尉の両眼から、幾筋も涙が流れ落ちる。

ときに、思い出したように顔がほころぶ。

彼（エマ少尉）は、エマ・シーンに出会っているのか、恋をし愛を育んでいるのか、それとも違った別の人生を送っているのか。

エマ少尉の中でどんな人生が、仮想的に進んでいるかはだれにもわからなかった。

「シヤア大尉。エマ少尉は、操縦をオートに切り替えて、トリップで休んでいます。5分後には覚めますがね。」

「レイ少尉も休息をとるといい。まだ、時間はある。」

レイ少尉が口ごもりながらも、応える。

「僕は、記憶パッケージを使いたくないんです。疲れはとれるかもしれない。でも、1度でも他人の人生を生きた体験をすれば・・・何がおこるか・・・」

「レイ少尉は怖がりだな。あとには、なんの後遺症も残さない。安全性は確立されているよ。」

そうは言いながらもシヤアが休息を取るようには見えなかった。

彼のメット内では音楽が流れていた。

「ビートルズですか？」

レイ少尉が尋ねる。

「違うな。」

シヤアはメインパネルを凝視しつつ、CGで創った戦術シミュレーションを数回繰り返し試していた。

「大尉。僕も軍人でありますから、万が一のことを考えて記憶パッケージを創っていました。」

でも、それがあるのはプロメテウスが管理する施設内にあるのです。

『置き忘れたのか？それとも持ちだす時間もなかったのか。』
作業を続けながらシヤアがレイに尋ねる。

『僕の記憶パッケージを使っている軍部の人間をつい発見してしま
い……。』

レイ少尉は、言い淀む。

『消したのか。すべて？。』

『ええ、プロメテウスの上級将校でした。感情が高ぶり、そのまま
後ろから銃で撃ってしまいました。』

『なるほど。エマ・シーン少尉とは、ここにいる動機が違う訳だ。
スペース・コロニーの自治独立のために反連邦組織に入ったのでは
なく、罪逃れで逃げているのか。』

シヤアの声がひと際冷たく響く。

『僕の記憶や人格を収めた記憶パッケージを見知らぬ他人が・・・、
使っているのがどうしても許せなかったのです。』

レイ少尉の声に鼻をすする音が混じってシヤアに届く。

『レイ少尉。君は、今 いくつだ。』

『えっ？？』

『年齢だよ、レイ少尉。』

少し沈黙の間が空いたあと、レイ少尉が応える。

『16歳です。』

『若いな。レイ少尉は。』

シヤアがポツリと呟く。

『私が探している人は、ララアと言う。間違いなく、あの艦ふねにいる。
』

『大尉の目的は・・・？。その人を艦ふねから救うことですか。？』

『ただそれだけだ。今は。それから、マクベ准将がほんとうは何を
考えているのか、じきに知れるだろう。』

『なにか、知ってるんですね。シヤア大尉は。』

『レイ少尉。君のMSの肩にある有線ケーブルを私のMSにつないでくれ。』

レイ少尉は、シャアのザクに近づくと、ハンブラビの肩からケーブルを引き出し、シャアのザクに接続する。

『他の通信回線はすべて閉じてくれ。コクピット周りのモニターもすぐに切るんだ。』

シャアの思いがけない支持に、レイ少尉は戸惑いを隠せない。

『大丈夫だ。2、3分の交信不能であれば怪しまれないで済む。』

レイ少尉は、シャアの不親切な説明を理解できずにいたが、指示通りにコクピット周りのスイッチを切る。

今、生きてるのは有線ケーブルでつながれた通信回線のみとなった。ハンブラビと、ザクが宇宙を並行して漂う。

『レイ少尉。これから、私が話すことは君には理解できないかもしれない。それでも、聞いてみたいか。』

『……。』

『私が、かつて知っている世界でも宇宙での大戦があった。』

地球圏からスペースコロニーへ棄民扱いされた人々が、地球連邦政府からの独立を求めての戦争だった。』

『……。』

『私は、それでも赤い彗星を名乗り、シャア・アズナブルだった。』

一兵卒としてサイド3がジオン公国を名乗って始めたスペースノイドの独立戦争に、この世界ではスペースノイドのことをスペースリストと言っているいるようだが、参加した。その大戦は1年続いた。』

『……。』

シャアは、明りの落ちたコクピットの中で感情をなくしたように淡々と話しはじめた。

レイモンド・レイ少尉は、シャアの言動がひどくおかしく感じ不安を覚える。

『宇宙世紀0079年に始まった独立戦争は、のちに1年戦争と呼

ばれた。

ジオン公国は、結局 連邦に敗れてしまったが、私は私の目的を遂行できた。』

『・・・』

『私は、ジオン公国、ダイクンの息子、キャスパル・ダイクンとして生まれた。

私がまだ幼き頃、ザビ家の謀略により父は暗殺され、母と私と妹は幽閉されてしまった。

ただ、いつかくるであろう処刑される日を待ちながら過ごした。

私は、その頃 ザビ家に復讐を誓ったのだ。

そして、ザビ家が起こした戦争を利用するように・・・、私は、ザビ家の人間を消していった・・・。』

レイ少尉はシャアの言っているのが、いったいなんなのか検討がつかなかった。

ジオン公国などという国は、どこにも存在しない。地球圏にも、宇宙圏にも。

0079年であれば、レイ少尉はまだ11歳であったが記憶の間違いはない。

宇宙世紀0079年の頃、小さな紛争は絶えず地球上であつてはいたがスペース・コロニーを巻き込んだ戦争は起きていなかったはずだ。

『宇宙世紀0093年、サイド3において私はジオン・ダイクンの遺児としてジオンの再興のため、再び地球連邦に戦いを挑んだ。私は・・・、そこでも多くのものを失い・・・』

操縦桿の前のメインモニターが起動し、すべての動力が復帰する。レイ少尉の耳に聞きなれたコクピット周りのメカ・ノイズが戻ってくる。

『シャア大尉。・・・』

ザクにつないだ通信ケーブルをハンブラビの肩に収納する。

通常のレーザ通信回線でシャアを気遣って声をかける。

『気にするな。ときどき、繰り返し観る私の夢の中での物語だ。ゆめものがたりだよ。』

『それをなぜ、今・・・？。』

『レイモンド・レイ少尉が、夢の中に出てくる少年に似ているから。最初に覚醒したニュータイプ、アムロ・レイに。』

赤と白

『白いやつを、視認しても手をだすな。私が墜とす。』

『はい、大佐！！。』

シヤアが、操るMSモビルスーツ、ゲルググ（MS-14S）が混戦が続くア・バオア・クーSフィールドを加速をつけて抜ける。

『決着をつけるときだ。連邦のニュータイプ。』

バトルフィールド戦場から十分に距離をおくと、広漠とした宇宙そらから俯瞰するように戦況が掴めた。

ア・バオア・クーが、落城するのはすでに時間の問題であった。

勝敗は、明らかになりつつあった。

しかし、情報が錯綜し一部の宙域では、ジオンが圧していた。

そこでの連邦のMSモビルスーツ部隊は総崩れに陥り、空白地帯に退避行動をとっていた。

光学カメラで、シヤアのゲルググを視認した連邦のMSのパイロットは、シヤアを避けるより攻撃を選択した。

厚いミノフスキー粒子が散布された中で、連邦の7機のMSモビルスーツが赤いゲルググに襲いかかる。

『ジオンのシヤアだ。シヤアがこのような宙域にいるってことは、連邦の勝利は間違いないってことよ。』

連邦のMSモビルスーツのパイロットの一人は、あえて無線を封させず解放して話す。

7機のMSは、近接戦闘範囲まで近づく。

隊形を逆ウイングに組み直した。

シヤアのゲルググを立体的にとり囲むと、連邦のMSは70mm口径ハイパーバズーカー砲を一斉に構える。

それぞれ照準器で狙いを定め、数弾連射する。

シヤアの赤いゲルググは、ビームソードを振りぬくと、近接した複数の弾頭の信管を一瞬にして融解させ蒸発させる。

発射された弾頭は、不発したままで漆黒の闇へ消えていく。

そして、目標を完全に見失ったかのように、不規則に散らばると7機のMSの背後で閃光が輝いた。

シヤアのゲルググのビームソードは、連邦のMSのウィング陣形の一番深いところ、中央に位置するMSの胴体をなで切り裂く。

コクピットごと、連邦のパイロットは融解し蒸発した。

そのMSの離れつつある胴体と頭部を、赤いゲルググは両脚を使って駆けあがる。

フルバナーで加速していく。

中央を割られた連邦のMS部隊は、隊長機を踏み台にしたシヤアのゲルググを上空に仰ぎ見るかたちになった。

左翼3機のMSがハイパーバズーカーでゲルググを標準器で狙い、右翼3機のMSがビームサーベルを抜き構えてそれを追う。

シヤアのゲルググは、加速をさらに加え、機体を回転させる。

『大戦初期と違って、性能に大差はない。！！』

連邦のパイロットの呻きとも、叫びともつかない声がシヤアのインカムにも届いた。

連邦のMSがシヤアのゲルググの加速運動に追隨する。

猛烈な加速Gが、Gスーツ、パイロット着用のノーマルスーツをぱんぱんに膨れ上がらせる。

シヤアのゲルググと同じような回転運動を行った最初の連邦のMSの機体がねじれると、腕がもげ、足が奇妙な方向にむく。

パイロットの身体が潰れる音がすると、MSの機体はちりじりに宇宙に飛散した。

デブリと化した先頭のMSの残骸は、続いて追う連邦の2機のMSの足を止めた。

2機の連邦のMSは、ビームサーベルを収め、ビームライフルに持ちかえる。

ビームライフルから撃たれた高出力レーザーは、幾筋もの輝きとなってシヤアのゲルググに向かって伸びていく。

そのうちのひとつが、赤いゲルググの左脚をかすめ溶解させた。
シヤアは、モニタースクリーンのウィンドウに軽微な損傷が表示されたのを認める。

左に弧を描くようにしてゲルググは、機体の向きをかえる。

バナーの出力を絞り、バーニアの向きを変えると、急激な減速Gがかかった。

ゆるやかに回転が止まると、連邦のMSモビルスーツに向き直る。

シヤアのゲルググは、ビームソードの出力をマックスまで上げていく。

連邦のMSはビームライフルを撃ち続けながら左右に展開する。

『なぜだ……。なぜ、当たらない!!!』

連邦のMSの無線は解除されたままになっており、連邦士官のつぶやきがシヤアの耳に伝わる。

『奴は、かわしているのか。えーい!!!』

1機の連邦のMSモビルスーツが、近接戦闘範囲まで近づくと持っていたビームライフルをシヤアのゲルググに投げつける。

瞬時に、ビームソードを振りぬくと、上から下へ切りかかる。

シヤアのゲルググは、それをかわし、楯の形をしたシールドを連邦のMSの頭部に押しつける。

『視認できないいいー!!!。』

女性士官パイロットの甲高い声。

連邦のパイロットを覆っていたモニタースクリーンが次々と消える。
シヤアのゲルググの楯シールドの一撃で連邦のMSモビルスーツの頭部は、胴体から引きちぎられた。

ゲルググの突き刺したビームソードが連邦のMSのコクピットを完全に焼き切ると、右脚で連邦のMSを蹴りあげる。

縦方向に回転が加わったままで、残りのMSモビルスーツに漂っていく。

『ジュリエッターアアアアアア!!!』

図太い男のだみ声が、激しい悲しみを伴い漆黒の宇宙宇宙にこだまする。
連邦のMSモビルスーツの動きが、止まる。

シャアのゲルググと対峙したまま、束の間、時間が止まったように静かになる。

連邦のMSの cockpit^{モビルスーツ}が開き、連邦士官が命綱も付けずに、残骸とかしたもうひとつのMS^{モビルスーツ}に向かって緩慢に泳いでいく。

シャアのゲルググに搭載された高性能な光学カメラが、連邦士官の姿を自動追尾しズームアップする。

『慣れないものだ。このような不快な感情は・・・』

シャアがつぶやく。戦闘中に常軌を逸した「ひと」の行動は、シャアに迷いを生じさせる。

内部に熱を帯びたままの頭部のない連邦のMS^{モビルスーツ}の核反応炉は、最後の駆動をする。

数秒後、激しく爆発し、飛散した破片が漂っていた連邦士官の身体を無残に砕いた。

『それほど大事なひとを、なぜ戦場に連れてくるのだ。』

シャアは、無慈悲なほどの冷静さで感傷的になる気持ちをおさえた。連邦のMS7機のうち、4機は戦闘という戦闘をせずに残骸と化した。

かなり遠くの位置に残された3機の連邦のMS^{モビルスーツ}は、残弾をすべて使いきるようにハイパーバズーカーを撃ってくる。

赤いゲルググが背負っている推進装置、シャアはスラストの向きを微妙に変え、寸前でかわす。

赤いゲルググを通り過ぎたいくつものミサイル弾は推進燃料を使い果たしたもものから、白い軌跡の先で青白い輝きを放ち爆発する。

その中のいくつかが、熱源追尾装置と視覚装置がついた弾頭が、回転し赤いゲルググの背後から迫る。

『そういうことか。連邦は南極条約を破棄したわけだ。』

シャアは、呻いた。

『核をのせたミサイルをMS^{モビルスーツ}から撃たせるとは、な。』

シャアの迷いは一瞬で、ゲルググは再びビームソードを抜くと、渾

身の加速で核ミサイルに向かう。
赤いゲルググのビームソードが、核弾頭と推進装置を真二つに切り裂く。

動きが止まった核の弾頭を、赤いゲルググがとらえる。
連邦のMS、残った3機はハイパーバズーカーを投げ捨てると、後方に後ずさりを始める。

核弾頭を右に抱えたままで、シャアの赤いゲルググはビームライフルをかまえる。

背を向け逃走を図る連邦のMSを、ひとつずつ、確実に、仕留めていく。

連邦のMSが背負う核反応炉が破壊され、ほぼ同時に青白い輝きが虚空に3つ咲く。

シャアのゲルググは、未練もなく核の弾頭を手から離す。

それは、戦場に漂うスクラップ群に紛れてしまうと、ただのデブリとなった。

『ガンダム。どこにいる。ララアは、呼んでいるのか。』

シャアの意識がララアの呼び声を微かにとらえる。

宇宙に出て、人が手に入れた自然発生的なAR（拡張現実）に導かれながら……。

シャアの赤いゲルググは、ララアが乗っているエルメス（MAN-8）に向かって一気に加速する。……

ガンダムと対峙するエルメスがいる宙域には、特別な涙が溢れていた。

……

……

……

『シャア大尉。』

エマ・シーン少尉の声だ。

『どうかなさったの?。』

シヤアはノーマルスーツのバイザの色を薄め、エマ少尉に笑顔をつくってみせる。

『いや。なんでもない。エマ少尉。君は、よく眠っていたようだ。』
『そうですか。』

エマ少尉のどこかそっけない返事が返ってくる。

『君は、少し硬い感情を持っているようだ。たまには、柔らかく。』

『シヤア大尉もかしら。』

少し、息をつぎ

『まったく、だな。』

そう応えていれば、シヤアを時より襲うフラッシュ・バックを誤魔化せる気がした。

『すいません、大尉。』

大尉がいつも客観的であられるのは、同じく戦闘を行うものには心強いのですが。

ご自分のことさえ、人ごとのように言われるのは特別な違和感を感じています。』

エマ・シーンは、はっきりものを言う女性だと改めてシヤアは思った。

『ひとごとのように、語っている。照れ隠しがあるのかもしれない。』

エマが応える。

『それが、傷をつくり、傷をえぐることだってあると考えたりしませんか。』

直情型の女性はいつもこれだとシヤアは思った。

カラフル

『トロヤ隕石群。』

カニンガムがバイザーに表示されている座標を眼球を使って視覚移動をさせる。

左まぶたの加減で、座標がズームインする。

『こちらにも、既に確認出来ている。』

MS隊より先にパワードスーツ小隊を率いて先発していた真田大尉モビルスーツからノイズを混じえながらの声が届く。

『さすがに、足が速いな・・・』

メイサがつぶやく。

『それで3段ブースターを使いきったんで、帰還する燃料はありません。』

メイサのつぶやきが聞こえたのか、真田が応える。

時より無茶をするとは聞いていたが、真田大尉に率いられる小隊のことを思うとメイサは頭を抱えなくなる。それでいて、最高の技術を備えた特務技術仕官だから悪くは扱えない。

『真田大尉。核推進装置を目覚めさせたあとは、どうなさるおつもりか。』

まさかメイサのMS小隊にサルベージでもされる気があるのだろうかと不安がよぎる。

『推進剤を注入し核を制御するためにはそれなりの時間が必要となるので、帰還する手立ては考えていませんでした。一刻も早く着きたかった。』

間延びしたような真田の応えに、メイサのバイザーの中で誰かがふきだす声が聞こえる。フラウだ。

メイサの眉間がより、しわになる。

『小隊の隊長である貴官は、帰還する手立てもなく作戦を実行するおつもりか。』

率いられる小隊の隊員の気持ちを決めれば、語気も荒くなる。

『コロニー落としを考えてる連中を一刻も早く阻止せねばなりませんから。』

会話が微妙にずれてることに認識がないことが、真田大尉の特徴かもしれない。

意味は組んでやろう、面倒だとメイサは思う。

『それでいい。真田大尉。技術的なことは、すべて任せる。』

コクピット越しの視覚には、隕石群がまだはつきりとみえるわけではない。

まだ、まだ先。

CG処理されたコクピット周りの全方位スクリーンには、擬似的ではあるが速度を感じさるよう星々や銀河が流れていく。

モビルスーツ
MSという動体に乗っていても、速度感が感じ辛い宇宙。

退屈しそうなくらい変化のない宇宙の風景を長い時間味わうのは誰にとっても苦痛である。

メイサ中尉とカニングムは、強化された特別な人間だとしてもフラウがどこまで耐えられるか。

『フラウ。気分はどうだい。』

メイサがフラウに話かける。

『宇宙が、こんなに色彩がない世界とは思いませんでした。少し、気分が・・・』

インドの貧民街のスラムで育ち、その特殊能力をかって連邦軍に拾われなかったら、こんな寒い宇宙にいなかったかもしれないとメイサはフラウを気遣った。

少々の憐憫。

フラウがまだ知らないことだが、連邦にまだ在籍していたころの赤い彗星がフラウの特殊な能力をかってMSパイロットとして採用したことをフラウ自身は知りしなかった。

あのシャアとフラウは、幾度か地球で面識があるようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6211k/>

宇宙世紀0Q84～アースライトセレナーデ～哀しみのフォウ編

2011年10月6日23時03分発行